文部科学省指定事業

令和４年度「地域との協働による高等学校改革推進事業」

【地域魅力化型】

＜ソピアの旗プロジェクト＞

研究開発実施報告書（第３年次）

令和５年３月

高知県立大方高等学校

Ⅰ　巻頭言　「ソピアの旗プロジェクト」実施報告書の発刊にあたって

高知県立大方高等学校長　　正木　敏政

文部科学省が主催する「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定３年目が終了しました。

この３年の間、新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受け、計画の変更を余儀なくされ、期日の延期やオンラインの活用など、本校職員・生徒にとっても見えない課題に対して、工夫しながら対応してまいりました。１年目は、手探り状態であり暗中模索の日々が続きました。カリキュラム開発等専門家からの指導や協議の結果、少しずつ解決の糸口が見えはじめ、２年目からは学校経営ビジョンに掲げられている「目指す生徒像」と合致したカリキュラム開発や年間指導（グランドデザイン）を設計し、実践に活用できるようになってきました。これには教職員の共通理解が重要であり、生徒の変容とともに教職員の意識改革にもつながってきました。

興味のあることの調べ学習や単発のイベントを考える、何かを製作のみで終わるなどといったことから脱却し、これからの社会に目を向け、AI と共存する社会において、人間にしかできないこと、今までの常識にとらわれず、新たな発想や創造力を養い、思考の枠組みを作り出すことができる力を身に付けることが必要となってきます。本校の生徒たちにも、この事業の経験を生かして、未来を切り開くための必要な資質・能力を身に付けるとともに、地域への課題意識や貢献意識をもち、地域ならではの新しい価値を創造し、新たな時代を地域とともに歩んでいけるようになってもらいたいと期待しています。

本事業においては、運営指導委員会やコンソーシアム委員会で状況を報告し、具体的な実施内容の検討や今後の方向性に対する助言や協力の要請を行ってきました。また、カリキュラム開発等専門家からは、担当者の切実な悩みや思い、新たな課題に対しての指導助言もいただきました。また、本校の実践発表の機会もいただき、教職員の意識改革にもなりました。

次年度からは、高知県教育委員会が策定した、県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」に沿って、これまで培ってきた「地域学」や「総合的な探究の時間」の内容を深化させ、カリキュラム開発等専門家の協力のもと、生徒たちに、これからの新たな社会に立ち向かっていく力を身に付けさせ、郷土の黒潮町に貢献できる人材育成に努めてまいります。地域と一体となり防災教育の拠点校として、他校との交流や学校行事である防災デー等の取組を積極的に発信していきたいと思っています。

最後になりますが、本事業に関して、多くの皆様方、地域の皆様方からの忌憚のないご意見・ご助言・ご指導をいただき、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

今後も本校の教育活動へのご支援・ご協力をよろしくお願いします。

令和５年３月吉日

目　次

Ⅰ　巻頭言
Ⅱ　令和４年度　研究開発の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１
　１　地域との協働による高等学校教育改革推進事業研究開発の概要・・・　１
　２　研究開発の実施体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３
　３　「ソピアの旗プロジェクト」の全体イメージ・・・・・・・・・・・・・　４
　４　ソピアの旗プロジェクトの推進体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５
Ⅲ　探究活動の柱となる科目のカリキュラムと取組について・・・・・・・・　６
　１　グランドデザインの設計について・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６
　　（１）グランドデザインの位置づけについて・・・・・・・・・・・・・・　６
　　（２）作成方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６
　　（３）授業と評価の一体化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６
　２　「地域学」における各学年の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７
　　（１）「地域学入門」（１年生）の取組について・・・・・・・・・・・・　７
　　（２）「地域学Ⅰ」（２年生）の取組について・・・・・・・・・・・・・・１０
　　（３）「地域学Ⅱ」（３年生）の取組について・・・・・・・・・・・・・・１２
　３　「総合的な探究の時間」における各学年の取組・・・・・・・・・・・・１６
　　（１）本校の「総合的な探究の時間」推進体制について・・・・・・・・１６
　　（２）カリキュラム開発等専門家との関わりについて・・・・・・・・・１６
　　（３）「総合的な探究の時間」　１年生の取組について・・・・・・・・１７
　　（４）「総合的な探究の時間」　２年生の取組について・・・・・・・・２７
　　（５）「総合的な探究の時間」　３年生の取組について・・・・・・・・３７
　４　アンケート結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４４
　　（１）高校魅力化評価システム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４４
　　（２）防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート・・・・・４５
　　（３）大方高校の地域貢献活動に関する地域住民アンケート・・・・・４７
Ⅳ　令和４年度　研究開発実施状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８
　１　運営指導委員会とコンソーシアム委員会・・・・・・・・・・・・・・・４８
　　（１）運営指導委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８
　　（２）コンソーシアム委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５１
Ⅴ　次年度に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５４
Ⅳ　令和４年度　研究開発完了報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５５
補足資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６５

Ⅱ　令和４年度　研究開発の概要

１　地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究開発の概要

<table>
<tr><td colspan="2">指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="3">こうちけんりつおおがたこうとうがっこう</td><td colspan="2" rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">高知県</td></tr>
<tr><td colspan="2">令和２～最大３年間</td><td>①学校名</td><td colspan="3">高知県立大方高等学校</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="2">１学年 80 名定員。教職員数 27 名
（令和４年４月７日現在）</td></tr>
<tr><td colspan="2">普通科</td><td>２３</td><td>３３</td><td>２９</td><td></td><td>８５</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑥研究開発構想名</td><td colspan="7">「地域密着型の未来の“地域の創り手”人材の育成（ソピアの旗）プロジェクト」</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑦研究開発の概要</td><td colspan="7">本校はこれまで、総合的な探究の時間において「自律創造型地域課題解決学習」を柱として位置づけ、コミュニティ・スクールの強みを生かした取組を進めてきた。近年は学校設定科目である地域学において地域防災における課題解決に取り組んでいる。生徒たちは、地域に出て地域から学ぶことにより課題解決能力が身に付いており、探究力の向上や地域貢献等への意欲も向上している。
今後は本事業をとおしてつけたい力を育成するとともに、直接・間接に関わらず郷土を愛し誇りをもった未来の「地域の創り手」となる人材の育成を目指す。そのため外部の専門家との連携をもとに、学習指導要領で位置づけられている探究活動を推進し、効果的なカリキュラムの開発を行い、事業終了後も改善を進めながら効果的な取組を継続していく。</td></tr>
<tr><td>⑧研究開発の内容等</td><td>⑧-1全体</td><td colspan="7">⑴ 目的・目標
学校設定科目における「地域学」で推進している町や地域と連携した「防災教育」と、「総合的な探究の時間」における「自律創造型地域課題解決学習」とを本研究をとおして深化させ、「生徒の探究力」「つながる力」「多様性受容力」「マネジメント力」「レジリエンス」の向上を図る。そのために、コンソーシアム等に町内の各分野の人材と町外の有識者を位置づけ、地域との連携・協働を含めたカリキュラム開発を行う。これらの取組をとおして、広い視野と高い志をもった人材を育成することに資するとともに、将来の地域課題の解決に力を発揮することができ、地域の新たな魅力を創造・発信できる人材の育成を目指す。
⑵ 現状の分析と研究開発の仮説
本校が立地する黒潮町は、南海トラフ地震の際の想定において、最大津波高が34mになると推定されており、防災の推進は地域の存続において不可欠の課題である。また、高齢化と若年人口の減少の状況にあり町内への定着・労働人口の確保、町外からの支援人材を育成する必要がある。これらの課題に対して、将来黒潮町や周辺地域において居住し、地域を支える人材となる高校生の資質・能力の育成は大きな課題である。これまでも高校生の若い力と多様な角度からの発想にもとづき、解決策を提案していくことを進めてきたが、更なる効果を生み出すためには、コンソーシアムを核とした幅広い人材との連携のもとで、取組を深化させていく必要があると考える。
ア　町内外の人材との出会いと交流の機会の創出による自己効力感や自己有用感の育成
課題：高知県の西部地域という立地条件のため中央部から離れており、高等教育機関との関わりや県内外の取組への参加も限られているため、生徒の視野は狭いものになりがちである。また、本校に在籍する生徒の中には、自信のなさや存在意義を見出せない生徒もいる。そのため、キャリア意識やアイデンティティの確立が十分ではなく、内向的な傾向にある。
仮説：学校外の人材を積極的に活用し生徒と出会わせることにより、外からの刺激を生徒に与えることで多様な価値観を持たせることができ、自身の価値を感じるこ</td></tr>
</table>

		とができると考える。また、学校外の場で生徒が発表したり、交流したりする経験を重ねるポートフォリオにもとづく肯定的なフィードバックにより、自己有用感や自己効力感を育むことができる。 **イ　開校当初からのコミュニティ・スクールの強みを生かした、地域連携による生徒の地域理解と貢献への意欲の醸成** 課題：コミュニティ・スクールでありながら、多くの教育活動が学校だけで完結している感があり、地域の企業との連携も個々の事業所の課題解決で終わり、その後につながっていないという閉塞感が存在する。そのため、生徒が地域の将来像を描きにくく、町の未来を考えた発言や自身のキャリアイメージに関連づけた発言も聞かれないという状況である。 仮説：地域との交流や各種発表の場に積極的に参加するなど、取組を地域内外に広げていくことをとおして、生徒が地域の将来イメージを持ち郷土愛を育むことができる。また、地域や外部人材と連携した取組をとおして、個々の資質・能力の伸長を図ることができ、直接・間接に関わらず、地域の活性化や新しい価値の創造などに貢献できる人材を育成することにつなげることができる。
	⑧-２具体的内容	⑴ 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画 学校設定科目である「地域学」の時間を核として、地域防災・減災をテーマとした高校と地域との連携を進め協働関係を構築する。併せて、１年次から３年次までを、系統的につなぎ取り組んだ内容は地域内外に発信する。また教育課程外の活動では、高知大学との連携により、地域理解をもとにした防災ツアー等を企画し、生徒がガイドを務めることで発信力やプレゼンテーション能力等の向上を図る。 総合的な探究の時間における「自律創造型地域課題解決学習」をもとに、アントレプレナーシップの精神の育成を目指して、町内の起業家を事例とした「ケーススタディ」を展開する。また、多様な視点や自己のアイデンティティの意識化、イノベーティブ思考を育成するために「アイデアソン」に取り組み、３年間の学びをとおして、これからの社会を生きていくために必要と思われる力の育成に努める。 「地域学」や総合的な探究の時間において、各教科・科目の中での横断的な学びによる展開や、地域資源の活用・ゲストティーチャーによる指導等、外部人材を効果的に活用して、生徒の学びの促進を図る。 これらの取組を推進するために、校外学習としてインターンシップや他校交流、研究者らとの交流等を行う。また、黒潮町役場への訪問や事業所・小中学校との交流、地域の行事への参加等を行い、広く学びの促進に資する。 ⑵ カリキュラム・マネジメントの推進体制 外部人材として雇用する「カリキュラム開発等専門家」と密に連携し、校長をはじめとした校内組織においてカリキュラム開発を推進する。その際、事業統括主任と管理職や外部人材との連携、事業統括主任の研究の推進、校務分掌や教科横断的な取組の展開により、カリキュラム開発を推進する。 作成したカリキュラムについては、取組をとおして振り返りシート、ポートフォリオ、ルーブリック等を活用し、生徒の成長を確認する。 ⑶ 必要となる教育課程の特例等　　特例となる教育課程　　必要なし
⑨その他特記事項		○平成 23 年　文部科学省「学校運営協議会」による地域連携の推進に関する表彰　受賞 ○平成 31 年　内閣府主催防災教育チャレンジプラン審査委員会「防災教育優秀賞」受賞 ○平成 30 年８月１・２日　平成 30 年度「第１回全国高等学校小規模校サミット」参加 ○令和元年７月 30・31 日　令和元年度「第２回全国高等学校小規模校サミット」参加 ○令和 元 年９月 10・11 日　「世界津波の日」高校生サミット 2019in 北海道　参加 ○令和２年度当初に、黒潮町と推進協定を結ぶ。

２　研究開発の実施体制

ア　コンソーシアムの構成

機関名	機関の代表者氏名
高知県教育委員会	長岡　幹泰（教育長）
高知大学	川村　晶子（特任教授・学長特別補佐）
合同会社 Noks Labo	山﨑　直子（代表）
京都大学大学院矢守研究室	杉山　高志（研究員）
黒潮町観光ネットワーク	森田　俊彦（会長）
黒潮町産業推進室	濱口　無双（産業推進係主任）
黒潮町教育委員会	清水　幸賢（教育次長）
黒潮町立佐賀中学校	宮﨑　宏治（校長）
黒潮町立大方中学校	大塚　明人（校長）
高知県立大方高等学校	西村　優美（地域学校協働活動推進員）
高知県立大方高等学校ＰＴＡ	酒井　　稔（会長）
高知県立大方高等学校同窓会	村越　　麗（同窓代表）
高知県立大方高等学校	正木　敏政（校長）

イ　カリキュラム開発等専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習実施支援員の体制

区分	氏名	所属
カリキュラム開発等専門家	杉山　高志	京都大学大学院　矢守研究室　研究員
カリキュラム開発等専門家	川村　晶子	高知大学　特任教授・学長特別補佐
カリキュラム開発等専門家	森　　和美	高知大学　次世代地域創造センター 地域 DX 推進グループ
地域協働学習実施支援員	西村　優美	大方高校地域学校協働活動推進員

ウ　運営指導委員会の体制

所属	役職	氏名
黒潮町教育委員会	教育長	畦地　和也
NPO 砂浜美術館	理事長	村上健太郎
京都大学　人と防災未来センター	教授　上級研究員	矢守　克也
高知大学地域協働学部	准教授	石筒　　覚
地域・教育魅力化プラットフォーム		田中　理恵
高知県教育委員会	教育長	長岡　幹泰

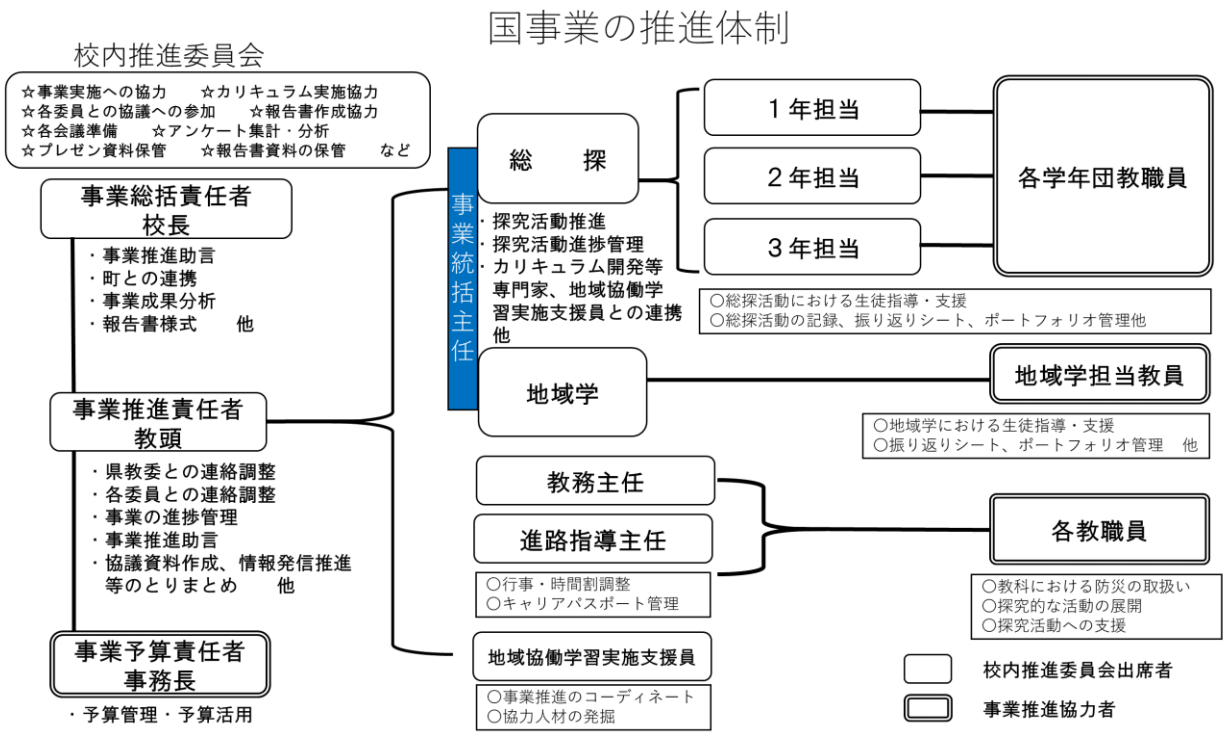
３　「ソピアの旗プロジェクト」の全体イメージ

本研究では、「地域に定住」・「一度は地域外に出るがまた地域に戻って」・「地域外に出て戻ってはこないが、外から応援」する人材の育成を目指し、目的を未来の「地域の創り手」人材の育成として、地域の課題である「防災教育の推進」による「犠牲者０」の思想の実現・地域の「新たな価値の創造」に向けた探究活動を展開する。そして、探究活動をとおして郷土愛を育むとともに、「探究力」「つながる力」「多様性受容力」「マネジメント力」「レジリエンス」の育成を目標として展開する。

本研究における中核は学校設定科目である「地域学」と「総合的な探究（学習）の時間」（以下：総合的な探究の時間）である。

４　ソピアの旗プロジェクトの推進体制

本プロジェクトを推進するにあたり、「地域学」と「総合的な探究の時間」の担当教員を中心に、学校全体での取組となるよう、下記のような校内推進体制を整えた。



本年度はオンラインを活用し、カリキュラム開発等専門家との協議を密に行い、カリキュラムの開発と展開を行った。カリキュラム開発等専門家との協議のもと、事業統括主任、「地域学」主担当、「総合的な探究の時間」各学年担当による事業担当者会を基本的に週１回行い、カリキュラムの展開についての協議を行った。

また、事業担当者と事業推進責任者との協議も基本的に週１回開催し、カリキュラムの展開や進捗状況の確認、課題の共有・解決等の協議を行った。

校内推進委員会に関しては、地域協働学習実施支援員およびカリキュラム開発等専門家の同席が新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響もあり難しかったが、個別の協議等で共有し助言をいただいた。

Ⅲ　探究活動の柱となる科目のカリキュラムと取組について

１　グランドデザインの設計について

（１）グランドデザインの位置づけについて

グランドデザインとは 1 年間の学習設計であり、本校では昨年度より作成している。グランドデザインを作成することにより、1 年間でつけたい力、学年末に期待する生徒像を明確にすることができる。作成過程においてつけたい力のための活動を構造化し、可視化することによって無駄なく、効果的な学習設計ができると考える。このグランドデザインは学習を進める過程で当初作成したものから、進捗状況や到達度合いによって変更することもある。生徒の変容を見ながらグランドデザインに修正を加え、カリキュラムとして完成度の高いものにしていくことで、生徒が着実に成果を上げることができると考える。

（２）作成方法

本校ではグランドデザイン作成にあたっては前年度の中盤以降に作成を始める。まず、前年度のつけたい力に対する到達度を確認し、到達していない部分（GAP）を考慮しながら次年度のつけたい力を検討する。その上でどのようなテーマを設定し、どのような活動を組み込んでいくかを考える。あくまで、活動は手段であり目的ではないことを念頭において、『ブレない設計』がカギとなる。

本校のこれまでの探究学習の課題は活動が目的になっていたことである。何か特別な活動を行えば探究できていると錯覚していたため、1 年間または 3 年間通して生徒自身も教員も何の力が身に付いたか不明瞭であったし、生徒の成長において十分な成果は上がっていなかったと思われる。

（３）授業と評価の一体化

総合的な探究の時間の評価はプログラムごとに『ルーブリック評価』を作成し、つけたい力の到達度を評価している。『ルーブリック評価』の作成にあたっては、『評価作成のための分析』が必要である。卒業時のめざす姿をもとに、３年間でつけるべき力を決定し、各学年で強化する力は何かを設定するもので、これにもとづいた各プログラムの『ルーブリック評価』でなければならないと考える。

『ルーブリック評価』の提示によって生徒はつけたい力とめざす姿をイメージしやすく、活動の目的を捉えやすい。教員は生徒一人一人に応じた到達目標を設定しやすく、また、複数で指導していくうえで共通の認識を持ちやすいと思われる。

さらに効果的に活用していくためには、『ルーブリック評価』にもとづく生徒自身と教員側の振り返りを分析し、次回の授業の指導の方向性を考える学年の定例検討会が必要であると考える。

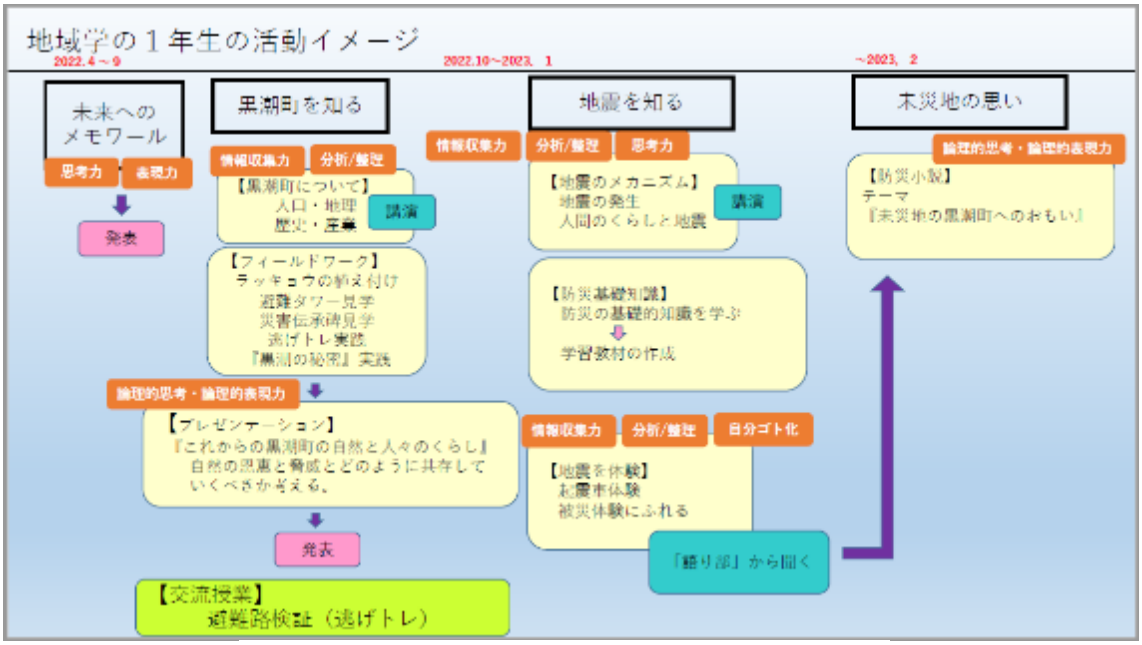
２　「地域学」における各学年の取組

「地域学」は学校設定科目として平成 29 年度からスタートした科目であり、地域創造コースを選択した生徒が受講する。「地域学」では、１年次に「地域学入門」、２年次に「地域学Ⅰ」、３年次に「地域学Ⅱ」の教科を設定している。各年次の担当教員は地歴公民科・国語科・家庭科・商業科の教員が担当し、主担当は地歴公民科の教員が担っている。

（１）「地域学入門」（１年生）の取組について

ア　概要

１年生では３年間の基礎となる「黒潮町」「防災」の知識を習得し、その活動の中で特にコミュニケーション力、多様性受容力、つながる力、探究力の育成を目指す。以下に活動のグランドデザインを示す。



「地域学入門」（１年生）グランドデザイン

イ　生徒観

全体的におとなしい。何事にも誠実に取り組む姿勢は評価できるが、自ら考えて動くという点においては今後に課題が残る。

ウ　活動報告

＜未来へのメモワール＞

一昨年より１年生の最初のプログラムとして取り入れている。３年間の防災学習への導入として有効なプログラムであると考える。『未来へのメモワール』は「災害から守りたいものは何ですか？」という問いかけで始まる。普段の生活の中で何気なく見落としてしまいそうな大切なものを改めて見つめなおし、災害から守るかを考えることで、いかにして災害から守るかを考えるという活動である。大切なものを守りたいという思いが避難意識や備える意識の向上につながると考えている。元々は京都大学が黒潮町民を対象に展開していた活動であるが、本校でも５年前から生徒たちに問いかけ防災学習の動機づけにしてきた。生徒たち

が何を大切なものに選ぶのか、毎年関心をもって見てきたが、今年の１年生には守りたいものを守るための行動についても考えさせた。

県外から入学している生徒の守りたいものはこちらに来る前に母親が渡してくれた手紙。ジップロック（食料保存袋）に入れて濡れることなく、すぐに持ち出せるように保管しておくと書かれていた。これまで地域創造コース選択生、出前授業で小中学生、地域住民から聞き取った『守りたいもの』を見たとき、それまでの自分を支えてくれた何かを選ぶ傾向がある。単に大切なものを奪っていく災害の過酷さを考えるだけではなく、自分のこれまでを見つめ直すことで自分という存在の大切さに気付くことができる有意義な取組である。

「未来へのメモワール」生徒作品

＜避難所研究＞

海抜 22 メートルに位置する本校は南海トラフ地震の発災時には避難所となる。平日の昼間であれば生徒たちもともに避難民となる。避難所の開設は運営マニュアル上、役場職員と周辺地区住民となっている。しかし、これまでの被災地や被災者の聞き取りから、役場職員の到着を待っていては避難所に人があふれかえるという情報を得て、そこから自分たちが率先して、避難所開設を行い、避難してきた住民を受け入れようと考えてきた。開設訓練のためにより実践的な『オリジナル HUG』を作成し、これまで学習を重ねてきた。『未来へのメモワール』と同様、１年生の基本的な知識習得のカリキュラムとして位置付けている。この避難所研究は地域への貢献活動はもちろん、防災学習と人権学習の横断的な学びとして非常に効果的であると考えている。

市販の HUG（静岡県開発）と『オリジナル HUG』を実践する過程での“気づき”や“疑問”、例えば「本校の避難所にはどのような備蓄品がどれぐらいあるのか？」「緊急の電源はあるのか？」「水洗トイレを流してもいいのか？」「ペットは飼い主と分けられるのか？」など。調べれば答えが出る問いと今あるマニュアルを考え直す必要があるもの、避難所運営に

関わる人々と協議する必要があるものなどそこから生まれた疑問や問いを学習の“種”として、今後、生徒たち自身で深く探究していくことになる。

＜「臨時情報」学習＞

南海トラフ沿いで異常現象が観測され、巨大地震が起こる可能性が高まると出される「臨時情報」について、京都大学防災研究所の矢守教授と杉山研究員に授業をしていただいた。今回は、直近２回の大地震のように南海トラフの東側で地震が発生し、その影響で西側の地域にも地震津波が発生した次の日の“半割れ”状態を想定し、「逃げトレ」を使用した避難路検証を行った。現在の南海トラフ巨大地震には発生のパターンや想定のパターンがいくつかあることを学んだ。

「逃げトレ」の様子

そのうえで“危険度”、“優先度”、“困惑度”について考える授業内容であった。「臨時情報」が出た際、「買い物を多めにするか？」という問いに「流通の状況を見て加減する」、「とりあえずは普段の備蓄で賄う」という答えや、「福祉施設への避難民の受け入れをどうするか」という問いに「施設利用者の意見を聞く」という答えがあった。１年生であるので色々な立場や背景を想像するのは難しいのではないかと考えていたが、状況に対する想像力や多角的な視点を持てているということがわかった。ここ何年かは毎年、生徒たちの防災に対する考えが入学時からある程度備わっていることを実感する。これは義務教育課程での防災教育が着実に成果をあげていることを意味しており、また、学校全体で防災教育に取り組んでいる本校の防災教育の成果であると感じる。この学びの成果を着実に伸ばしていかなければならない。

矢守教授の授業の様子

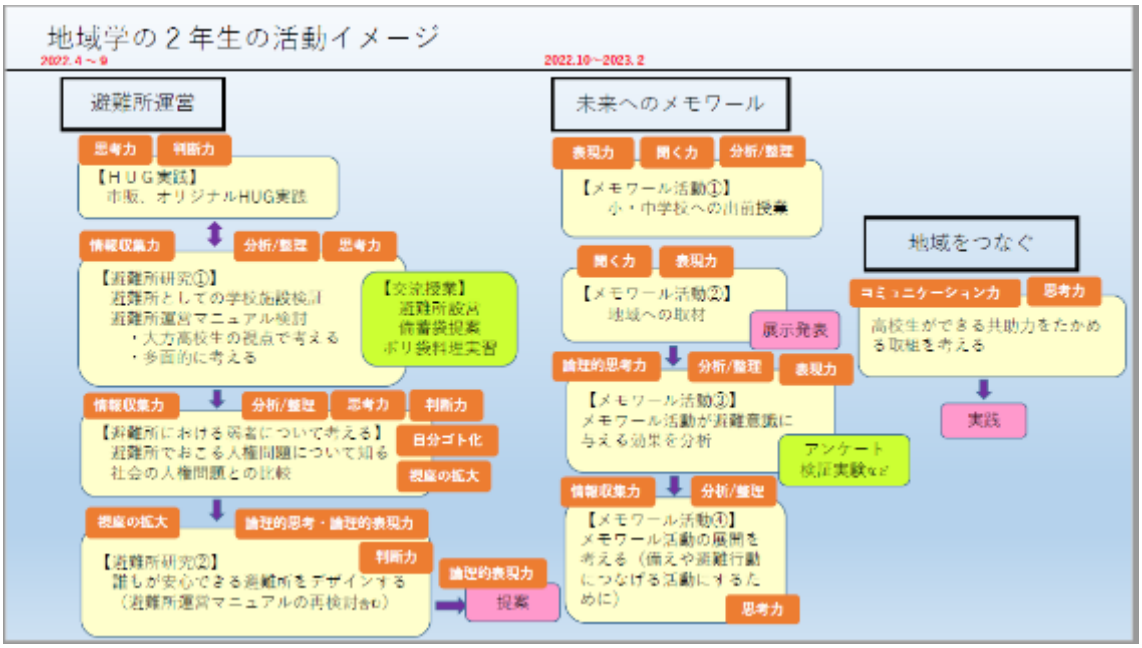
杉山研究員の授業の様子

（２）「地域学Ⅰ」（２年生）の取組について

ア　概要

「避難所運営研究」を中心に、探究力、つながる力、多様性受容力、マネジメント力、レジリエンスの育成を目指す。特に要配慮者についての避難、避難所生活について考えた。新型コロナウイルス感染拡大の影響で昨年同様、地域住民と連携した活動ができなかった。しかしながら、近隣の小学校への出前授業と社会福祉協議会主催の活動に参加することができた。

以下に活動のグランドデザインを示すが、途中で大きく変更した部分もある。



「地域学Ⅰ」（２年生）グランドデザイン

イ　生徒観

明るく活発な生徒が多く、男女間のコミュニケーションも取れる。被災地訪問や外部団体との交流に積極的に参加する生徒が多く、目覚ましい成長を遂げている。

ウ　活動報告

＜要配慮者の避難・避難生活について考える＞

２年生は１年間を貫くテーマとして『要配慮者の避難・避難生活』について考えた。まず、「要配慮者とは」から始まり「要配慮者の避難における困難」「避難所における困難」「避難所での人権問題」について情報収集を行った。グループに分かれて分担して行っているので、最終的には発表の形で情報を共有して、学びあいを行った。東日本大震災の避難所でどのような人権上の問題が発生したかの調

授業での発表の様子

べ学習では、彼らの想像をはるかに超える事実を知ることとなった。これが災害時の限定された状況下のことなのか、平常時にも社会の課題として存在するのかを調べ、なぜそのような人権課題が発生するのか、何が背景にあるのかを考察した。これは防災学習から人権学習へと学びを広げることができるプログラムである。３年生で『だれもが幸せになれる避難所』を考えていく土台となる学習である。

＜出前授業＞

要配慮者の学習をもとに、小学生に出前授業を行った。対象は町内の入野小学校小学５年生２４名である。大方高校に隣接する小学校で毎年のように出前授業を実施している。

今年のテーマは『避難が困難なひとはどんな人？』『平常時に私たちができることは何だろう？』『実際にできる活動を考えてみよう？』この３つの問いを小学生と共に考えた。高校生の役割は自分たちが学んだ“要配慮者”の情報を活用して、小学生の思考を促す効果的なインプット材料を提供することや“声掛け”である。これまでは９０分間（小学生の２時間分）で実施してきたが、今回はアイスブレイクも含めて４５分間とかなり限られた時間の中での活動であったが、タブレット内に用意したパワーポイントや写真資料を使用して、円滑なコミュニケーションをとって、うまく思考を促すことができていた。

出前授業の様子

＜ボランティアフェスティバルへの参加＞

２月１８日（土）黒潮町社会福祉協議会が主催する『ボランティアフェスティバル』が行われ、地域学受講生徒が、本校の防災活動の紹介を行い、様々なボランティア団体の活動に参加した。『ボランティアフェスティバル』自体コロナ禍の影響で３年ぶりの開催であり、彼らにとっても地域への発表は初めてであった。休日の活動に眉をひそめる生徒もおり、スライド作りも難航したが、最終的にはしっかりとしたわかりやすい活動紹介ができていた。総合的な探究の時間において１年生から表現の仕方やスライドの作り方を学んできているので、その力を発揮できたのではないかと考えている。

彼らの振り返りには他のボランティア団体の発表から、「発表はこちらからしゃべるだけでなく、問いかけたりするパターンもあるのだと気づいた。次の発表に取り入れてみよう。」、「今まではあまりやってはいなかったけど、これからは何かのボランティアに参加してみようと思った。」、「一人で人の役に立つことを考えていたが、違う年齢や立場の人と協力するやり方に納得しました。」、「手話サークルのブースで手話を学んだ。

手話体験の様子

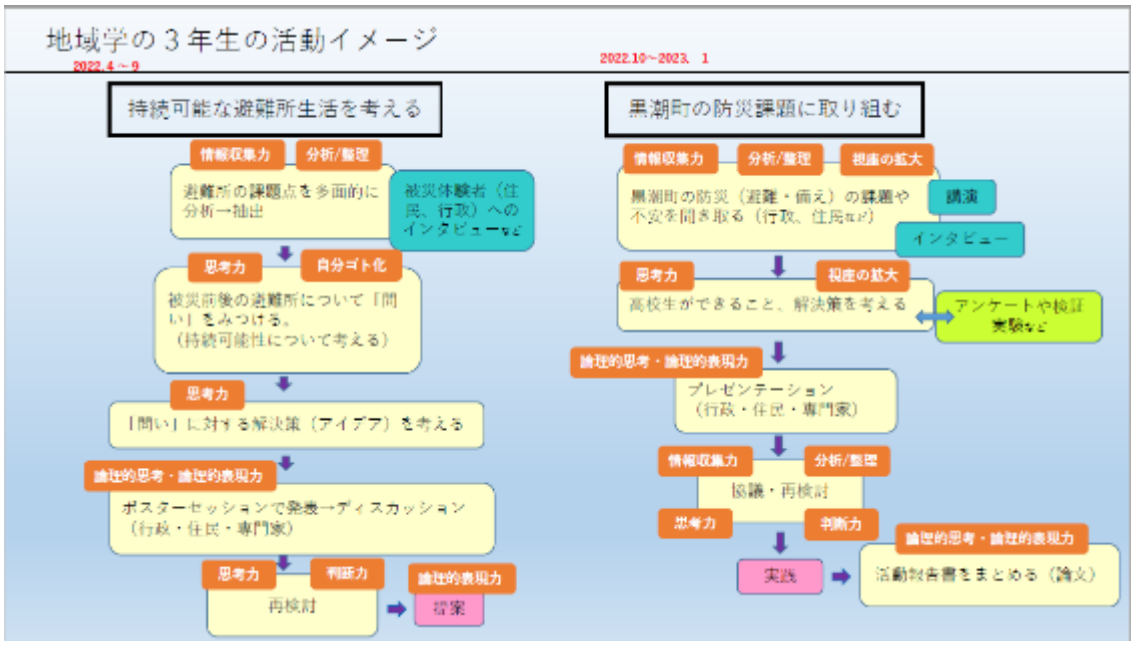
もっと手話ができるようになると聴覚障がい者の方ともっと繋がることができると思った。」などがあった。

（３）「地域学Ⅱ」（３年生）の取組について

ア　概要

３年間の集大成として、地域に貢献できる力を身に付けるべく「持続可能」をテーマに避難場所の整備や避難所の整備について考えた。以下に活動のイメージ図を示すが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で昨年同様、地域住民と連携した活動に制約があり、計画の変更も多くあった。

以下に活動のグランドデザインを示すが、途中で大きく変更した部分もある。



「地域学Ⅱ」（３年生）グランドデザイン

イ　生徒観

防災学習への意欲が高い生徒が多い。これまでの地域との活動によって、知識も経験も蓄積されている。個人の能力は高いものがあるが、協働することにおいて苦手意識をもつ生徒もいる。

ウ　活動報告

＜新しい避難場所の整備＞

先輩から引き継いだ“新しい避難場所の整備”を実行にうつすため、黒潮町まちづくり課に要望書を提出した。内容は、花を植えるなどして平常時は地域の方の癒しの場所となったり、散歩コースとして日常的に避難訓練と兼ねることができたり、また、災害時は避難場所として活用できる場所として整備する等である。そして、まちづくり課と住民課両課長様にこれまでの活動と整備計画をプレゼンテーションさせていただき、快諾していただいた。

プレゼンテーションの様子

以前、黒潮町の地区防災計画シンポジウムで募金をお願いした結果、集まっていた資金をもとに３０株ほどの花の苗を購入し、植えた。この整備は今後も大方高校の生徒によって受け継がれていくものであるが、資金面の確保と水の確保が大きな課題となっている。しかしながら、協力を申し出てくださっている近隣地区の区長さんもいらっしゃることから、住民と一緒に避難場所を作っていく活動になっていくのではないかと思う。生徒の活動に協賛してくださる地域のご厚意を生徒の教育活動に生かしていくコーディネートが教員に求められる。

新しい避難場所

新しい避難場所の整備後のイメージ

＜『持続可能な避難所』を考える＞

避難所運営についての学びから、避難所の電源の確保が話題になった。３年前に卒業生も同様の課題について太陽光パネルの設置を県への提案として試みたが、資金の面で解決には至らなかった。近年、SDGs 達成への機運が高まり、再生可能エネルギーの重要性が再認識され、普及を促進する動きが加速してきている。黒潮町も２０２１年にゼロカーボンシティ宣言を行い、２０５０年までに温室効果ガス実質ゼロを目指し、本格的に役場や小中学校に太陽光パネルの設置を進めている。担当者であり以前から本校の防災教育に強力に援助してくださっている住民課課長の宮川様から、平常時は温暖化対策、被災時は電力源として、大方高校への太陽光パネル設置の必要性を生徒たちに講義していただいた。それをもとに学校長への提案を行い、３年前よりは少し、その設置が現実味を帯びてきている。また、生徒たちは誰もが安心して生活できる避難所を考える時、被災時と平常時の公益性という２つの視点が必要であることに気づいた。前出の“新しい避難場所”もまた、この考え方に基づいて

いる。平常時には住民の散歩コースの休憩場所、被災時には一次避難場所としての活用である。

この二面的な視点をもつ『持続可能な避難所』を考える課題に取り組んだ。しかし避難所について考えるはずが、防災グッズの開発になってしまった。普段の様々な活動が考えるインプット材料にほとんどなっていないのではないかと感じた。もちろん活動を覚えていないということではないが、身に付けた知識・技能をもとに，自ら考え，判断し，課題を解決する力、いわゆる“活用する力”が身についていないと実感した。様々な有意義な活動による知識や経験を活用するところまで定着させていく必要がある。

＜『防災デー』の企画・運営＞

昨年度から全校で『防災デー』と銘打って全校生徒、教職員が避難所運営訓練に取り組んでいる。今年は１１月１８日（金）に実施した。地域住民、黒潮町役場、四国電力、アクアデザインなど外部の方や事業者も参加してくださった。この避難所運営訓練の企画と当日の運営を行った。

『防災デー』の様子①

まず、避難者役の全校生徒、教職員はグループ別で指定された近隣の地域に散らばり、

発災時間を決めて一斉に避難をするところから始めた。その際、高齢者疑似装具をつけたり、重い荷物を持ったり、途中で経路を変えるなど避難に少し負荷を与えるようにした。また、その際「逃げトレ」を使用した。受付後、各グループはシェルパーテントを設置し、運営側から依頼された避難所で起こりうる出来事を実践した。「グラウンドに食料、水、SOS と書いてください。」「段ボールでベッドを作ってください。」「仮設トイレを置く場所を考えて、『ドントこい』を設置してください。」「竹でご飯を作ってください。」「ポリ袋でカレーを作ってください。」などである。13 名で運営側を担当したが、様々な問い合わせや要求に非常に柔軟に、臨機応変に対応し、また協力し合ってさばいていた。この３年間で何度もそして、様々な人と避難所運営ゲーム（HUG）を実践してきた成果が表れていた。つまり、一つの答えを探すのではなく、その時その時に最適な答えを導き出すことが、必要であることが理解できていると感じた。これまでの学習が行動力や最適解を導き出す力に結びついていると確信し

『防災デー』の様子②

た。取組の最後にグループ別の振り返りと個人の振り返りを行い、振り返りをもとに分析を行った。自分たちと他の生徒との知識や経験の差を感じ「実際に被災した時は全校生徒に活躍してもらわなければならないので、今後、地域創造コースは学んだことを全校生徒に共有していく必要がある。」という感想を持っていた。今回の活動で得られた情報や課題を全校生徒で共有するために、１年生が引き継いで情報発信をした。

なお、訓練の前に東日本大震災で被災した岩手県出身の釜石東中学校の OB である紺野堅太様にご講演いただいた。「釜石の軌跡」と言われた当時の避難行動とそれを実現した要因や日頃の避難訓練についてのお話があり、生徒たちにとっては自分たちと同じくらいの年代の子どもたちが実際に置かれた状況を聞いて、“被災する・避難する” ことにより現実味が増し、後の活動の動機づけにもつながった。

『防災デー』の様子③

エ　３年間の学習を終えて今思う『未来へのメモワール』

『未来へのメモワール』を入学当初のプログラムと位置づけした最初の学年がこの３年生である。まだ本格的な学習に入る前に考えた“守りたいもの”と３年間の学びのなかで多くの知識と経験を積み重ねた卒業時に“守りたいものは何ですか？”の問いに違いがあるのか、また、その守りたい理由に変化があるのか、検証する意味もあり最後の課題として考えさせた。入学時には友達と楽しく遊んだ「黒潮町の自然を残したい」と語った生徒は、やはり「黒潮町の自然の美しい景色を残したい」と変わることはなかった。しかしその理由は「南海トラフ地震による巨大津波でなくなってしまうことは避けられない。そのために、美しい、残したいと思った景色を写真に残しておくことを心掛けている。」であった。黒潮町で生まれ育った生徒がなくなってしまう覚悟を述べていることに、やりきれない思いを感じた。もう一方でこの生徒は町内企業に就職を決めており、来るべき大地震に向き合っていく覚悟のようなものを感じた。

この３年間で被災地の方々に『今だから思うメモワール』を取材した。ほとんどの方が『見慣れた風景を写真で残しておきたかった』と言われた。多くの生徒が被災地の方の「物質的なものは買い替えれば何とかなるが、何気なく見ていた当たり前の風景が実はとても大切で、しかし思い出せなくなっていく。」という言葉が印象に残ったようで、思い出を写真に残し、その写真を守りたいと答える生徒が多かった。まさに普段の何気ないものがいかに大切であるかを見直す機会なる『メモワール』であると実感した。

（３）３年間の成果

３年間の学習の最後にアンケートを取った。地域創造コースの学びの目的である地域に貢献できる人材の育成、自己有用感の向上、協働力を育むという観点において自己評価させた。

「あなたができるようになったと思う力は？」の問では、３年間で身についた力として生徒たちが実感しているのが協働力とコミュニケーション力であった。また、「３年間の活動の中で一番楽しかった活動は何ですか？」では、学校内外の人たちとの協働した活動という回答が多くを占め、これまでの地域と連携した取組によってさまざまな成長を感じていると思われる。ただし、就職、進学ともにこれまでよりも視座の高まりが求められ、多様な立場の人々との関係構築が求められることから、彼らの自己評価が適切であるかはこれから試される。

また、防災学習を中心に学んだ結果、自分と他者の命を守ることができるかという問いにも答えさせた。この質問に関しては学習が深まれば深まるほど、様々な想定ができるようになり、命を守ることの難しさを実感したため、肯定的な答えに至っていなかった。しかし、これは学習が深化した結果であり、その場に応じたよりよい解決方法を考える力が向上したと考えられる。

３　「総合的な探究の時間」における各学年の取組

本校の「総合的な探究の時間」は、大方商業高等学校から多部制単位制普通科の大方高等学校に改編された平成 17 年度から、「総合的な学習の時間」としてスタートした。「総合的な学習の時間」の展開は、「自律創造型地域課題解決学習」として位置づけ、地域をフィールドとして地域の課題解決学習を地元の事業所と連携して進めてきた。本事業では、この活動を深化させ、地域をフィールドとして探究活動を推進し、学校内の力だけではなく学校外の力を借りて展開していくことした。

カリキュラムの内容については、カリキュラム開発等専門家である高知大学　特任教授・学長特別補佐　川村晶子　氏を中心に検討したものである。また、本年度より高知大学　次世代地域創造センター　地域 DX 推進グループ　森和美　氏もカリキュラム開発等専門家として加わっていただき、ご支援をいただいた。

（１）本校の「総合的な探究の時間」推進体制について

本事業における統括主任と各学年にそれぞれ総合的な探究の時間担当を一人置き、企画・運営を行っている。教員はいずれかの学年に所属し、総合的な探究の時間はすべての教員がかかわっている。授業者は基本的に各学年担当であるが、活動によっては各教員に担当生徒が割り当てられる。

統括主任、各学年担当、管理職の打ち合わせ会を週に１回もち、進捗状況や事業予算の使用状況の確認を行っている。

（２）カリキュラム開発等専門家との関わりについて

カリキュラム開発等専門家の川村晶子氏には月１回の定例打ち合わせ会をもち、授業の進捗状況の確認、生徒の状態に応じたグランドデザインの修正、効果的な活動のためのアドバイスをいただいている。実際にアイデアソンやケーススタディなど、活動の企画運営、さらに授業への参加まで全面的に協力をいただいている。

また、本校の教員研修の講師や、川村氏の実施している研修会への本校教員の参加など『総合的な探究の時間』を推進していくうえでの新しい情報を常に提供してくださっている。

（３）「総合的な探究の時間」１年生の取組について

１年生は、探究力の基礎として、「情報収集力」、「情報分析力」、「判断・決定力」、「論理的思考力」、「表現力」の５つの力を身に付けることを目標に活動を行った。年度当初に年間計画、（OODA に基づいた）ルーブリック評価を提示し、１年間の見通しをもたせ、身に付けさせたい力の共有を行った状態で授業が始まった。年間を通して、「人が働くということ」をテーマに、「自分×仕事」、「他者×仕事」という切り口で探究活動を行った。以下に活動のイメージ図を示す。

ア　概要

１年間を通したテーマを「自分探究」とし、自己理解や他者理解が育まれることを意識した学習活動を設計した。身に付けさせたい力は以下の４点である。

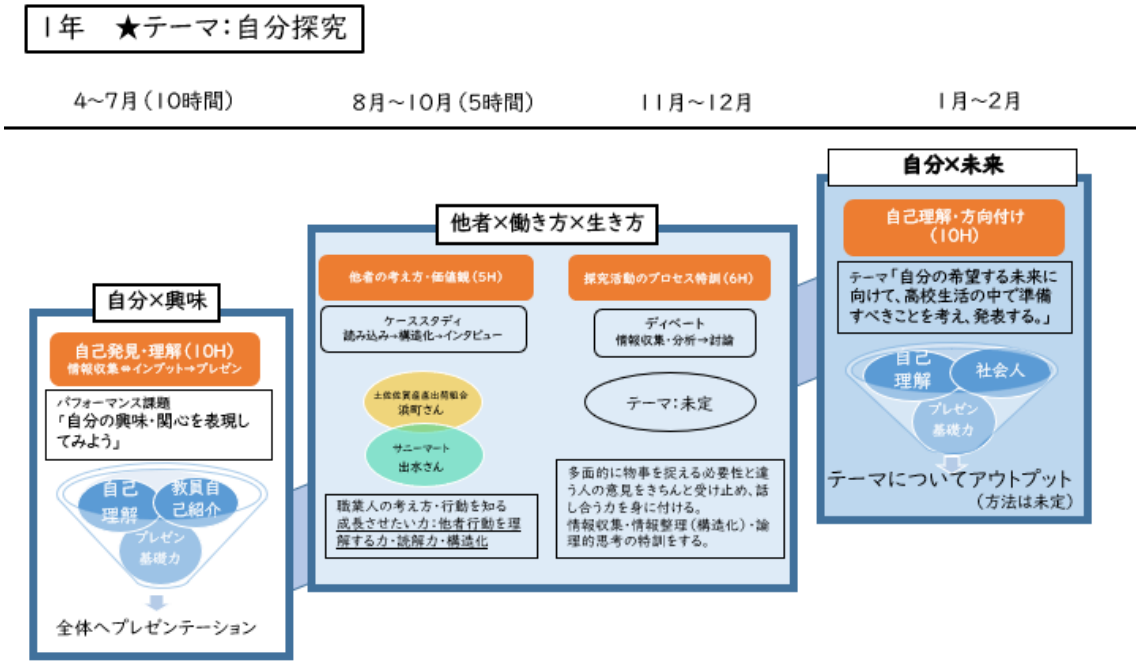
自信をもち、自分の考えを表現できる力
情報の意味を的確に読み取る力
複数の情報源から情報を収集しようとする姿勢
経験や新たな情報を統合できる力

以上の内容を設定した背景には、高校３年間の総合的な探究の時間を効果的で体系的な学習活動にしたいという想いがある。総合的な探究の時間を実施するにあたり、効果的な PBL（Project・Problem Based Learning）学習に取り組めるかどうかが生徒の成長に大きく寄与すると感じており、その準備段階が１年生だと捉えている。昨年度までの実践でＰＢＬ学習に取り組むなかで、情報収集力・情報分析力・批判的思考力など様々な力が必要なことを痛感したとともに探究活動に必要な素養が養われた状態で取り組むことで生徒の学び思考する幅が広がると考察する。それらのことより、３年間から１年次を逆算し、すべきことを抽出した結果となる。

本学習で押さえたいポイントしては、以下の３点である。

自分のやりたいこと・個性を意識できる（自分が何モノで、何をしたいのか）
地域で働いている人の考え方・行動を知れる。
社会、未来という視点をもって自分の将来についてイメージできる。

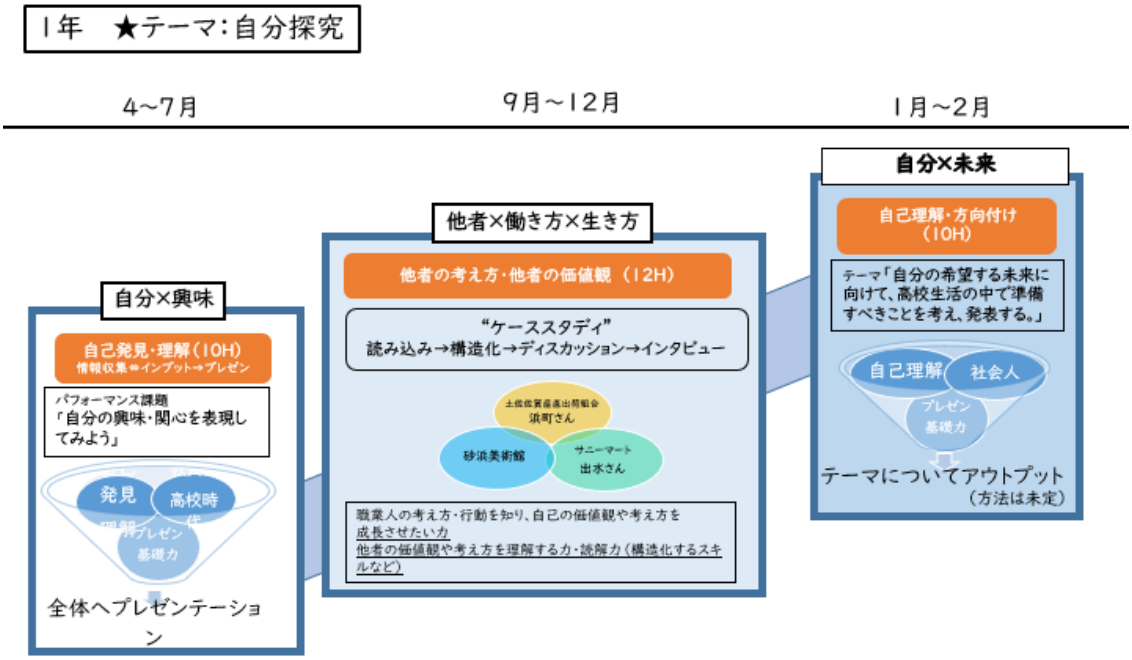
下図は、年度当初に作成した１年間のグランドデザインである。



グランドデザイン

今後の学年においても同様であるが、生徒の実情に合わせて、柔軟に変更を行うことが肝要であり、コンテンツベースでは探究学習は進めづらいと感じている。

４月～７月の学習で実態を捉え修正したため、９月からは下図のとおり授業展開をした。



変更後のグランドデザイン

イ　生徒観

生徒数は２３名で、例年と比較して少ない学年である。対話的な活動を通して意見を交流する経験を積んできている生徒とそうでない生徒が混在しており自分の考えを伝えられない生徒が一定数を占めている。ICT 活用スキルにおいては経験のある生徒は一部であるため、学習ツールとして使う際には注意が必要である。また、自己理解の面においては“好きなもの”や“趣味”などを固有名詞で表現することはできるが、感覚での理解に留まっており適切な言語化には未達である。昨今のコロナウイルス感染症の影響もあり、中学校までの生活で学校外の大人と関わってきた経験は以前の学生と比較すると詰めていない傾向がある。

ウ　活動報告

＜単元１　自分×価値＞

本単元では「自分のすきなもの・ことを表現してみよう」というテーマで、パフォーマンス課題「自分の好きなものを他者も好きになってもらうような表現をする」を課した。自分の好きなものについて相手に共感を促す表現を目指させる中で、情報収集の仕方や情報分析の考え方を訓練することを狙いとした。本単元での目的や身に付けさせたい力・評価は、以下のとおりである。

概要

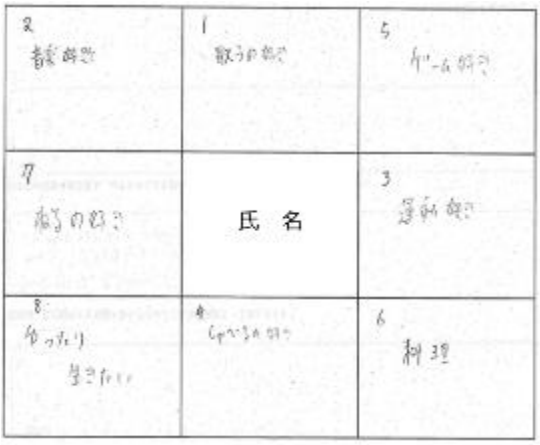
<table>
<tr><td>単元</td><td colspan="2">単元1　自分の興味関心を表現してみよう</td></tr>
<tr><td>目的</td><td colspan="2">①自己理解を深める
②自己表現をする機会の獲得
③情報収集において必要な姿勢を知る</td></tr>
<tr><td>パフォーマンス課題</td><td colspan="2">「自分の好きなことを他者にも好きになってもらうためのプレゼンテーション」
日時：7月6日（水）13:40～15:20（5･6限）
方法：各自に任せている
評価：ルーブリック評価（表現力参照）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">身に付けさせたい力</td><td>思考力
・
判断力</td><td>○情報収集力
自分の経験や感想を言語化する、また潜在的な思いや魅力を発見するために様々な情報源に目を向け、科学的な根拠や体験を織り交ぜて、課題への対応策を考案している。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">表現力</td><td>○言語による表現
・構成（論理的な発表）
・的確な言葉、声量</td></tr>
<tr><td>○行動による表現
・表情
・身振り手振り（ボディランゲージやジェスチャー）
・創意工夫（実物用意など）</td></tr>
</table>

評価規準

観点／レベル		1	2	3	4	5
到達レベル		努力を要する		概ね満足できる		十分満足できる
思考力・判断力	情報収集力	既知を活用して、課題への対応策を考案している。	情報収集ができている。得た情報と体験を織り交ぜて、課題への対応策を考案している。	課題を適切に捉えられており、目的をもって情報収集ができている。得た情報と体験を織り交ぜて、課題への対応策を考案している。	課題を適切に捉えられており、目的をもって情報収集ができている。また、科学的な根拠や体験を織り交ぜて、課題への対応策を考案している。	課題を適切に捉えられており、目的をもって情報収集ができている。また、必要に応じて様々な情報源に目を向けている。 得た情報を多面的・多角的な視点で観察し、科学的な根拠や体験を織り交ぜて、課題への対応策を考案している。
表現力	言語による表現	聞き手に伝えようとする意思を感じられない。	明瞭な声だが、理由やきっかけ等の個人の想いが表現できていない。	明瞭な声と声量で相手に伝えようとする意志を感じられる。また、好きなことに関して理由をつけて伝えられている。	明瞭な声と声量で相手に伝えようとする意志を感じられる。また、伝えたい内容を他人が理解できるように、自分の言葉で表現できている。	明瞭な声と声量で相手に伝えようとする意志を感じられる。聞き手側に立ったストーリー展開、手法の選択が出来ている。多様な人たちが納得できる視点で表現している。
	行動による表現（表情や身振り）	資料を読んでいるだけで、聞き手を引きつけようとする試みが全くない	聞き手とアイコンタクトをとることができており、豊かな表情も時折見える。	豊かな表情を保ち、聞き手とアイコンタクトをとることがとれている。		豊かな表情を保ち、聞き手とのアイコンタクトが取れている。またジェスチャーや実物等の自分なりの工夫が見える。

学習活動としては、インプットとアウトプットが授業１時間の中でセットとなるよう構成をし、以下の活動を行い、パフォーマンス課題に臨んだ。

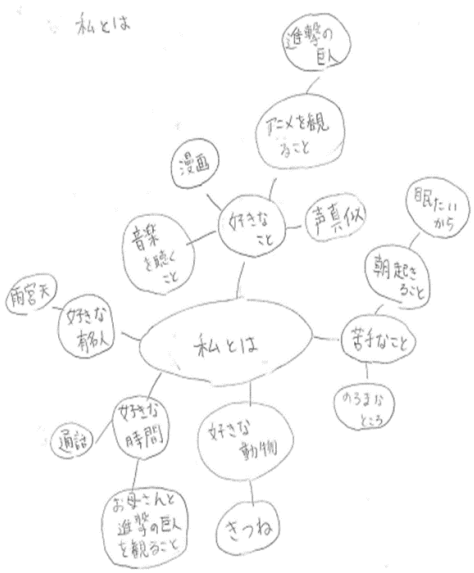
①９マス自己紹介
② 価値観分析
③ 自分を一枚で表現
④ パフォーマンス課題実践（教員）
⑤ 情報収集の仕方・注意点周知



９マス自己紹介の例

授業の様子

課題：自分を一枚で表現



自分を一枚で表現：生徒作品

振り返り

〇良かった点

・前向きな姿勢（授業外での準備やジェスチャーやアイコンタクトなどの挑戦）

〇改善をすべき点

・「楽しい」「面白い」など主観的意見の多用

・人前での発言に極度の緊張（固まってしまい、言葉が出なくなる生徒もいた）

・他者の興味をどのように喚起できるか（客観的に自分の発表を捉える）

担当教員の反省点としては、生徒に対しては他者を惹きつけるポイントや評価規準の説明が不十分であったことである。また、他の教員との共通認識をもって授業にあたりきれなかったこともあげられる。効果的にするためにも授業内容や評価規準などの共有方法・頻度も見直す機会となった。

＜単元２　他者×価値＞

本単元では、地域で働く女性の姿や砂浜美術館の設立時の苦労などをケース教材として取り上げ、社会に影響を与える人の行動を分析し、論理的に表現する力を育成した。直接インタビューする機会も設け、ケース教材には表れてない部分を明らかにしてさらに深い行動分析を行った。

概要

単元Ⅱ	ケーススタディ（事例探究）
内容	①浜町様のケース ②出水様のケース ③砂浜美術館のケース
目的	”他者の考え方”から価値の見出し方や働くといったことに理解を深める。
ねらい	①各ケースより自分なりの問いを見いだすことを目標に、読む力の向上、情報収集・分析力の向上を図る。 ②ケース人材が大切にしている価値観について思考し、それぞれが見出す”価値”について理解しようとする姿勢を育む。 ③自身の価値観に向き合う学習機会とする。
パフォーマンス課題	★ケースのまとめ段階で、以下の問いに回答するレポートを実施させる。 ①ケース登場人物の価値観について共感・感動したことなどを理由とともに教えてください。 ②ケース登場人物は市民（地域コミュニティ）、行政（自治）、経済活動（企業）、それぞれにどのような価値を提供していると思うか,あなたの考えを述べなさい。 提出方法：Googleドキュメント　　評価：ルーブリック評価
単元を貫く問い（最終課題）	あなたが大人になったとき、どのように働いたり活動したりしたいですか？
学習期間	9月～1月（14H）

評価基準

単元ルーブリック

	要改善	標準的	模範的
思考・判断・表現力	文章が適切に理解できておらず、質問を考えられない。	書かれてある文章の意味を適切に理解しており、問いを見出すことができている。	書かれてある文章を適切に理解していることにはえ、ケース以外の情報源（ホームページや雑誌）からも情報を収集したうえで問いを見出すことができている。 また、自分なりの考察をもって課題に取り組めている。
主体的に学習に取り組む態度	①授業に書き込みや調査提出等の期限が守れず、意思表示も見られない。 ②仲間の意見に傾聴し、が見られない。	資料を読み込むのであり、課題提出等の期限を意識した行動をとれている。またペアワークなどの活動に積極的に取り組もうとしている。	ケース人材に関連する事柄についてさら学び、インタビューに必要な情報の収集と分析に主体的かつ積極的に取り組もうとしている。 ・ケース資料以外からの情報収集（インターネット・新聞など） ・ペアワークなどの活動時に他者の意見をメモ・質問などができている

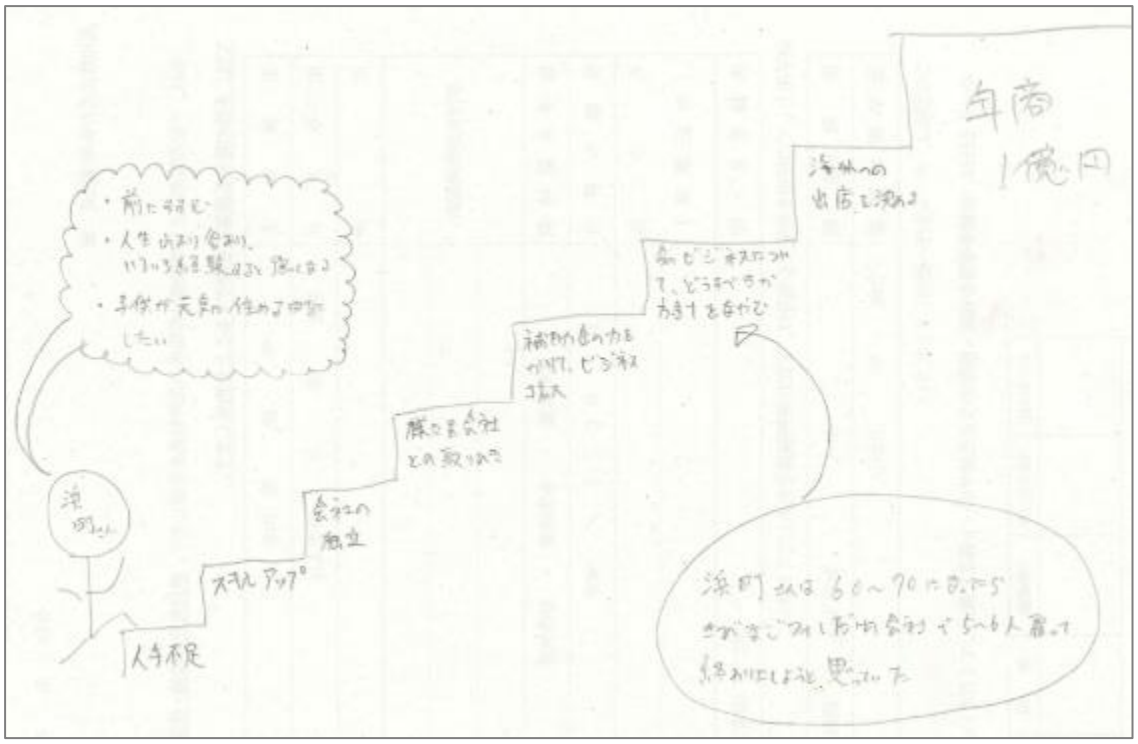
パフォーマンス課題ルーブリック

	要改善	標準的	模範的
文章構成・ケース理解	①～③いずれも不一分である。	①～③のいずれかつ以上の条件を満たすべている。	① レポート課題そのものを理解している。 （文章で表現するための必要） ②答えるべきことがらの内容について正確に理解している。 ③ 専門用語の意味などについて、正確に理解している。
表現・文字の正確さ	①～③いずれも不一分である。	①～③のいずれか2つ以上が満たされている。	① 誤字・脱字がない。 ② 文章の主語・述語が対応している。 ③ 適切な接続を用いている。

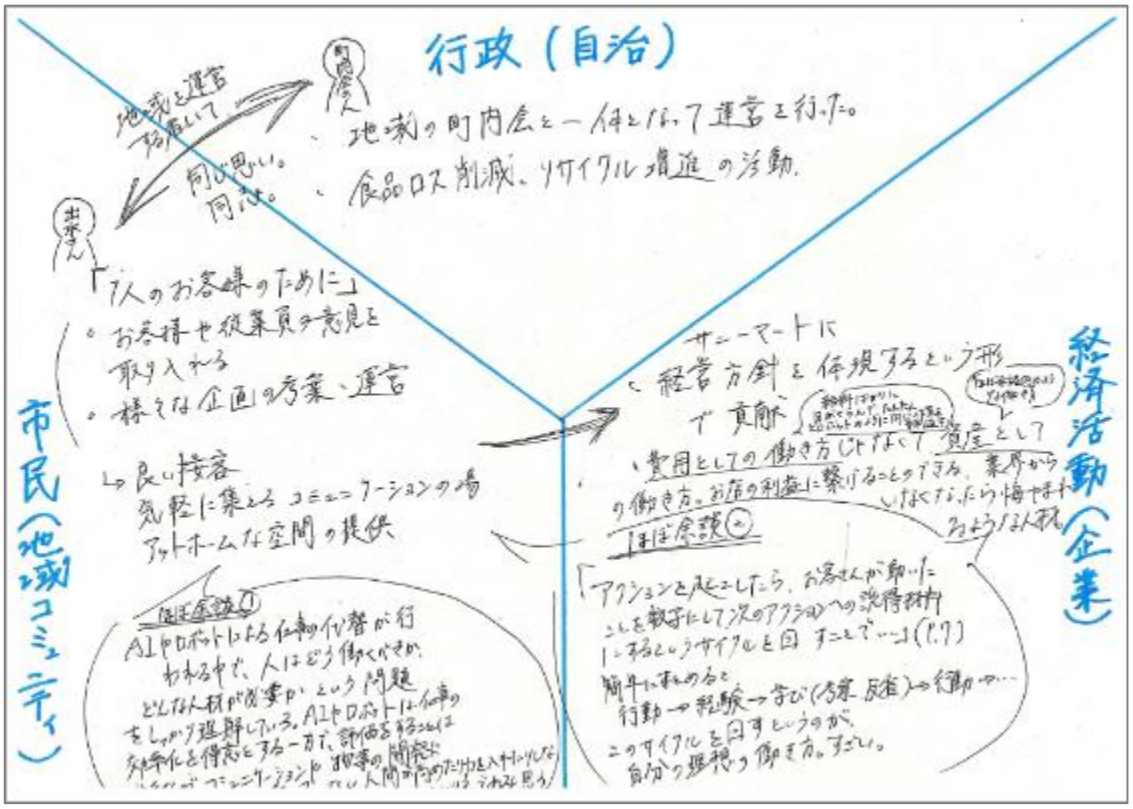
論理構成…文章の筋道が示せた文章になっているかを見る。事実、根拠、意見いずれかがなくては論理的な構成とはいいがたい。

資料を読み、人の価値観や会社の成長の裏側（過程・背景）を追体験することで学びを得る学習活動として、各ケースを以下の手順で取り組んだ。

① ケース読み込み
② 感想共有
③ 情報収集・インタビュー内容考案
④ 登場人物インタビュー
⑤ パフォーマンス課題取組



ケース教材をレポート課題に向けて構造化：生徒作品①



ケース教材をレポート課題に向けて構造化：生徒作品②

ケース人材へインタビューの様子

レポート課題②　生徒アウトプット

私は、出水さんが市民に対して、気軽に集えるアットホームな空間やコミュニケーションの場を提供していると考える。お客様や従業員の意見を取り入れ、様々な企画を運営することで市民のニーズに応えていると思ったからだ。

近い将来、今ある仕事の49%がAIや機械によって代替されると言われている。しかし、所詮、**それらが**得意とするのは膨大な過去のデータと強力な計算力で素早く答えを導き出すこと、つまりは"効率化"であって、何もない状態から新たな発見や開発をしたり、コミュニケーションをとったりといった"評価"を必要とする作業はできないのである。だから、出水さんのように企画を考案したり、一人ひとりのお客様に合わせ、相手の側に立った接客や共に楽しむ接客をしたりする働き方はAIや機械にも屈しない力を持っていると思った。

また、このような働き方は経営方針を体現するという形で、サニーマートにも貢献しているのではないかとも考えた。与えられた仕事のみを淡々と行うのではなく、与えられた状況に応じて自分にできることは何なのかを考える。そして、自分が見つけた答えや、得た経験を元に従業員の持つ能力をも引き出す。出水さんは、企業にとって、費用としてではなく資産としての価値を与える存在だと言える。町内会に対しても同様に、一体となって運営をする中で出水さんは、課題を見つけて解決を図る力になっているはずだ。

私は、好きなことを仕事にするのは当然難しいと思う。だからこそ、出水さんのような「仕事はやり方によって幸せになる」といった心持ちは大事だと思った。やりがいのある仕事を見つけるのではなくて、仕事にやりがいを見つけられるような大人になりたい。

振り返り

〇良かった点

評価項目「題意把握・ケース理解」について標準的以上の生徒が多数おり、他者の価値観や価値の見出し方については一定理解できたことがうかがえる。また、２度のインタビューを通して、一度目より目的設定や情報収集の精度も向上したように感じる。ケース人材からは「聞き方・姿勢が上手になっている」と肯定的な評価をいただけた。

〇改善すべき点

評価項目「表現・文字の正確さ」について、要改善の生徒が多数おり、パフォーマンス課題に取り組む前に個別で適した関わりを要することが顕在化した。生徒の状態を丁寧に観察したうえで担当生徒を割り当て、取り組むことで改善を図れると感じる。言葉の意味を適切に理解させることや文章を構造的に理解させるスキルを学習内容に適切に取り入れるために、多様なアウトプットの場を用意し、学習者の状況を把握できる学習計画を構築しなければならないことに留意する必要性を感じた。

＜単元３　自分×未来×価値＞

本単元では、”将来の自分”を考え、今の自分の行動指針を定められることを目的にレポートに取り組む。単元１・２は、本単元に取り組むための価値観を育むために必要な学習事項だという想いで設定している。学習手順・評価基準は以下のとおりである。

①最終課題「大人になったときどのように生きていたいか」に取り組む
②砂浜美術館のケース教材を読み込む
③砂浜美術館に訪問し、設立の背景・コンセプトなどを聞く
④最終課題「大人になったときどのように生きていたいか」に再度取り組む

評価規準

	要改善	標準的	模範的
独自性 自分の視点で課題を再定義している	他人の意見ばかりで自分の意見がそこにない。	自らの問題意識（仮説）に基づき自分の考えをまとめられている。	興味深い切り口（仮説）で、独自の思索に基づき結論を導き出している。
論理構成 ・ 考察力	①②いずれも不十分である。	どちらかが満たせている。	①論理的にわかりやすく構成されている ②自分なりの視点を持って課題を考察しており、書き示せている。
題意把握 ・ ケース理解	①~③いずれも不十分である。	①~③のいずれか2つ以上の条件を満たせている。	① レポート課題そのものを理解している。（文章で表現することの意義） ②答えるべき事柄について正確に理解している。 ③ 専門用語の意味等について、正確に理解している。
表現 ・ 文字の正確さ	①~③いずれも不十分である。	①~③のいずれか2つ以上が満たされている。	① 誤字・脱字がない。 ② 文章の主語・述語が対応している。 ③ 適切な語彙を用いている。

振り返り

〇良かった点

評価項目「独自性」「題意把握・ケース理解」について標準的以上の生徒が多数おり、テーマに沿った学習になったのではないかと感じている。また、理想の生き方として、ケース人材の名が挙がったり、具体的な行動指針が現れたりと、自己の価値観に向き合い、課題に取り組んでいることが見受けられた。

〇改善すべき点

評価項目「表現・文字の正確さ」については、前単元同様に顕在化していたため、生徒の習熟度合を意識し、教員を割り当てていたが習得は簡単ではなかった。

ウ　１年を振り返って

先述のテーマ設定における背景でも示した通り、あらゆる学習を成長につなげるために“自己理解”は必要なプロセスだと振り返る。各単元で切り口を変えて、物事の見方・考え方をインプットし、自分から見えたこと・考えたことをアウトプットする、その一連の流れ

を体感できるよう学習を設計してきた。今後のあらゆる活動で本学習の成果が見られることを期待している。今年度で顕在化した課題「文章表現」については、他教科とも情報共有し次年度以降も継続して指導を重ねたい。

目まぐるしく変化する現代社会において、生徒たちを取り巻く環境は複雑さを増しているように感じる。インターネットの普及により、情報獲得は容易になったが、フィルターバブル（インターネットの仕組みにより個々の利用者向けに最適化された情報が提供され、その個人が好まないと思われる情報に接する機会が失われる状況）やエコーチェーンバー（ＳＮＳ等で、自分と似た意見ばかり集まること。自分と異なる意見や情報は排除され、自分の考えが偏っていることを認識しづらくなる）などの現象により、知らぬ間に狭い視野で価値観が形成されてしまう事態に陥っている。探究活動を通して、物事の本質を探り、多くの見方・考え方に触れ、自分なりの価値観を形成してもらいたい。次年度は、“地域”をキーワードに設定し、生徒の成長を図っていく予定である。

ケース教材の理解を深めるためのインタビュー：砂浜美術館

（４）「総合的な探究の時間」２年生の取組について

ア　概要

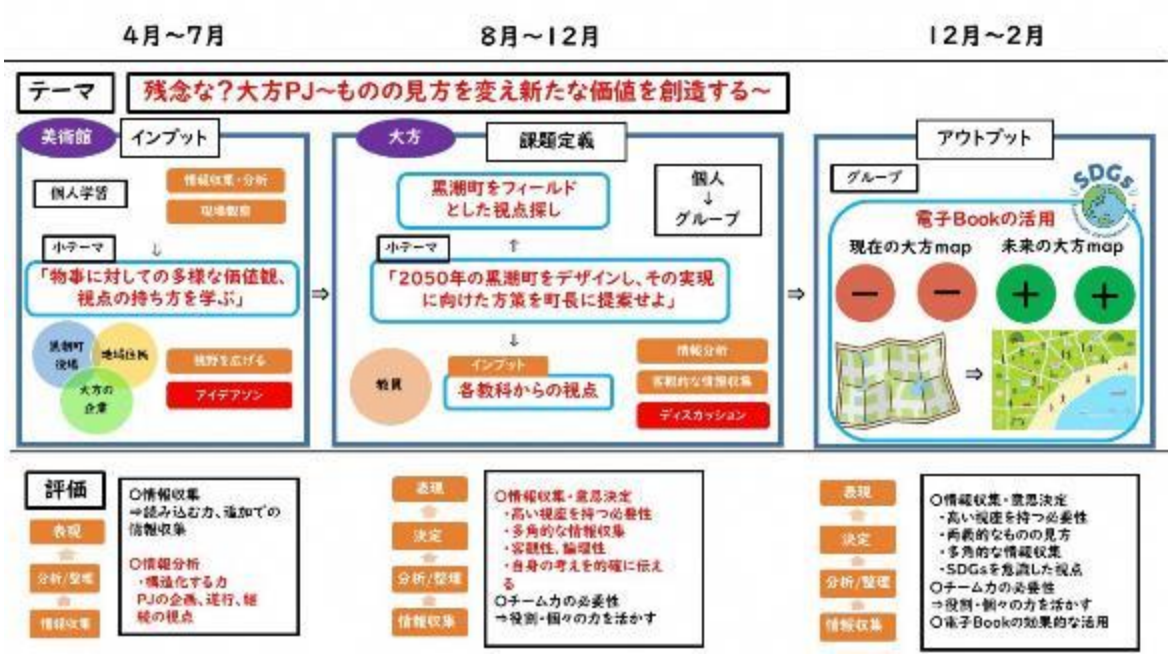
１年次では、「人が働くということ」をテーマとし、探究力の基礎を培う学習を実施した。成果と課題として以下のようなことがあげられた。

	生徒の実態	学習指導要領に基づくコンピテンシー
成果	変化の激しい（VUCA）社会で活躍できる人材の育成に大きく関係していることが多くの生徒に実感させることができた	学びに向かう力・人間性等
	調べ学習と探究学習の違いを、活動を通して実感させることができた	知識及び技能
課題	自身の考えをアウトプットし、的確に伝えることができなかった	思考力・判断力・表現力等
	ものの見方考え方が一面的であり、多角的に物事を捉えることができなかった	

VUCA 時代ではイノベーションを起こし、新たな価値創造をする力が求められている。工業化社会のような「大量生産大量消費」といった時代は終わりを告げようとしており、持続可能な社会、Well-Being な社会を目指していく必要がある。マニュアル化された仕事（知能を活用する仕事）は人工知能 AI にとって変わられ、人間は「価値創造」、「共創」といった知性を活用する仕事を行なっていくことになると考えられる。その上で、上記の課題でもある、「ものの見方が一面的」であるという状況は、大変問題であると認識した。

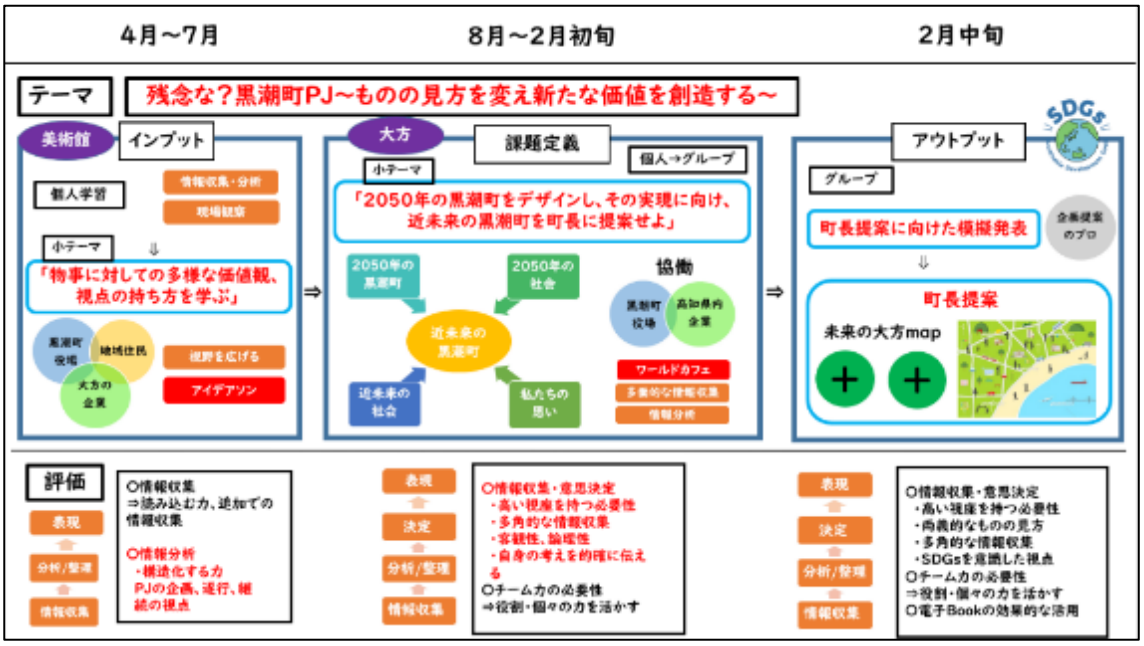
そこで、２年次では、「ものの見方を変え、新たな価値を創造する」をテーマに探究活動を行うことを決定した。メインの活動としては、PBL（Project Based Learning）という手法を、黒潮町をフィールドとして実施した。

年度当初に計画したグランドデザインは以下のとおりである。



年度当初のグランドデザイン

グランドデザインは前期（4 月～9 月）の活動を受け、身に付けさせたい力に合わせた手法を考え、修正した。以下にそれを示す。



変更後のグランドデザイン

イ　生徒観

本学年は、生徒数 32 名（学年団教員 8 名）である。明るく活発な生徒が多い反面、コミュニケーションを取ることが苦手な生徒もいる。学習の習熟に関しても高低差がある。希望進路も、国立大学を目指す生徒から専門学校、就職を希望する生徒など多様である。学習においては、座学よりもディスカッションやワークショップといった形式を好み、外部の方の

アドバイスによって大きく変容を見せる集団である。そのような集団特性を活かしながら、探究学習を展開した。

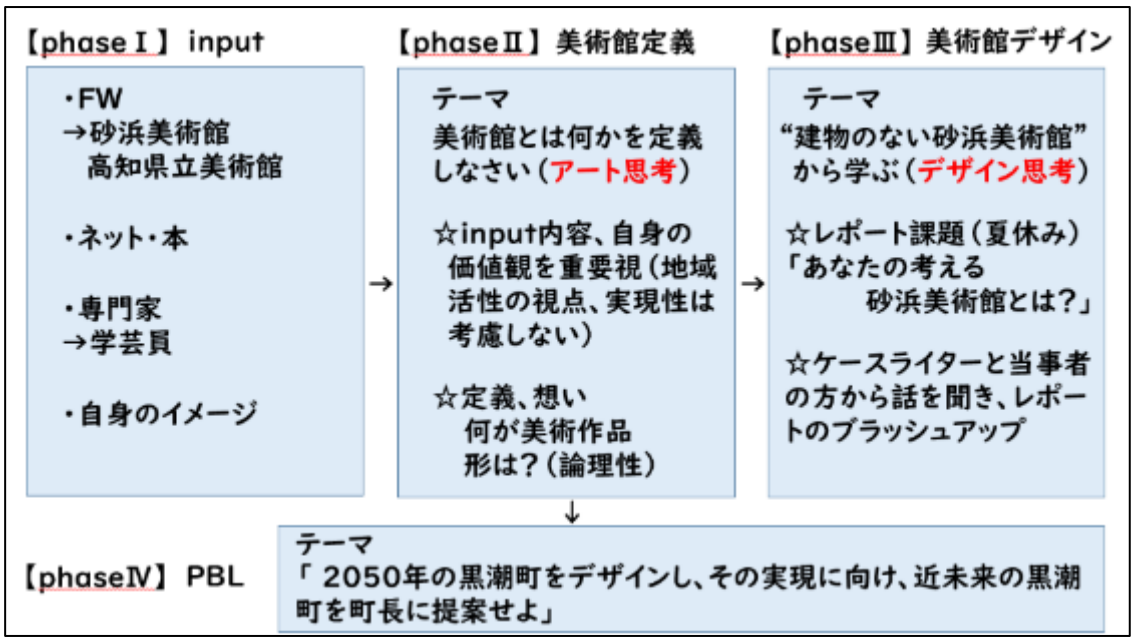
ウ　活動報告

活動は、各単元において手法を変えながら、評価（生徒自身が成長を認識できるような機会の提供）を行った。

＜単元１　美術館学習＞

本単元は、10 月から実施される PBL につながる準備学習として位置づけたものである。「美術館」という題材を選択した理由は、本校がある黒潮町には「砂浜美術館」があるからである。砂浜美術館は、建物がなく作品も存在しない。訪れた人々が見た景色などを作品だと感じたものが作品となる。まさに、砂浜美術館こそがものの見方考え方を大きく変え、新たな価値を想像した一例である。一方で、生徒たちには馴染みのある場所ではあるものの、その場所を砂浜美術館とは呼ばず、入野の浜と呼ぶ。私たちの町にある何気ない場所を教材とすることで、郷土についての理解や、学習の敷居を下げることにつながると考え、美術館を選択した。

学習設計は下図の通りである。



美術館学習の学習設計

Phese1 input

Phese1 においては、「美術館を知る」ことを目的とし、情報収集を行った。この Phese では、情報を収集する方法として「インターネットや本」「高知県立美術館（一般的な美術館）FW：フィールドワーク」「砂浜美術館（建物のない美術館）FW」「高知県立美術館学芸員の方の講話」「自身の感性」といった様々な視点から情報収集を行わせ、美術館についての基礎情報を五感で感じることの重要性を認識させながら、インプットした。

砂浜美術館フィールドワークの様子

情報収集の様子

学芸員の方による講話の様子

県立美術館フィールドワークの様子

ポスターセッションの様子①

ポスターセッションの様子②

Phese2 論ずる①

Phese1 で学んだ美術館の知識を活用し、「私が考える美術館とは何か」といったテーマで、アート思考での論述をさせた。アート思考は、個々の価値観が重要であることから、生徒たちには、「答えはない」「みんなと違っていい」「自身の価値観を大切に」といった声掛けを行った。様々な観点からのインプットがあったからこそ、自身の考えをアウトプットすることができており、自身の考えを表現するといったことができるようになっていた。

Phese3 論ずる②

Phese3 では、Phese2 までの美術館に関する情報や感性をもとに、「砂浜美術館」について再度考えさせる活動を行った。思考させるにあたり、高知新聞社の鍋島氏に協力していただき、砂浜美術館創設の経緯と現在、未来の視点をインプットできるケース教材を作成した。ケースでは、砂浜美術館の概念のみならず、ヒト・モノ・カネ・情報といった経営資源の視点での記述もあり、単に砂浜美術館の位置づけを理解させるにとどまらず、砂浜美術館と街づくりの関係性にもフォーカスしたものでもある。

ここでは、これまで学習した美術館の概念やケースから学んだことに加え、自身が何気なく訪れていた砂浜美術館の印象（考え）も含めて、「砂浜美術館とは何か」といったレポート課題を課し、そのレポートをケースライターである鍋島和彦氏に講評いただいた。

鍋島和彦氏の講評の様子①

鍋島和彦氏の講評の様子②

ここまでの学習をもとに、東京国立博物館主催の「150 年後の国宝展」に 2 名の生徒が応募し、1 名が一般部門において入選した。（「150 年後の国宝展」とは、150 年後に、「国宝候補」にしたい“ワタシの宝物”を個人や企業から集めて展示する、東京国立博物館史上初の公募型展覧会のことである）そして、その入選報告を黒潮町長や副町長、教育長、砂浜美術館のスタッフの皆様に行った。活動内容が成果となったため、生徒自身、「成長を実感できた。」と喜びを表していた。以下にその作品（写真と説明文）を示す。

〇作品名　「姿の変わる美術館」

私たちの町には、建物のない美術館がある。その美術館は、時の流れと共に姿や形が変わる。唯一の砂浜美術館だ。だが、私たちの町には 30 年以内に 80%の確率で南海トラフが来ると言われている。私たちは、その中で生きるために必死だ。姿や形は変わるが思うことは消えず残っていく。

黒潮町長・副町長への報告

砂浜美術館様への報告

＜単元２　PBL（Project Based Learning）＞

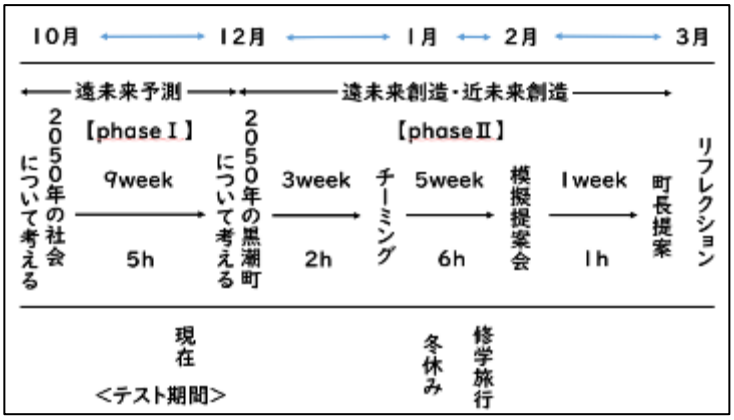
本単元は、2 年生の山場となるメインの学習である。テーマを、「2050 年の黒潮町をデザインし、その実現に向け、近未来の黒潮町を町長に提案せよ」とし、単元１で学習した、「モノの見方を変え、新たな価値を創造する」を黒潮町のまちづくりに応用することに重きを置いた。それらを踏まえ、評価基準や学習設計を組み立て、授業を実施した。活動のメインはグループ学習を検討していたこともあり、班員や住民の多様な考えやアイデアを統合し、提案につなげていく力が必要であったが、そのような経験が多くなかったため、PBL 学習の導入として、「アイデアソン」を実施した。

アイデアソン

10 月 16 日に本校体育館にて、生徒 82 名、高知市の高校の生徒 15 名、地域の方含め一般企業の方約 40 名、計 150 名で「アイデアソン」を実施した。（アイデアソンとは、アイデア（Idea）とマラソン（Marathon）を掛け合わせて造られた造語であり、特定のテーマを決めて、そのテーマについてグループ単位でアイデアを出し合い、その結果を競うというイベントのことを表す）評価者として、黒潮町長と教育長、高知大学次世代地域創造センター長にお越しいただいた。

「私たちのまちを守るアプリを企画せよ」をテーマに高校生と大人（教員含）がグループでアイデアを出し合い、発表を行った。生徒からは、「普段関わることができない方と意見交換でき、自分が思いつかないような考えを共有できて貴重な経験となった。」といった声が上がっていた。

アイデアソン終了後の PBL の授業設計は右図の通りである。



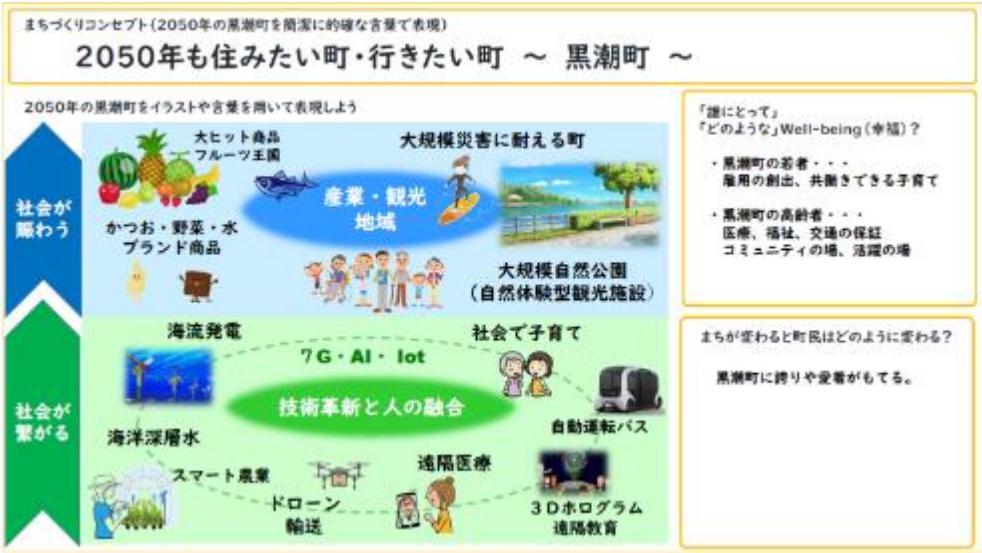
PBL の学習設計

Phase1 遠未来予測

2050 年の黒潮町について考えるにあたって、2050 年の社会について知る必要があるため、自身の興味のある分野に関しての情報収集を実施した。自身の将来の夢に関わる業界や興味のある分野に関するもの、最近ニュースで見聞きする内容などきっかけが多岐に渡ったことで、全体として多くの分野から遠未来予測を行うことができた。

次に、遠未来予測をもとに 2050 年の黒潮町に関して思考した。ここでは、テーマを「私が考える 2050 年の黒潮町」とし、2050 年の社会のインプットやアート思考での視点からアイデアスケッチというツールを活用し、遠未来を予測させた。

その後、作成したアイデアスケッチを活用し、「2050 年の黒潮町について考える」をテーマにワールドカフェを実施した。ワールドカフェでは、12 名の社会人の方に参加していただき、考えたアイデアに対してアドバイスをいただいた。先生方にもアイデアを考えてもらい、生徒と同様様々なアドバイスをいただいた。自身のアイデアイラストや図を効果的に活用しながら、1 枚で表現するということの難しさを感じていた生徒も一定数いたが、アイディエーションの経験が増すたびに上達してきており、自身の思考を整理することや、言葉を的確に選んで表現する力が付いていると確信できる活動でもあった。

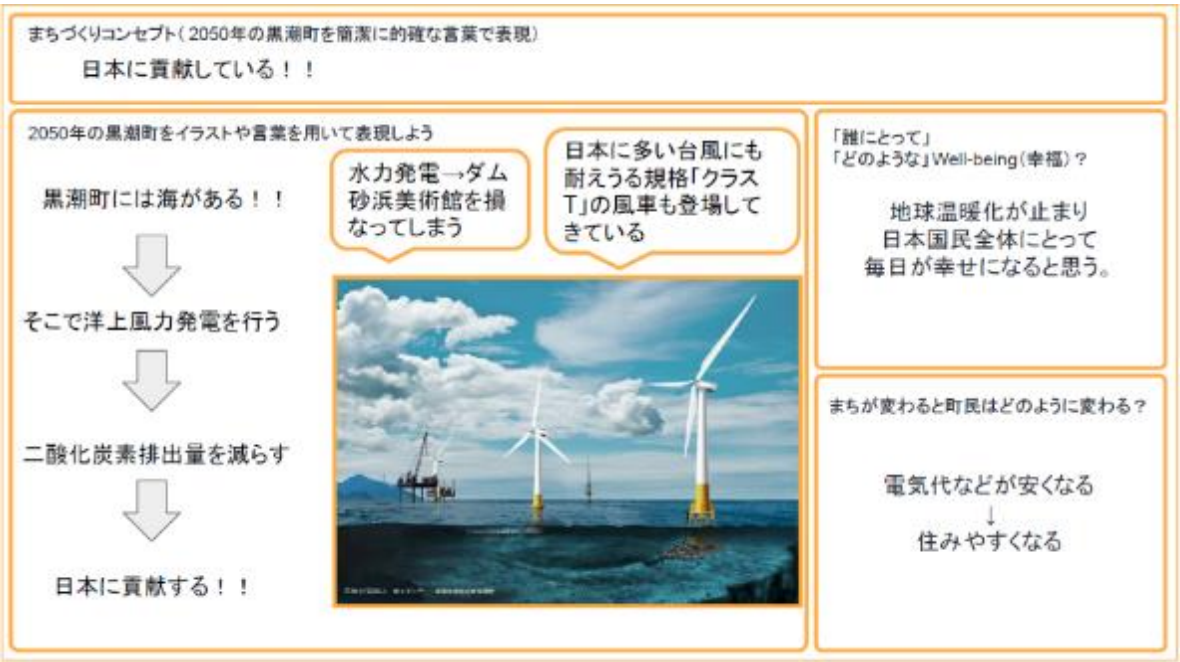


アイデアスケッチ　上：生徒　　下：教員

ワールドカフェの様子

その後、ワールドカフェでいただいたアドバイスをもとに、再度アイデアスケッチを練り直した。そして、練り直した 40 のアイデア（生徒 32 名、教員８名分）の中から、投票で８つのアイデアをセレクションし、その中から、「このアイデアをよりよくしたい」といった観点から、生徒の意思でチーミングを行った。

アイデアセレクションの様子



セレクションされたアイデアの例

Phese2 近未来創造

チーミング後、探究活動の思考プロセスを明示し、提案会における評価基準の共有を行った。「実現可能性の高いものにしていく」ことや「新規性・独自性」の追求、提案の論理性を評価項目として定めた。対象生徒は提案をすることが初めてであったため、カリキュラム開発等専門家である高知大学の森和美氏にお越しいただき、提案に関するインプットを行ってもらった。それらの内容を踏まえ、２月 15 日の町長提案に向けて、班での学習がスタートした。

２月８日には評価者として、カリキュラム開発等専門家である高知大学の川村晶子氏と森和美氏、富士通ラーニングメディアの拝野晃希氏をお招きし、提案模擬発表会を計画した。ここでは、現段階での進捗状況や発表内容を共有し、評価者とディスカッションを通して、提案内容の加筆修正を行うことを目的としていた。しかしながら、タイムマネジメントができていなかったという点や、町長に発表を聞いていただくところまで到達していないという点から町長提案を延期し、この日の模擬発表会も中止とした。自治体には、お詫びをしたうえで延期をお願いし、次年度６月末頃で再度計画を練り直している。

その後、班によってはカリキュラム開発等専門家と対面やオンラインでディスカッションし、知見を広げた。専門家に思考を整理していただくことで、生徒の思考も深まり、教員自身もどのような支援が必要かを認識することができ、教員生徒双方に意味のある時間となった。

各班次年度の町長提案に向け、春休みを有効活用しながら、活動を推進していきたい。

ディスカッションの様子

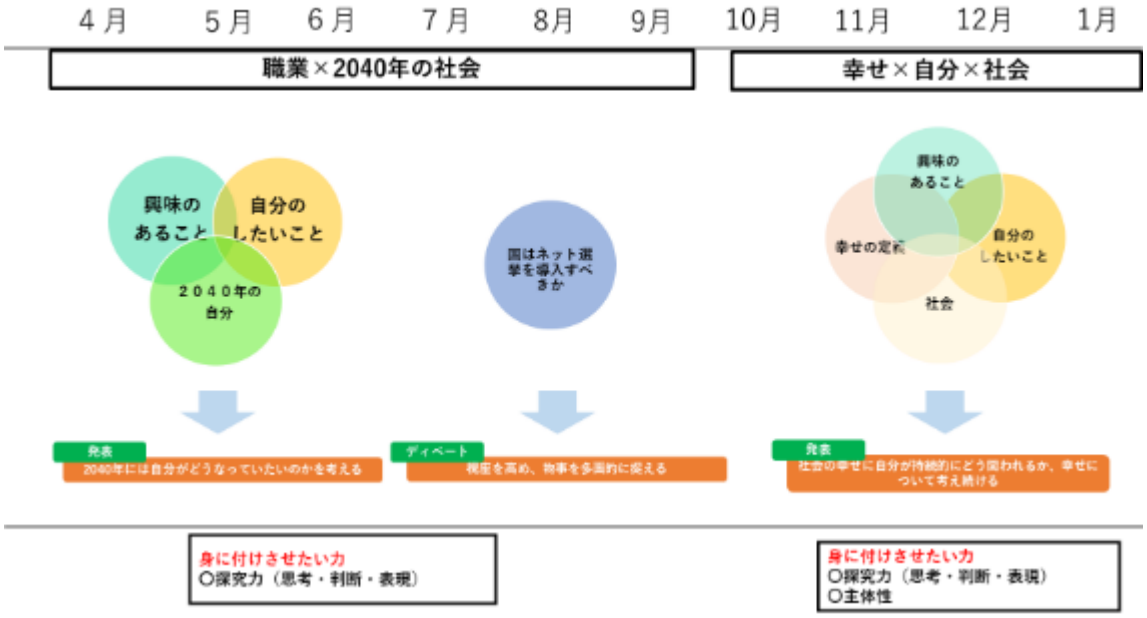
（５）「総合的な探究の時間」３年生の取組について

ア　概要

３年生では、昨年度からの課題として、思考の浅さがある。様々な視点で考えるということは一定できている部分もあるが、それがアウトプットの際には抜けていたり、思いつきになっていたりすることがあった。また、指示があれば忠実に実行できる学年ではあるが、自分で考え、自分の行動に責任をもつといったところは弱い学年である。３年生ということもあり、社会人として必要な考え抜く力や主体性を身に付けさせたいと考え、思考力と主体性の強化を目標に活動を行った。年度当初に計画したグランドデザインは以下のとおりである。

グランドデザイン

その後、生徒の実情に合わせて、柔軟に変更を行った。思考する視点が一面的で思考力が十分でないこと、より生徒に自分事として思考できるよう計画を練り直し、下図のとおり授業展開をした。



変更後のグランドデザイン

イ　生徒観

３年生は、全体的に素直で、また従来の知識詰め込み方式で受動的な授業を受けてきているということもあり、正解のある問いに関しては答えを導くことができたり、導こうとしたりする生徒が多い。一方で、物事に対して深く考えるということや自分の考えをもつということが苦手な生徒が多く、正解を教員に聞こうとする面が多くみられる。このことから、自分に自信がなく、自分で考えて行動することができず、指示を待っているという生徒も多く存在する。

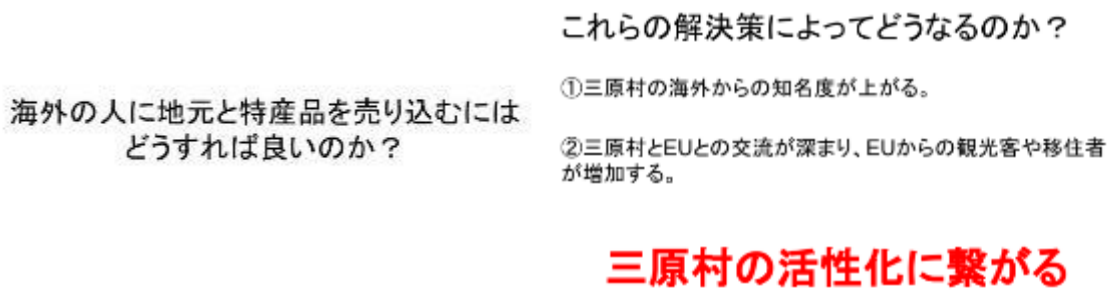
ウ　活動報告

＜単元１　自分の興味のあることを探究する＞

本単元では「自分をデザインする」というテーマで、「自分と 2040 年」という切り口から「思考力」の強化を図るために、自分は何に興味があるのか、2040 年の社会ではどう変化しているのかを根拠をもって考え、表現する授業を実施した。

まずは、「自分の興味があることとは」という視点からスタートした。「自分は何に、なぜ興味があるのか」ということをマインドマップを使ってアウトプットした。その中から、探究したいテーマを設定した。多くの生徒が自分の進路と結び付けて考えていた。

また、2040 年にはどう変化しているかに関しては、総務省の未来イメージ「15 の生活シーン」（案）という資料やそれぞれの団体の HP からビジョンを情報収集・整理し、そこから自分はどう考えるか、どうあってほしいか、自分はどの立場に位置しているのかを考え、発表を行った。



生徒のマインドマップ　発表資料の例①

生徒のマインドマップ　発表資料の例②

単元１の課題としては、以下のものがあげられた。

・思考する視点が一面的であった。
・インターネットからコピー＆ペーストしただけで自分の考えが少なかった。
・2040 年に自分がどの立場で関わっているのか、2040 年に向けて自分がどう社会に参加していくのかという考えがもててなかった。
・考えと根拠がリンクしていない。

単元を振り返ると、今と未来という時間軸で考えること、視座を高くしたり、低くしたりして考えることについてのインプットが十分でなかったという指導者側の反省点も見えた。

また、生徒の多くは視点が一面的で思考の幅が狭いという弱みが明らかとなり、テーマとは少しずれることにはなるが、様々な視点から物事を考えさせる訓練として単元２に入る前にディベート活動を実施した。

ディベート活動では、多面的に思考する力を身に付けることを目標に、実施の当日まで立場を明らかにしないこととし、自分で肯定・否定の双方の視点で情報収集・整理させるようにした。

ディベートは計 2 回実施した。1 回目は、「お金と時間どちらが大切か」というテーマで行った。生徒は振り返りの中で、情報収集の重要性や自分の考えと違う場合でも自分の考えをもつ必要性があるという気づきがあった。

２回目は、「政府は選挙でネット投票できるようにすべきか」というテーマで実施した。２回目では自分ではなく政府からみた視点で考えさせ視座を高めることで、様々な視点から思考させるようにした。

ディベートの様子

実施後の課題としては、以下のものがあげられた。

・情報収集源がインターネットのみであったため、似た主張が多かった
・様々な視点から思考することは一定でき始めたが、十分ではない。
・道筋を立てて、話すという表現力が十分でない。

このことから、単元２では複数の情報源から情報収集をするような計画に変更する必要があると感じた。

＜単元２　自分と社会をより幸せにするアイデアを考える＞

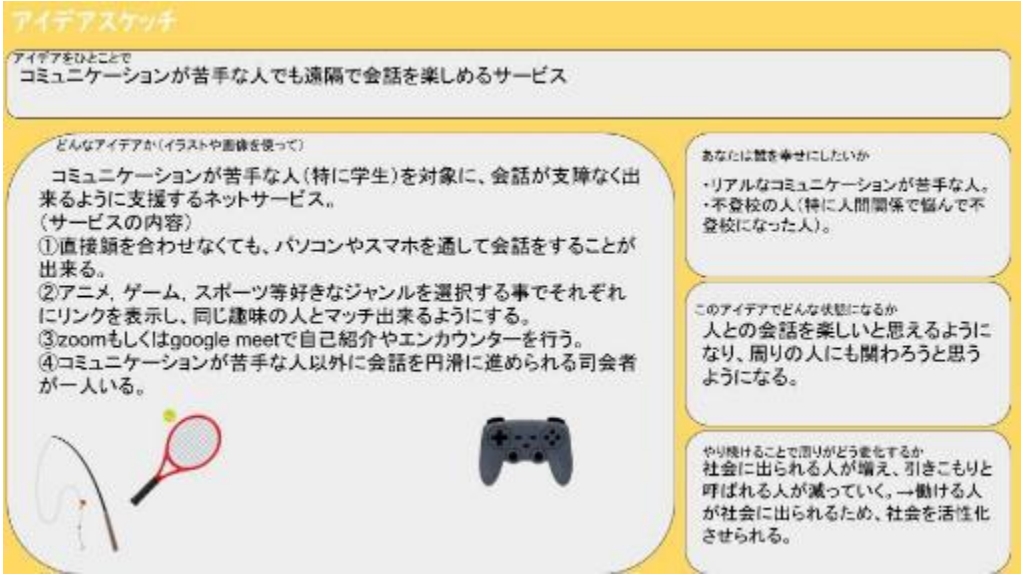
本単元では、「自分×社会×幸せ」という切り口から活動を行った。ここでは、「幸せ」という正解がないことに関して、自分の考えをもち、またその幸せを自分が社会に対してどのように価値を提供できるかということを考えさせることで思考力と主体性の強化を図ることを目標に授業を実施した。これまでは、とりあえずアイデアを出せば良いという生徒が一定数おり、深く考えようとはせず、思いつきやインターネットに書いてあることを書き写す面も多く見られた。これを防ぐために、生徒にはアイデアを考えることが目標ではなく、身に付けさせい力を示し、その力を身に付けることが目標であることを徹底的に周知した。

活動内容としては、幸せの定義、幸せについて様々な情報源・視点からのインプット、社会人とのワールドカフェによるアイデアのブラッシュアップ、アイデア発表である。

まず、幸せについて生徒自身に定義づけをさせた。この段階では、楽なこと＝幸せと答える生徒が多く、このままでは考える視点が広がらないということもあり、書籍や映画、動画といったものからインプットを行い、そのうえで「幸せとは」について再定義させた。そこから、自分も幸せにし、社会を幸せにするためのアイデアを考えさせた。

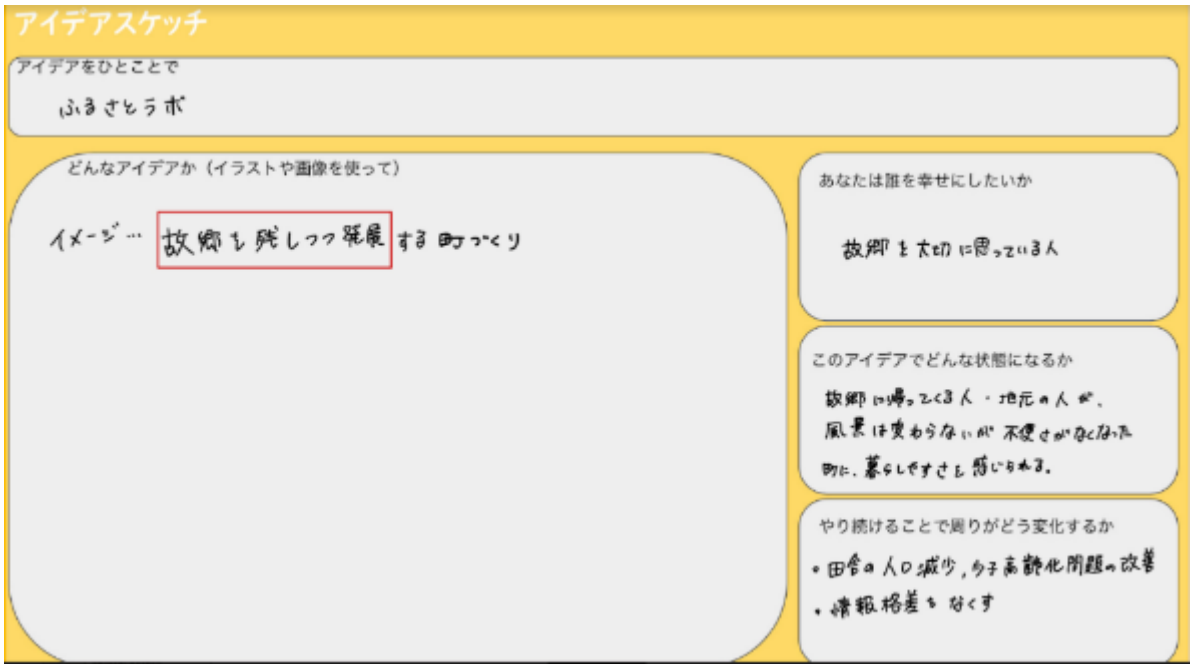
１月には、自分が考えたアイデアについて社会人の方々とワールドカフェを行い、アドバイスをもらった。アドバイスをもとにアイデアをブラッシュアップし、発表を実施した。

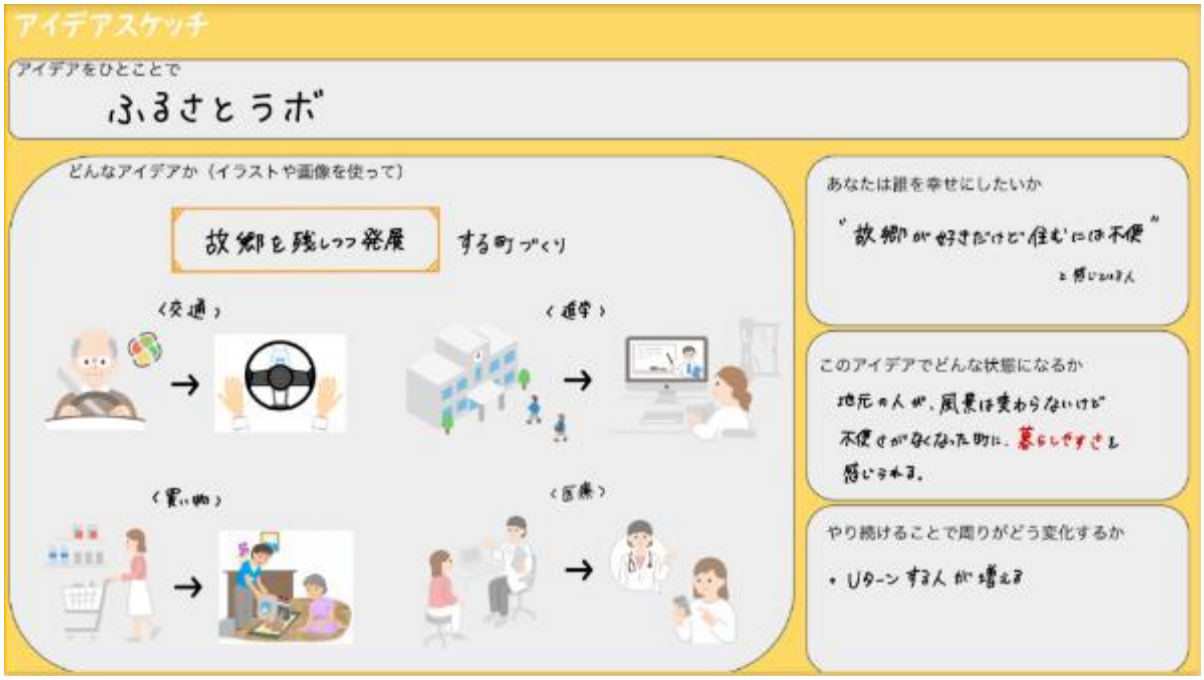
ワールドカフェの様子



ワールドカフェ時点のアイデアスケッチ

発表用アイデアスケッチ





アイデアスケッチの変容の例

ルーブリック評価項目

観点／レベル		STEP１	STEP2	STEP3	STEP4
思考・判断・表現	情報収集力	インターネットから情報を収集することができる。	複数の情報源から幸せについて情報収集することができる。	複数の情報源（哲学者、文献、ニュース、新聞、インターネット等）から幸せについて多面的な視点で情報を収集することができる。	複数の情報源（哲学者、文献、ニュース、新聞、インターネット等）から幸せについて多面的な視点で必要な情報が何かを理解し、自らで情報を収集することができる。
	整理・分析力	自分の考えで幸せを定義できる。	収集した情報と自分の考えから幸せを再定義できる。アイデアを考えることができる。	収集した情報と自分の考えから幸せを再定義できる。アイデアを創造することができる。	収集した情報から本質を見出し、自分の考えと統合し、幸せについて再定義することができる。 アイデアを創造することができる。
	表現力	自分の考えを、発表することができる。	自分の考えを、アイデアスケッチにして発表することができる。	限られた時間の中で、わかりやすく簡潔にまとめ説明することができる。	限られた時間の中で、わかりやすく簡潔にまとめ説明することができる。 納得・共感をしてもらえる内容である。
主体性	自己変革力	自分の幸せに向けて目標を立てることができる。	自分の幸せに近づく方策を考え自ら行動することができる。	常に自分自身を見直し、反省しながら、学び続け、次の行動につなげて行動できる。	社会の中での自分の役割や意識を考え、自分の幸せと関連付けて行動することができる。
	責任感 ポジティブ	自分を意味ある存在として考え、物事をポジティブに捉えることができる	自分に自信をもち、目の前の課題に自分のこととして行動することができる	自分の役割を見つけることができ、すぐに解決方法がわからなくても考え続けることができる	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任を果たし、失敗したとしてもその失敗を糧にできる

単元２を振り返ると、当初目標としていた思考力・主体性の強化については、考えようとする姿勢や社会への興味がもて始めたという点で一定身に付けられたと考える。しかし、決して十分ではなく、自分の考えをもつことに抵抗がある、自分の考えが正解なのか不安という生徒はやはり多い。これは自己肯定感の低さからだと考えている。また、学習方法も知識詰め込みであったため、なぜ正解のない問いを考えるのかという重要性を生徒に落とし込みができていなかった。

社会人とのワールドカフェについては、非常に有意義な時間になったと感じている。この学年は、コロナ禍から学校が始まったということもあり、様々な活動が制限されており、地域に出て活動や外部の人とコミュニケーションを取るという機会が他の学年に比べて少なかった。そのため、こういった活動を通して、実際に社会で活躍されている方々の言葉というのは重みがあり、生徒自身にも胸に刺さることも多数あったと感じている。また、広い視野の獲得などアイデアを考える上での一助となった。

年間を振り返り、身に付けさせたい力、どう身に付けさせていくか、何をもって評価するか、ゴールイメージ等といった教員の共通理解をもつことが重要である。さらに探究学習において、探究力とは高校の総合的な探究の時間だけで身に付けさせるものではなく、日々の授業、小中学校や地域、行政との連携が必要不可欠であると感じている。

次年度に向けても、今年度の取組を継続させつつ、完成度を高めていき、総合的な探究の時間の学習方法を確立させていきたい。

４　アンケート結果と分析

本研究の成果を確認するにあたり、本年度も３種類のアンケートを実施し、その結果をもとに生徒の成長や研究の成果を評価した。実施するアンケートは、三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティングが実施する「高校魅力化評価システム」、本校で作成した生徒と地域住民に対して実施する「指定事業効果測定アンケート」である。なお、大方高校が作成したアンケートは、生徒用と地域住民用で調査内容が異なるため、２つは異なるアンケートとして位置づけている。

「高校魅力化評価システム」は、年間１回実施される調査であるため年度内で生徒の実態や成長の比較はできないが、経年変化や学年、他地域の同システムの実施校の状況との比較により、全国と比較して結果の把握と分析ができるというメリットがある。

表　実施したアンケート一覧

項目 アンケート	実施主体	対象	実施時期	実施形態
高校魅力化評価システム	三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング	生徒・地域住民等	令和４年　８月	選択
指定事業効果測定アンケート	大方高校	生徒	令和４年　９月 令和５年　１月	選択・記述
指定事業効果測定アンケート	大方高校	地域住民	令和５年　１月	選択

（１）高校魅力化評価システム（６６ページ参照）

１年生は昨年度入学生との差を見て考察をする。学習者は「協働性に関わるウェルビーイング」「社会性に関わるウェルビーイング」が非常に高い水準にあり、各項目で肯定的な思いを抱いていることが分かる。一方で、他の項目では高くない結果となっている。本結果より、生徒の行動実績や資質・能力の向上を実感できる機会・準備が十分でなかったことが授業者側の反省点としてあげられる。今年度の探究学習ではテーマを「自分探究」とし、自分と向き合う機会や他者の生き方に触れる機会はあったが、それを誰かのためになるような形でアウトプットする機会は少なかった。そのことが結果につながったのではないかと考える。強みであげた部分は探究力や主体性の向上に向けた成長エンジンであるため、今後も温めつつ、誰かのためになるような機会を取り入れ、成長した実感を得られる学習活動を図っていく。

２年生は、アンケート分析により成果が大きく２点、課題が２点あげられる。

成果に関して１点目は、自身の考えやアイデアを構造的に１枚で表現し、その内容を他者に効果的に伝えることができるようになった点である。アンケート項目の「自分の考えを文章や図表にまとめる」においては、９割以上の生徒が肯定的な回答であり、アイデアスケッチやエレベーターピッチを活用したアイデアの構造的表現技法の獲得やアイデアソンなどでの提案内容を模造紙やスライドでアウトプットする機会を多く設けたことが要因として考えられる。

２点目は、地域をよりよくしていく未来志向の課題解決アプローチをできるようになった点である。アンケート項目の「地域の課題の解決方法について考える」においては、88%の生徒が肯定的な回答であり、砂浜美術館や黒潮町全体といった地域教材を、年間を通し

て活用し、目指す生徒像や身に付けさせたい力を明確化し、指導できたことが要因として考えられる。

課題に関しての１点目は、探究性に関わる自己認識が下がったことである。探究性に関わる学習活動に関しては、力がついたと認識しているが、求められる力までは到達していないという結果が得られた。数値を見ると、ポイントは大きく下がっているが、逆の見方をするとメタ認知できるようになったと考えることもできる。また、ルーブリック評価において、社会で求められているレベルを最高評価に位置付けたことで、自身の現状と理想の Gap が可視化できてきたともとらえることができる。

２点目は、共感する力が教員・生徒とともに弱いという点である。アンケート項目の「人と違うことが尊重される雰囲気がある」に対して、生徒と教員のポイント差が、10 ポイントあり、学習者とファシリテータ（教員）の認識の違いが生じていることが分かる。答えのない問いについて考えていく中で、多様な意見を受け入れ、統合し、アイデアを創出していくことが十分に行えておらず、探究学習を進めていくうえで大きな障壁になりかねないため、策を講ずることが急務であると考えられる。

３年生では、協働性に関わる行動の項目が向上している。これは、生徒が考えたアイデアを生徒間だけでなく、ワールドカフェの実施により社会人の方々からアドバイスや助言をもらう活動を行ったことが要因として考えられる。一方で、主体性の向上を図ったが、生徒の自己認識では粘り強さの項目で前年度と比べ肯定的回答が減少した。失敗してもよいという雰囲気づくりができていなかったことが原因と考えられる。また、探究に関わる行動の項目の授業で「なぜそうなるのか」と疑問をもって、考えたり調べたりしたという質問に対しても前年度と比べ肯定的回答が大幅に減少した。このことからも主体性をもたせることが不十分なため意欲的に探究させることができなかったと思われる。

（２）防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート（７１ページ参照）

生徒対象のアンケートについては、第１回（９月）と第２回（１月）の２回実施した。

設問は、本事業で育みたい力としてあげている５つの力（「探究力」、「つながる力」、「多様性受容力」、「マネジメント力」、「レジリエンス」）に基づく内容とした。

１年生は、すべての問いに対して、肯定的な回答が６割以上あることから一定の成長があったと捉えている。各回答より特筆すべき点を述べたうえで、今年度の成果と課題を示す。

まず、肯定的な回答が９割を超えたのは問２（あなたは学習活動を通して、地域の魅力や良さを理解する力が身に付いたと思いますか。）である。地域で活躍されている方の働き方・考え方に触れられる「ケーススタディ」や「防災学習」などで、“自分や他者はどのような価値を見出して行動するか”といった視点で物事を捉える活動をしたためだと考えられる。

否定的な回答が３割を超えたのは、問１（あなたは学習活動を通して、計画を立てて取り組み、それを実践する力が身に付いた）と問５（あなたは学習活動を通して、地域に魅力や良さを、他の地域の人に自分の言葉で伝えることができる力が身に付いたと思います

か。）である。問１については、総合的な探究の時間における各単元のまとめ段階でパフォーマンス課題を実施したことにより、計画的に課題に取り組める生徒とそうでない生徒が顕著に捉えられた。また、問５については地域の方々へ自分たちの考えや思いを伝える機会がなかったことが影響していると思われる。

これらのことを分析の中心に捉え、成果は①学習材（地域や人など）の魅力の見出し方の獲得②各人が抱く課題の発見である。そして次年度の学習を設計するにあたっての課題は、自らで課題解決に向けた見通しをもつこと（計画性）だと捉えている。防災学習や探究学習の中で多様な方と関わり、それらから見出したことを生徒の言葉で表現できる学習課題を設定し、生徒の成長を今後も図っていく予定である。

２年生は、アンケート分析により成果が１点、課題が１点あげられる。

成果としては、メタ認知が進み、自身の強み弱みを言語化できるようになったという点である。昨年度末にも同じアンケートを実施したが、記述回答の部分がほとんど記入できておらず、単語での表現やわからないといった回答が多くあった。しかし、今回に関しては自身を分析したうえで、的確に表現できており、アンケート項目の「学習活動に取り組むことで、あなたが『自分は成長した』と思うのは、どのようなところですか。以前の姿とともに２つ以上書いてください。」に対して、「自分の見つけ出した課題を他の人に伝わりやすいようにプレゼンする力が身に付いた(成長)、要点がまとまっておらずごちゃごちゃした資料になっていた(以前)」や「発表する度に改善点を見つけ出し、最後は納得がいくような資料にその場で変更することができるようになった(成長)、同じ資料をずっと使い回していた(以前)」といった回答があり、活動を振り返り、生徒自身が成長を実感できるような機会を設けることに教員側が注力したことが今回の成果につながったと考えられる。

課題としては、自主性が低いといった点である。総合的な探究の時間だけに限らず、学校生活全体において、先生の指示待ちになることが多く、自身で考え主体的に行動するということが苦手である。その要因として、先生主導の学校生活になってしまっている点にあると思われる。生徒自身が主体的に意欲的に協働的に学習に取り組む機会を、教員自身が多く設ける必要があり、学校全体で今後検討していくことが必要であると考える。

３年生は、ほとんどの項目で前年度に比べ肯定的回答が増加している。自己肯定感の低い学年であったため、自己肯定感の向上は成果としてあげられる。特に「あなたは学習活動をとおして、高校卒業後も何らかの形で地域の課題解決に関わる力が身に付いたと思いますか」という問いに対して前年度と比べ、２０％以上も向上した。これは、様々な取組を通じて地域の現状を知り、貢献したいという意欲が身に付いてきたと考えられる。

課題としては、回答理由の記述が根拠をもって表現、言語化されていないものが多数であった。これは、１年次より自分の考えや意見を言語化する機会が少なかったことが考えられる。また、教員が求めている水準と生徒の自己評価に乖離もあり、生徒に十分に伝えきれていないことが原因として考えられる。

また、肯定的な回答をした生徒の理由について記述した内容を、次の６つのカテゴリーに分類した。

・「経験・行動」：学習や情報収集ほか、地域に出て行う活動にもとづく記述
・「成長実感」：以前と比較してできなかったことができるなど成長を意識した記述
・「思考活動」：考えたり比較したりする活動にもとづく記述
・「気づき・理解」：新たな気づきや再確認、理解などに関する記述
・「意欲表明」：将来に向けた方向づけや「～したい」といった前向きな記述
・「その他」：いずれの分類にも入らない記述

記述内容には、「視野がとても広がった。今まで自分とその周りぐらいだったが、今は地域、日本、世界の大きさで考えることがどんどん増えていったと考える。このことから、自分はすごく成長したと思う。」、「前までは本当に計画を立てて取り組むことはできていなかったけど、計画を立ててプラス実践するということができるようになっているのではないかと感じる。」、「僕は人との関わりは嫌いだったけどこの学校に入ってからはどんどん好きになった。」など、たくさんの肯定的な意見を知ることができた。地域の人々と触れ合う活動や探究的な活動を通して学びが展開されることにより、気づきや理解が促進され、意欲や成長の実感につながっていると考えられる。

（３）大方高校の地域貢献活動に関する地域住民アンケート（８１ページ参照）

地域住民を対象としたアンケートでは、地域住民 １７５名から回答を得ることができた。肯定的な回答が最も高かったのは、問７「生徒たちの取組は、今後も継続させてほしいと思う」で、９９.４％であった。

一方、肯定的な回答の割合が少なかったのは、問８「生徒たちが行った取組を発表する際は、子どもや孫と一緒に発表を聞きに行きたいと思う。」と問９の「生徒たちが行う取組に対して、地域住民は積極的に協力していると思う」であった。

問６「生徒たちが取り組む活動は、地域住民が高校の存在を意識するものになっている」の肯定的意見は９４.９％であり、一昨年８８.５％、昨年８６.４％から大きく向上した。コロナ禍ではあったものの、外部の方と連携した取組を可能な限り実施したことが、地域住民の認知につながっていると思われる。

記述では、「各地域の避難訓練などで生徒が考える共助の取組を実際に入って提案し、地域での実践を重ねていけば、動く人も増加すると思う。」、「防災や地域活性化など、幅広い分野で新しい自由な発想や意見を今後も出してほしい。」などの意見もあった。高校生が探究活動で学んだ情報収集・分析を生かして取組を提案し、様々な活動を地域とともに行うことで地域の活性化にもつながる期待もあり、さらに取組を深化させていきたい。

Ⅳ　令和４年度　研究開発実施状況

１　運営指導委員会とコンソーシアム委員会

（１）運営指導委員会

運営指導委員会は下記のメンバーで構成し、年２回開催して協議を行った。

＜委員＞

石筒　覚 委員　　田中理恵 委員　　村上健太郎 委員　　矢守克也 委員
畦地和也 委員

＜学校＞

校長 正木敏政　　教頭 上原　健　　主幹教諭 田頭克文
教諭 浦田友香　　教諭 石丸滉貴　　教諭 武市裕樹　　教諭 北川紫陽
教諭 大原里佳　　教諭 土居美都里　　地域協働学習実施支援員 西村優美

＜管理組織＞

高等学校振興課長 野田健一　　チーフ 中越啓介　　指導主事 仁木大輔

第１回運営指導委員会は以下の次第で令和４年８月１日に行った。

- ○　開会行事
- ○　会長・副会長選出
- ○　令和４年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業の実施計画についての説明および協議
- ○　閉会

前半は、学校側から本年度の計画や評価方法、ここまでの進捗状況等についての説明を行った。後半は、今後の取組に関して助言をいただいた。以下、各委員の発言の概要を示す。

「地域学」に対して

- ○　新しいことを始めると色々と摩擦があるが、教員・生徒ともに乗り越えてきたと推察する。生徒にとってはその頑張りが将来にむけての財産となると感じた。
- ○　『未来へのメモワール』は日本の防災教育の革命的な転換であると考えている。あえて理科的な側面から入るのではなく、自分の大切なものに向き合うことが、防災が自分事になる有意義なアプローチであると考える。
- ○　『臨時情報』も半割れ、全割れという理科的な側面ではなく、自分はどう判断するというそれぞれのストーリーを考えることで、個人のハザードを考えるよい活動となっている。
- ○　自分の学校が避難所となることが良い教材となる。３年生で避難所運営を考えることがよい学びになると感じた。
- ○　異年齢との交流が素晴らしい。
- ○　高校生だけの活動は思考の広がりに限界があり、地域との関わりをもっている学習は有意義である。
- ○　要配慮者研究においては多文化共生の面でも黒潮町の外国人技能性との関わりも考えてみてはどうか。

○　小学生との交流は有意義であると考えるが、今年は実践の予定があるのか。
　　→　入野小学校との交流予定
○　避難所における弱者の定義についてはどう考えているか。
　　→　避難所に限らず、平常時の社会にある弱者に対する問題に目を向けさせ、
　　そこから避難所内の弱者とは、ということを考えさせていきたい。

「総合的な探究の時間」に対して
○　地域との交流の意義が大きいのは、小学生や高齢者のことを知れるということではなく、その人たちを前にした時に違う自分や自分の価値観を見出せるというところである。立場が人をつくったり、役割や関係性がその人の個性をつくったりすることから、どんな人と関係をもたせるのかが重要である。
○　１年生の９マス自己表現は面白い取組である。場面で違う自分を経験させてあげることで、個性が固まっていくと考える。
○　どの学年もよく工夫されていると感じた。
○　ワークシートを比較して、自分発見につながると感じた。
○　思いをもってプログラムづくりをしていると実感した。大人になっても探究していくということが生徒たちに伝わるとよい。
○　越境体験が有意義であるが、オンラインで県外の高校生との交流を考えてみてはどうか。
○　ルーブリックで出てきた生徒のギャップをどう埋めていくか、ルーブリックを活用して生徒との向き合い方を調整することが大事。
○　小中学校でも探究学習が調べ学習に終わってしまっている。教員が自分の知らない分野を生徒が探究のテーマに設定することを嫌がる傾向にある。それでは生徒の学びが深まらない。子供たち同士で深め合う、探究しあう風土ができたら学びが深まっていくと考える。その為の仕組みづくりを考えてみてはどうだろう。
○　美術館学習においては砂浜美術館の理念から何を学ぶかという視点がブレないようにしていただきたい。
○　県外生にとっては生まれ育った故郷を離れて見えた新しい視点、地元生にとっては県外生の新しい視点が、双方にとって相乗効果を生み出している。

第２回運営指導委員会は以下の次第で令和５年３月１６日に行った。
○　開会行事
○　今年度の取組報告と次年度以降の取組についての報告と協議
○　閉会

第２回は、学校側から「地域学」と「総合的な探究の時間」について、それぞれ本年度の取組と次年度の取組の方向性についてまとめて説明し、協議を行い、今後の取組に関して助言をいただいた。以下、各委員の発言の概要を示す。
「地域学」に対して

○　メモワールを１年次にやって、また３年次にも行うことに意味がある。革命的なアプローチである。これまでの防災は実務的なスキルや自然科学の内容が多いなかで、このプログラムは新しく今までにない。弱点もあるかもしれないがすごく新しいことで生徒がこれを通して大人に話す力につながっている。

○　臨時情報まだ難しいというコメントがあったが、「簡単だった」といわれたほうがこちらとしてはショックである。決して簡単な問題ではないので、高校生が難しいというレスポンスのほうが安心する。だからこそ、あなたならどうすると問われて、主体的に考え、さらに深く考え、対話的に考えることができていたと思う。１年生の段階で大きな問いをぶつけられて、今後２年間考え続けるという姿勢が大切である。

○　３年間の形がしっかりしたプログラムで難しいと考える生徒が増えたことがすばらしい。そもそもすぐ解決する素材ではなく問いがつづく。探究的な要素、深い振り返りをすることができるプログラムだと思う。体験をとおして振り返り、黒潮町という地域への入り方を体現し、いろいろな先生がかかわりやすいようなプログラムになった。課題も一方であると思うが、つねに変化に対応しながら工夫していくことができる。

○　地域側の変化にも対応しやすい持続可能なプログラムになっている。

○　対象地区を変更していくなどということもできる。

○　防災という切り口からこれだけたくさんの学びが得られていることがすばらしい。私は２０年前に東京で、ある先生の講座を２回受けたことで人生観がかわった。大方高校の生徒たちは３年間できっと将来についての考え方も変化があったと思う。

○　子供たちが社会の問題には答えがないと気づいたことが大切である。学校の授業では先生が「分かりましたか？」「はーい」で終わるけれども地域の活性化の問題はそんな簡単な問題ではない。分からなかったというほうがよっぽどすばらしい。生徒たちが地域のために将来貢献したいと思っただけですばらしいことであるので、今後もこのようなわからない問題にチャレンジさせることをお願いしたい。

○　大方高校の防災の取組はしっかりとした教育になっている

「総合的な探究の時間」に対して

○　インタビューということばの語源は、インターとビュー「ものの見方、見え方、つなぐ、かかわる」という意味。どういうキャリアを積んで、どういう苦労をしてきたのか、それをとおして今の自分のことや価値が新たに分かる、自分×他者×価値の総合的な探究の時間のいくつかのコンセプトと結びついている。

○　文章で表現することが苦手である生徒に対して、１年のプログラムで向上をはかっている。それが魅力的である。時間をかけてそれに取り組むことが大切で、生徒が的確に表現できないというもどかしさもあるが、その繰り返しが必要である。１年生でこれに取り組むことで、２・３年で深くなるし、進学してからも役に立つスキルとなると思う。

○　発表の場に同席したが、２・３年生が自分の言葉で表現していると感じた

○　頭に浮かんでも説明できないのはスキルの問題である。対話型授業を心掛け、「なぜ」というあいまいな聞き方ではなく、「それはどこから」と具体的に説明をさせるような聞き方をすることもできる。日常の授業のなかで理由を考えていく力をつけていくことが大切である。

○　PBL は個人とグループの活動の見極めが大事である。学年や生徒によっても違うので、今後プロジェクトを進める際に個人とグループダイナミクスのコンビネーションを大事にしてほしい。
○　オリィ研究所訪問に同行したが、未来　夢×技術×形（デザイン、仕組みを考えるアート思考）を学べた。講師の夢から始まって、今ある技術を活用して実際に製品をつくり、人と人をつなげる仕組みをデザインしている。ぜひ今後もこのようなことを生徒たちに見せてやってほしい。
○　課題が見えた時に地域をもっと頼ってもいいと思う。
○　知識を出すことに長けている生徒が正解のない課題に対して納得解を出すことがでいないのは問題である。思考力の強化が非常に大事であり、難しいからこそ考え続けることが重要である。
○　このプログラムが正解というわけではなく、学年や集団によって違うので変化が必要である。地域学や総合的な探究の時間を他の教科と並列ではなくベースとして学ばせ、他教科でも横断的にクロスさせていただきたい。校内すべての先生が関わっているという意識をもって取り組んでほしい。

（２）コンソーシアム委員会

コンソーシアム委員会は下記のメンバーで構成し、年３回開催して協議を行った。

＜委員＞

川村晶子 委員	山﨑直子 委員	杉山高志 委員	森田俊彦 委員
濱口無双 委員	清水幸賢 委員	宮﨑宏治 委員	大塚明人 委員
西村優美 委員	酒井　稔 委員	村越　麗 委員	正木敏政 委員

＜学校＞

教頭 上原　健	主幹教諭 田頭克文	教諭 浦田友香	教諭 石丸滉貴
教諭 武市裕樹	教諭 北川紫陽	教諭 大原里佳	教諭 土居美都里

＜管理組織＞

高等学校振興課長 野田健一　　チーフ 中越啓介　　指導主事 仁木大輔

第１回コンソーシアム委員会は以下の次第で令和４年８月２６日に行った。

○　開会行事
○　会長・副会長選出
○　令和４年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業の実施計画についての説明および協議
○　閉会

第１回は、学校側から本年度の計画や評価方法、ここまでの進捗状況等についての説明を行った。また、第１回運営指導委員会における協議の内容を踏まえ、取組を充実させるために必要なことについて協議を行った。学校からは「10 月実施予定の大方高校アイデアソンに向けての参加のご協力」、「防災での地域との協働」に関して、人材派遣の依頼や今後の地域との協働した学習の充実に向けた協議を行った。以下、各委員の発言の概要を示す。

「地域学」に対して

○　防災に関するチラシについて情報防災課でチラシを配布予定、地域住民に配布をする予定である。

○　要配慮者の方との交流や避難路検証については、社会福祉協議会と連携し行っていくことが望ましい。

○　臨時情報について NHK で全国放送された映像教材も活用してみるなど、授業展開の研究を今後も進めていく必要がある。

○　持続可能な避難所運営に関しては、「２way=Phase free」の考え方（平常時と非常時の差をなくしていく）が重要であると思うので、そのような考え方も授業内に取り組んでみるといいと思う。

○　大方地区より、佐賀地区のほうが防災教育や施設の拡充が遅れているように感じている。高校生が描く未来構想を時間があるようであれば提案していただきたい。

○　やって終わりの活動ではなくなっていることが素晴らしいと思う。日本赤十字社でも防災に関する講習を実施しているので、お役に立てるようであればお声がけいただきたい。

○　機能面、精神面の両側面からのアプローチが素晴らしい。

「総合的な探究の時間」に対して

○　地域の出会い直しについては、今回のケース当事者と会うのは初めてであり、地域人と交流する中で、郷土愛も醸成してほしいと感じた。

○　もっと身近な人と出会わせてもいいのではないかとも思った。

○　教員以外の大人と出会わせることは必要であると感じた。

○　中学生の国語力の低下が心配であり、情報収集の際もコピペに終わることが多く、収集した情報を正しく理解できていないため、中学校から訓練していくことが重要であると感じた。

○　様々な新聞を読ませてみてはどうだろうか。１つの真実に左右されず、いろいろな真実に触れることも重要だと考える。

○　指導者としてどういうゴールイメージをもって学習を行っていくのかが重要である。

○　年度当初に、総合的な探究の時間がなぜ必要なのかを動機付けし、意見の異なる人とどう関わっていくのかを疑似体験させ、多様性受容力を育ませる必要性があることを再確認できた。

○　自分なりの考え（アイデア）をどう出させていくかが重要だと考えている。先生が方向付けをしすぎると、生徒のアイデアではなくなってしまう。

○　現在地の確認が重要であり、目的を見落とさないことが重要であると考える。

○　中学生は、「情報は他者が与えてくれるもの」といった思考が強い。自身がどう考えるのかを思考するのが難しい。地域の方の力を借りながら生徒を育成していく意義を、発表を通じて強く感じた。

○　メタバースが与える影響は大きい。今後、「働く」という定義が変わっていくかもしれない。先生が未来社会について的確に理解し、生徒たちにインプットしていく必要がある。

〇専門性をもった方を巻き込み、教育プラットフォームを創っていくことが重要である。

第２回コンソーシアム委員会は以下の次第で令和５年２月１３日に行った。

〇　開会行事

〇　令和４年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業の実施計画についての説明および協議

〇　閉会

前半は、学校からここまでの取組・成果・課題と今後の取組についての説明を行い、委員の方からそれに対しての意見や助言をいただいた。後半は、コンソーシアムと学校の連携についての協議を行った。以下、各委員の発言の概要を示す。

「地域学」に対して

〇　テレビで南海トラフ地震の特集が放送予定であるが、そのテーマが臨時情報である。これから臨時情報の気運が生まれてくるので、学んでほしい。

〇　三角地についてゴールがないほうが面白い、大方高校の象徴になるのではないか。

「総合的な探究の時間」に対して

〇　見通しがもてる取組で、生徒も安心して取り組んでいるのではないかと思う。文章表現の課題は小中学校からの課題でもある。

〇　教員側が変わったという印象を受けた。教員も一緒に学ぶことやその姿勢が多種多様な生き方、考え方につながる。それこそがケーススタディになるのではないか。

〇　２年生の町長提案の延期は残念だが、以前なら期限に間に合うように体裁を整えてなんとなくやっていたのではないか、内容を押さえ始めきめ細かいところにフォーカスしてきたからこそ遅れてしまったのではないか。

〇　地域や様々な外部人材を活用して取り組んでいる、また、子供たちにどういった力を身に付けさせたいかを明確にして取り組んでいるところが素晴らしい。

〇　大方高校で学ぶことに意義がある取組という印象で、教員が一緒に探究しようとする姿勢がよい。地域学と総合的な探究の時間を大方高校の強みとして大方高校の教員でしっかり共有し、中心的な取組として取り組んでいくことが重要。

〇　色々な人の目に触れる機会が多くなってきている。生徒が成長を実感できることが１番重要である。活動を実施する際は同窓生も積極的に活用してほしい。

〇　幸せという探究テーマ設定は面白く、深みがある。人の数答えがあるテーマを設定することはよい。生徒が分からないなりに考えようとする姿勢が１番重要である。

〇　提案の延期という状況に対してじゃあどうすると生徒に投げかけ、その都度改善していくことが探究につながる。

〇　教員にとっても探究、その都度生徒も社会も変化する。常々一緒に探究していこうとする姿勢が大方高校の素晴らしいところ。

〇　大方高校の取組が保護者に伝わっていないのではないか、ＰＴＡ役員にも参加してもらってはどうか。

〇　小中学校、大方高校の生徒と関わってみて、人に刺さるような伝え方が課題と感じている。それを克服するためのカリキュラムを取り入れたことで成長につながっているところもある。

○　３年前のコンソーシアム委員会では、教員側からネガティブな声が多かった。しかし、今はポジティブな意見が出てきて動き始めている。
○　生徒が学外での発表する機会を増やしてみてはどうか。それがまとめて相手に刺さるような伝え方を考えることにもつながる。
○　教員によって生徒に差が出てきている。対話しながらやってきた生徒は明らかに成長しており、生徒自身も実感している。
○　外部の方が入りやすいように環境を整えてほしい。
○　探究学習をやることで教科の指導も変わる。教員が変わると生徒も変わる。

Ⅴ　次年度に向けて

３年目、最後の年となった指定事業であったが、本年度も新型コロナウイルス感染症のため制限の多い中での事業展開となった。できることを考え、対面での交流が難しい場合はより急速に進んだオンラインを活用して生徒の学びが止まらないように努めた。年度後半は活動も多くできるようになり、全校生徒でアイデアソンを行ったり、学年別でワールドカフェを行ったりするなど、外部の方との交流も行うことができた。延べ２００人を超える外部の方から本校の事業に協力をしていただくことができ、生徒の成長を後押ししてくれたと感じている。また、ここでつながることができた人脈は本校の大きな財産となった。

本事業は終了するが、次年度からがまさにスタートであると感じている。この３年間で得た「総合的な探究の時間」におけるカリキュラム設計の手法や「地域学」における地域との連携したカリキュラムの確立など、その成果は大きい。しかしながら、３年間で解決しなかった課題もまた多い。

「総合的な探究の時間」をはじめとする探究的な学習、地域と連携した学習の推進を分掌業務以外で担ってきたが、一部の教員への負担が増大したため、次年度からは分掌業務として位置付ける予定である。また、「総合的な探究の時間」については学年団による授業実践の形態をとっていることから、学年団での情報共有や指導に対する協議を密に行う必要がある。現在のところ組織的な動きの弱さから、担当教員による指導の格差が生まれ、生徒の成長に影響を及ぼしている。対策として“新たな会”を創出するだけがすべてではなく、今あるものの活用や効率化による改善策を見出していく必要があると考えている。この課題の解決は教員の新しい学習指導要領の正しい理解と変革を受け入れる柔軟さ、しなやかさが基本にあればそう難しいものではないと考えている。

Ⅲ　令和４年度　研究開発完了報告書

令和５年３月３１日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　高知県高知市丸ノ内１丁目７番 52 号
管理機関名　高知県教育委員会
代表者名　　長岡　幹泰

令和４年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

１　事業の実施期間

令和４年４月１日（契約締結日）～令和５年３月 31 日

２　指定校名・類型

学校名　　高知県立大方高等学校
学校長名　正木　敏政
類型　　地域魅力化型

３　研究開発名

「地域密着型の未来の“地域の創り手”人材の育成（ソピアの旗）プロジェクト」

４　研究開発概要

本校はこれまで、総合的な探究の時間において「自律創造型地域課題解決学習」を柱として位置づけ、コミュニティ・スクールの強みを生かした取組を進めてきた。近年は学校設定科目である地域学において地域防災における課題解決に取り組んでいる。生徒たちは、地域に出て地域から学ぶことにより課題解決能力が身に付いており、探究力の向上や地域貢献等への意欲も向上している。

今後は本事業を通して付けたい力「探究力」「つながる力」「多様性受容力」「マネジメント力」「レジリエンス」を育成するとともに、直接・間接に関わらず郷土を愛し誇りをもった未来の「地域の創り手」となる人材の育成を目指す。そのため外部の専門家との連携を基に、新学習指導要領で位置づけられている探究活動を推進し、効果的なカリキュラムの開発を行い、事業終了後も改善を進めながら効果的な取組を継続していく。

５　学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

・学校設定教科・科目　　(開設している)　・　開設していない
・教育課程の特例の活用　　活用している　・　(活用していない)

6　運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
畦地　和也	黒潮町教育委員会　教育長	関係行政機関の職員
村上　健太郎	NPO 砂浜美術館　理事長	学識経験者
矢守　克也	京都大学　教授 人と防災未来センター　上級研究員	学識経験者
石筒　覚	高知大学地域協働学部　准教授	学識経験者
田中　理恵	地域・教育魅力化プラットフォーム	学識経験者
長岡　幹泰	高知県教育委員会　教育長	管理機関の職員

7　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
高知県教育委員会	長岡　幹泰（教育長）
高知大学次世代地域創造センター	川村　晶子（特任教授・学長特別補佐）
合同会社 NOKs Labo	山﨑　直子（代表）
京都大学大学院矢守研究室	杉山　高志（研究員）
黒潮町観光ネットワーク	森田　俊彦（会長）
黒潮町産業推進室	濱口　無双（産業推進係主任）
黒潮町教育委員会	清水　幸賢（教育次長）
黒潮町立佐賀中学校	宮﨑　宏治（校長）
黒潮町立大方中学校	大塚　明人（校長）
高知県立大方高等学校	西村　優美（地域学校協働活動推進員）
高知県立大方高等学校ＰＴＡ	酒井　　稔（会長）
高知県立大方高等学校同窓会	村越　　麗（同窓代表）
高知県立大方高等学校	正木　敏政（校長）

8　カリキュラム開発専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発等専門家	杉山　高志	京都大学大学院矢守研究室・研究員	都度依頼し謝金支払い
カリキュラム開発等専門家	川村　晶子	高知大学　特任教授・学長特別補佐	都度依頼し謝金支払い
カリキュラム開発等専門家	森　　和美	高知大学　次世代地域創造センター地域 DX 推進グループ	都度依頼し謝金支払い
地域協働学習実施支援員	西村　優美	大方高校地域学校協働活動推進員	都度依頼し謝金支払い

9　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施期間（　令和４年４月１日　～令和５年３月 31 日）											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
各種会議等における日程調整や情報提供	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
円滑な事業執行のための学校への助言	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
国費に上乗せした独自の支援や取組の実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
地域協働学習実施支援員の配置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

（2）実績の説明

①運営指導委員会について

活動日程	活動内容

令和４年８月１日	第１回運営指導委員会 ア　令和４年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業の取組についての説明。 イ　アに対しての意見や助言をいただいた。 ウ　探究活動や地域との連携について協議が行われ、指導・助言をいただいた。
令和５年３月 16 日	第２回運営指導委員会 ア　令和４年度の取組・成果・課題についての説明と、次年度以降の取組についての説明。 イ　アに対しての意見や助言をいただいた。地域学や総合的な探究の時間を他の教科と並列ではなくベースとして学ばせ、他教科でも横断的にクロスさせる等の指導・助言をいただいた。

②コンソーシアムについて

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和４年８月 26 日	第１回コンソーシアム委員会 ア　令和４年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の取組について、令和４年度第１回運営指導委員会でいただいた指導・助言を生かした事業計画等の報告。 イ　アに対しての意見や助言、協働できることの提案をいただいた。 ウ　取組を充実させるために必要なことについて協議を行った。学校からは「10 月実施予定の大方高校アイデアソンに向けての参加のご協力」、「防災での地域との協働」に関して、人材派遣の依頼や今後の地域との協働した学習の充実に向けた協議を行い、意見や助言をいただいた。
令和４年４月 22 日、５月 27 日、８月 30 日、10 月 17 日、令和５年１月 16 日、３月 13 日	ふるさとキャリア教育　黒潮町まるごと教育祭 教育祭の実施方法等についての協議を実施。保育所、小学校、中学校などの関係機関と６回の協議を重ねた。コロナ禍により集合ではなく地元ケーブルテレビでの放送としてきたが、この方法が参加もしやすく輪を広げていきやすいということになり、今年も黒潮町のケーブルテレビで配信した。
令和５年２月 14 日	第２回コンソーシアム委員会 ア　令和４年度の取組・成果・課題についての説明と、次年度以降の取組についての説明。 イ　アに対しての意見や助言をいただいた。 ウ　コンソーシアムと学校の連携についての協議。

③カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けは以下のとおりである。

【総合的な探究の時間のカリキュラム開発担当】

高知大学　次世代地域創造センター客員准教授　川村晶子氏（都度謝金支払い）

【地域学のカリキュラム開発担当】

京都大学矢守研究室研究員　杉山高志氏（都度謝金支払い）

活動実績【総合的な探究の時間】

活動日程	活動内容
令和４年５月６日	高知大学次世代地域創造センターで協議
令和４年６月 17 日	オンライン　・カリキュラムの内容について
令和４年７月 8 日	オンライン　・進捗状況の共有と意見交換
令和４年８月５日	オンライン　・進捗状況の共有と意見交換
令和４年８月 19 日	オンライン　・取組状況の共有と課題解決に向けた意見交換
令和４年８月 31 日	オンライン　・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和４年９月 13 日	オンライン　・進捗状況の共有と意見交換
令和４年９月 16 日	オンライン　・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和４年９月 24 日	高知大学次世代地域創造センターで協議 ・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和４年９月 29 日	オンライン　・次年度の方向性と探究活動について協議
令和４年９月 30 日	オンライン　・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和４年９月 13 日	対面　・３年生発表会の講評等
令和４年９月 16 日	オンライン　・進捗状況の共有と意見交換
令和４年９月 28 日	オンライン　・進捗状況の共有と意見交換

令和４年９月 29 日	オンライン　・進捗状況の共有と意見交換
令和４年 11 月１日	オンライン　・進捗状況の共有と意見交換
令和４年 11 月 25 日	オンライン　・進捗状況の共有と意見交換
令和４年 12 月７日	高知大学次世代地域創造センターで協議 ・進捗状況の共有と意見交換
令和４年 12 月 16 日	対面　・３年生と対話による意見交換および助言
令和５年１月 11 日	対面　・３年生のプレゼンテーションへの助言
令和５年１月 26 日	オンライン　・進捗状況の共有と意見交換
令和５年１月 27 日	対面　・進捗状況の共有と意見交換
令和５年２月７日	オンライン　・進捗状況の共有と意見交換
令和５年２月９日	高知大学次世代地域創造センターで協議 ・進捗状況の共有と意見交換
令和５年３月３日	高知大学次世代地域創造センターで協議 ・進捗状況の共有と意見交換
令和５年３月 14 日	高知大学次世代地域創造センターで協議 ・進捗状況の共有と意見交換
令和５年３月 22 日	高知大学次世代地域創造センターで協議 ・進捗状況の共有と意見交換

活動実績【地域学】

活動日程	活動内容
令和４年６月 28 日	オンライン　・地域学のカリキュラムの全体像について ・未来へのメモワールについて ・教科横断的防災学習について
令和４年８月３日	オンライン　・地域学のカリキュラムの全体像について ・未来へのメモワールについて
令和４年９月 29 日	オンライン　・防災委員会の取組について ・活動を効果的に進めるための意見交換
令和４年 10 月 20 日	オンライン　・進捗状況の報告と今後の方向性に向けた協議
令和４年 11 月 18 日	オンライン　・防災委員会の取組について ・活動を効果的に進めるための意見交換
令和５年１月 12 日	オンライン　・JICA との交流についての打ち合わせ
令和５年２月 16 日	対面　・逃げトレアプリを用いた避難路検証の支援
令和５年２月 17 日	対面　・臨時情報についての支援

上記の活動の他に、電子メール等によりカリキュラムの内容や評価、展開上の留意点等について打ち合わせを行った。

④地域協働学習実施支援員について

指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けは以下のとおりである。

大方高校地域学校協働活動推進員　西村優美氏（都度謝金払い）

活動実績

日程	内容
令和４年８月１日	運営指導委員会 地域協働学習実施支援員として出席
令和４年 10 月６日	アイデアソンに参加
令和４年 12 月７日	２年　ワールドカフェに参加
令和５年２月 10 日	総合的な探究の時間　取組の協議
令和５年２月 13 日	コンソーシアム委員会出席
令和５年２月 21 日	総合的な探究の時間　取組の協議

仕事上の都合で来校が難しい状況であったが、ポイントポイントで来校しての支援をいただいた。また、来校以外では電子メール等により展開上の留意点等について打ち合わせを行った。

⑤管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

・各種会議等における日程調整や情報提供

・円滑な事業執行のための学校への助言

・国費に上乗せした独自の支援や取組の実施

・地域協働学習実施支援員の配置

・発表会や研究会での評価者としての参加および評価者人材紹介（コンソーシアム）

・地域学の防災学習における助言（コンソーシアム）

⑥高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

令和２年５月 25 日に、「黒潮町と高知県立大方高等学校における防災・地域課題解決を担う未来の地域の創り手人材の育成に係る協定書」を締結した。

〈添付資料〉黒潮町と高知県立大方高等学校における防災・地域課題解決を担う未来の地域の創り手人材の育成に係る協定書

⑦事業終了後の自走を見据えた取組について

事業終了後も取組を継続させていくため、防災と地域課題解決に関する取組に対して継続した支援をもらえるよう、黒潮町と協定を締結している。

併せて、黒潮町の人口減少の中、大方高校の魅力化促進に向け黒潮町と継続協議を行うこととしている。

１０　研究開発の実績

（１）実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
地域学（地域学入門）探究学習	6回	9回	10回	8回		8回	10回	6回	8回	9回	7回	
地域学(地域学Ⅰ)探究学習	4回	6回	6回	4回	2回	6回	4回	6回	6回	6回	6回	
地域学(地域学Ⅱ)探究学習	10回	16回	12回	8回	3回	10回	9回	12回	12回	6回		
総合的な探究の時間（１年）	3回	3回	4回	2回	1回	3回	2回	3回	4回	4回	4回	
総合的な探究の時間（２年）	3回	3回	4回	2回	1回	3回	3回	3回	3回	4回	3回	
総合的な探究の時間（３年）	3回	3回	6回	2回	1回	3回	2回	3回	3回	2回		
課外活動における地域との協働活動				1回		1回	2回		4回	2回	2回	

（２）実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

本事業の中核となっている学校設定科目である地域学と総合的な探究の時間において、探究活動を位置づけた年間の学習イメージ（グランドデザイン）を、カリキュラム開発等専門家の助言をもとに作成した。その際、「情報収集力」、「情報分析力」、「情報編集力」、「判断・決定力」、「論理的思考力」、「表現力」、「批判的思考力」等の課題発見・解決に必要な力を、学年ごとに身に付ける目標を定め活動を決定した。

生徒には、年度当初に年間計画、ルーブリック評価、卒業までに目指す生徒像等を提示し、年間の見通しと身に付けさせたい力の共有を図り事業を進めた。進めるにあたっては、生徒の状況に応じてその都度手法を変更するなど柔軟に対応しながら展開した。

学外の方にも協力いただき、多様な学びの場を提供できるよう進めていった。

〈添付資料〉地域学と総合的な探究の時間の「グランドデザイン」

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置づけ（各教科・科目や総合的な探究の時間、学校設定教科・科目等）

本年度は、学校設定科目である地域学、総合的な探究の時間、学校行事等で横断的な学習を計画した。

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

本年度は、各教科においての防災の観点を取り入れた探究的な授業展開について、カリキュラム開発等専門家である杉山氏を講師にオンラインにて研修会を開催した。また、学校行事においてもテーマと関連させた取組を行った。

④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

研究開発のイメージを示したビジュアル資料をもとに職員間で共有を行い、下記の育てたい５つの力を育成するために、「総合的な探究の時間」の学年担当者、「地域学」担当者で基本的に毎週協議を行い、学年団で共有を図った。

【育てたい５つの力】

Ⅰ	探究力	情報収集による課題理解・解決に向けた課題解決力
Ⅱ	つながる力	コミュニケーション・プレゼンテーション力、思いや願いの理解
Ⅲ	多様性受容力	多様な人との交流や理解
Ⅳ	マネジメント力	計画を立て取り組める力

⑤学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

総合的な探究の時間の担当者や地域学の担当者、防災教育プロジェクトチームや生徒会担当教員などが連携しながら取組を推進している。地域との連携は本事業の事業統括主任である地域学担当教員や、防災教育プロジェクトチームの責任者である教頭を中心として外部との連絡調整を行い、各学年担当他に取組を進めるという形で推進した。

⑥カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて

カリキュラム開発等専門家

・カリキュラム開発全般に関わる計画への指導助言
・発表会等における評価者としての関わりと教員との振り返り
・コンソーシアム委員会への出席・指導・助言

地域協働学習実施支援員

・地域人材との連携や活用に向けての連絡・調整
・本校事業に参加いただき生徒の状態を見たうえでの助言

⑦学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

カリキュラム開発等専門家との協議をもとに、担当者間の協議を基本的に毎週実施し進捗状況の確認や課題の洗い出し・改善方法の検討等を行った。特に、カリキュラム開発等専門家との協議は、オンライン会議システムを用いることにより多く実施することができ、きめ細やかな対応ができた。また、成果検証のアンケート結果等を管理職と分析し、取組状況と成果と課題等についての検討を行った。

⑧カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

京都大学矢守研究室研究員の杉山氏には本校防災委員会の取組や避難訓練時の防災活動について意見や助言をいただいた。また、黒潮町情報防災課とつないでいただき、防災活動に関して地域と連携した取組を行うことができた。

総合的な探究の時間においては、カリキュラム開発等専門家の川村氏から、グランドデザイン（年間の学習イメージ）の設計を行った。

具体的な活動に関して２点、活動成果を含め報告する。

１つ目は、全校生徒を対象にした「アイデアソン」である。黒潮町役場から 11 名、コンソーシアム委員である川村氏や森氏、西村氏、山崎氏、西村氏、佐賀中学校教員４名の方にご協力いただいた。また、今までの探究学習における関わりや先生方の紹介の方を含め、外部の方 50 名近くの方に協力していただき、充実した内容にすることができた。

２つ目は、２年生を対象にした「ワールドカフェ」である。コンソーシアム委員である川村氏や森氏、西村氏、さらには、コンソーシアム委員の皆様の関係者等計 12 名の方にご協力いただいた。

外部の方にご協力していただくにあたり、歌手の方や研究員の方など多様な職種の方に参加していただくことを意識し活動を行った。そのことで、テーマに対して多様な視点からアイデアが生まれ、教員と生徒という関係性のみでは生み出すことのない視点を出すことができ、学習が大変充実したものとなった。

⑨運営指導委員会等、取組に対する指導・助言等に関する専門家からの支援について

運営指導委員の方から、運営指導委員会において、本事業に対しての指導や助言をいただいた。特に、「義務教育を含めての地域連携と探究活動の連続性について」、「ルーブリック評価」、「振り返りの活用」、「探究活動の重要性」等については専門的な見地から指導・助言をいただいた。

⑩類型毎の趣旨に応じた取組について

「防災」をキーワードとした探究活動を展開することにより、地域の「防災」や魅力化に向けた課題解決を進め、未来の「地域の創り手」人材の育成を目指した取組を展開してきた。生徒の自己評価や外部評価において、肯定的な評価をもらうことができた。

今年度は地域の方々やコンソーシアム委員の方などをお呼びしての１５０人規模でのアイデアソンやワールドカフェなどの取組を実施した。活動を通して生徒に助言等をいただくことができた。

⑪成果の普及方法・実績について

地域学・総合的な探究の時間に関する取組をＳＮＳで紹介した。また、発表会をオンライン配信し、運営指導委員会やコンソーシアム委員会の委員が視聴できるようにした。3年生の発表は、本事業を受けている学校にも案内をしてオンライン配信する計画であったが、ハウリング対策を行うことができなかったため配信は中止した。

毎月発行している「ソピアの旗だより」においても、生徒の活動の様子等を、県西部地域の中学校３年生とその保護者、黒潮町民に対して紹介した。

１１　目標の進捗状況、成果、評価

（１）事業実施において設定した目標におけるアウトカム目標の達成状況

実施したアンケートの結果分析から、現時点では全ての学年において目標を達成できているとは言えない状況であるが、今後の取組を通して達成に向けた期待は十分あると考えている。アンケートでは昨年より下がった項目もあるが、生徒の聞き取りからは、昨年に続き学んだからこそ自分ができていないことに気づき、評価を下げたという声も聞かれ、今後に向けての意欲を感じた場面もあった。

高知県教育委員会が独自に実施する「高知県オリジナルアンケート」（別添資料）については、全体的に見ると肯定的な回答が多く見られたが、目標として設定（目標設定シート）している「地域への貢献等の活動を通して、自己効力感や自己有用感をもつことができた」と回答する生徒の割合では、目標値を大きく下回る結果となった。コロナ禍ではあるが、できることを考え実施し、昨年より交流できている。しかし、自分たちの活動が地域貢献になっていると思えていない生徒もいると思われ、地域の方にとって有用な活動をしたときにはそのことを伝えていかなければいけないと感じた。

「物事に取り組む際には、目標を立てその達成に向けて努力することができる」と回答している生徒の割合は 72%であり、昨年よりは上昇したが目標の 80%には届かなかった。生徒のアンケートの結果より、探究活動を通して見通しを立て、それに向けて最後まで取り組むことができるようになっているが、学んだからこそまだ足りないと記述している生徒もいる。探究活動を通して、この項目の内容が実行できるように継続していきたい。

地元（本校の設定は県内）への定着率については、約 63%の生徒が地元での進学・就職が決まっており、県内就職者は 100%となっている。

「高校魅力化評価システム」の結果を、学年別に振り返ると、１年生（昨年度入学生との差での考察）では、学習者は「協働性に関わるウェルビーイング」「社会性に関わるウェルビーイング」が非常に高い水準にあり、各項目で肯定的な思いを抱いていることが分かる。一方で、ほかの項目では高くない結果となっている。本結果から、生徒の行動実績や資質・能力の向上を実感できる機会・準備が十分でなかったことが授業者側の反省点としてあげられる。今年度の探究学習ではテーマを「自分探究」とし、自分と向き合う機会や他者の生き方に触れる機会はあったが、それを誰かのためになるような形でアウトプットする機会は少なかった。そのことが結果につな

がったのではないかと考える。強みであげた部分は探究力や主体性の向上に向けた成長エンジンであるため、今後も温めつつ、誰かのためになるような機会を取り入れ、成長した実感を得られる学習活動を推進していく。

２年生は、成果に関して、自身の考えやアイデアを構造的に１枚で表現し、その内容を他者に効果的に伝えることができるようになったことがあげられる。アンケート項目の「自分の考えを文章や図表にまとめる」においては、９割以上の生徒が肯定的な回答であり、アイデアスケッチやエレベーターピッチを活用したアイデアの構造的表現技法の獲得やアイデアソンなどでの提案内容を模造紙やスライドでアウトプットする機会を多く設けたことが要因として考えられる。また、「地域の課題の解決方法について考える」においては、88%の生徒が肯定的な回答であり、砂浜美術館や黒潮町全体といった地域教材を、年間を通して活用し、目指す生徒像や身に付けさせたい力を明確化し、指導できたため、地域をよりよくしていく未来志向の課題解決アプローチをできるようになったと思われる。

課題としては、探究性に関わる学習活動に関しては、力が付いたと認識しているが、求められる力までは到達していないという結果が得られた。数値を見ると、ポイントは大きく下がっているが、逆の見方をするとメタ認知できるようになったと考えることもできる。また、ルーブリック評価において、社会で求められているレベルを最高評価に位置付けたことで、自身の現状と理想の Gap が可視化できてきたともとらえることができる。

３年生では、協働性に関わる行動の項目が向上している。これは、生徒が考えたアイデアを生徒間だけでなく、ワールドカフェの実施により、社会人の方々からのアドバイスや助言をもらう活動を行ったことが要因として考えられる。一方で、主体性の向上を図ったが、生徒の自己認識では粘り強さの項目で前年度と比べ肯定的回答が減少した。失敗してもよいという雰囲気づくりができていなかったことが原因と考えられる。また、探究に関わる行動の項目の授業で「なぜそうなるのか」と疑問をもって、考えたり調べたりしたという質問に対しても前年度と比べ肯定的回答が大幅に減少した。このことからも主体性をもたせることが不十分なため意欲的に探究させることができなかったと思われる。アンケート結果では、指導者の認識と生徒の認識にずれがある項目も多く見られる。そのため、フィードバックを丁寧に行える時間を設ける必要があり、指導者の評価と指導の一体化を着実に実践し、生徒の成長・変容を捉え、適切にコーチングする力を養う必要を感じる。次年度のカリキュラム作成にあたって、分析結果を教員間で共有し、効果的なカリキュラム設計を図っていきたい。

実施したアンケートは以下のようになっている。

	項　目 アンケート	実施主体	対象	実施時期	実施形態
1	高校魅力化評価システム	三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング	生徒・地域住民等	令和４年８月	選択
2	防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート	大方高校	生徒	令和４年９月、令和５年１月	選択・記述
3	高知県オリジナルアンケート	高知県教育委員会事務局　高等学校課	県立高等学校の生徒	令和４年４月・11 月、令和５年２月	選択

＜添付資料＞目標設定シート、高校魅力化評価システム・防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート（生徒対象）・高知県オリジナルアンケート（生徒対象）

（２）発表会や各種会議の開催・参加

地域学においては出前授業を行うとともに、ふるさとキャリア教育における発表も地元ケーブルテレビで配信をした。また、総合的な探究の時間では、様々な活動を運営指導委員会、コンソーシアム委員、カリキュラム開発等専門家、外部の方に参加いただき、助言等をしてもらった。

教職員が参加した会議等には以下のものがある。

時期	テーマ他	参加者数	実施主体

４月	校内研修会 ・テーマ「これからの総合的な探究の時間の考え方」 高知大学次世代地域創造センター川村晶子准教授	20 名	大方高校
６月	名古屋商科大学でのケースメソッド教授法研修	３名	名古屋商科大学
６月	高知市でのケースメソッド教授法研修	４名	名古屋商科大学
１月	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業全国サミット」	７名	文部科学省
１月	令和４年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」成果検証報告会	３名	文部科学省

（３）地域でのフィールドワーク等や連携した活動の実施

コロナ禍によりフィールドワークやインタビューを実施するのが難しい時期もあったが、少人数対応やオンライン会議システムの活用などで対応しながら以下のことを実施した。

時期	テーマ	内容
５月	砂浜美術館訪問	「美術館とは何か」を考えるにあたり、新たな価値を見出した砂浜美術館を五感で感じ活動を行った。
５月	インタビューの仕方	杉山氏から「未来のメモワール」のインタビューの仕方についてレクチャーをいただいた。
５月	臨時情報	杉山氏から「臨時情報」についてレクチャーをいただいた。臨時情報が発表された際、それぞれがどう行動するか考え、マイストーリーを作成
５月	高知県立美術館奥野様インプット	「美術館とは何か？」をテーマに、世界の美術館や、作品の概念等をインプットしていただいた。
６月	高知県立美術館訪問	砂浜美術館を見たのちに、一般的な美術館を体験し、モノの見方考え方の要素の入った作品展「奇界」を鑑賞した。
８月	オリジナル HUG	地域の方々と一緒にオリジナル HUG（避難所運営ゲーム）実施
９月	高知新聞社鍋島様 フィードバック	「私が考える砂浜美術館とは？」をテーマに各生徒が書いたレポート課題についてケースライターや文章作成の専門家という視点から、講評していただいた。
９月	土佐佐賀産直出荷組合㈱ 浜町様へインタビュー	ケーススタディを実施。ケースを読み込み、疑問に感じたことや物事の考え方について、登場人材にインタビューをした。
９月	JICA 四国との交流	JICA 四国の研修生の方々とオリジナル HUG（避難所運営ゲーム）の実施
10 月	アイデアソン	テーマ「私たちのまちを守るアプリを企画せよ」をテーマに、コンソーシアム委員を含め、外部の方を 50 名、高知商業高校の生徒 15 名をお招きし、アイデアソンを実施した。
10 月	三角地カンガエル WS プロジェクト	株式会社わらびの畠中氏にファシリテーションしてもらい、ゾーニング（空間のイメージ）について思考
11 月	防災デー	東日本大震災を経験した紺野氏による当時の避難方法、生活の現実などの講演、各班に設定された避難場所から避難訓練、各班でのミッションや炊き出し、避難所運営訓練の実施
12 月	ワールドカフェ	「未来の黒潮町について考える」をテーマに自身で考えた 2050 年の黒潮町のアイデアスケッチを用いて発表し、外部の方 12 名より助言をいただいた。
１月	株式会社サニーフーヅ出水様へインタビュー	ケーススタディを実施。ケースを読み込み、疑問に感じたことや物事の考え方について、登場人材にインタビューをした。
１月	アイデアブラッシュアップ	「自分と社会を幸せにする」アイデアを外部の方に発表と幸せについてのディスカッションを実施
１月	高知大学森先生インプット	2 年生の町長提案にあたり「提案をする」とはどういうことかについてインプットしていただいた。
１月	出前授業	入野小学校５年生との交流授業。災害発生時における避難についての課題を中心とした授業を実施
２月	砂浜美術館 山本様へインタビュー	ケーススタディを実施。ケースを読み込み、疑問に感じたことや物事の考え方について、登場人材にインタビューをした。

２月	ボランティアフェスティバル	防災デーや防災植物など地域学の活動を中心とした本校防災活動発表
２月	逃げトレ	巨大地震発生の想定のもと、杉山氏と一緒に土佐入野駅から学校まで逃げトレアプリを活用して経路確認と安全確認の訓練の実施
２月	臨時情報	杉山氏、矢守氏から臨時情報について学習した

１２　次年度以降の課題及び改善点

本事業は終了するが、次年度からがまさにスタートであると感じている。この３年間で得た「総合的な探究の時間」におけるカリキュラム設計の手法や「地域学」における地域との連携したカリキュラムの確立など、その成果は大きい。しかしながら、３年間で解決しなかった課題もまた多い。

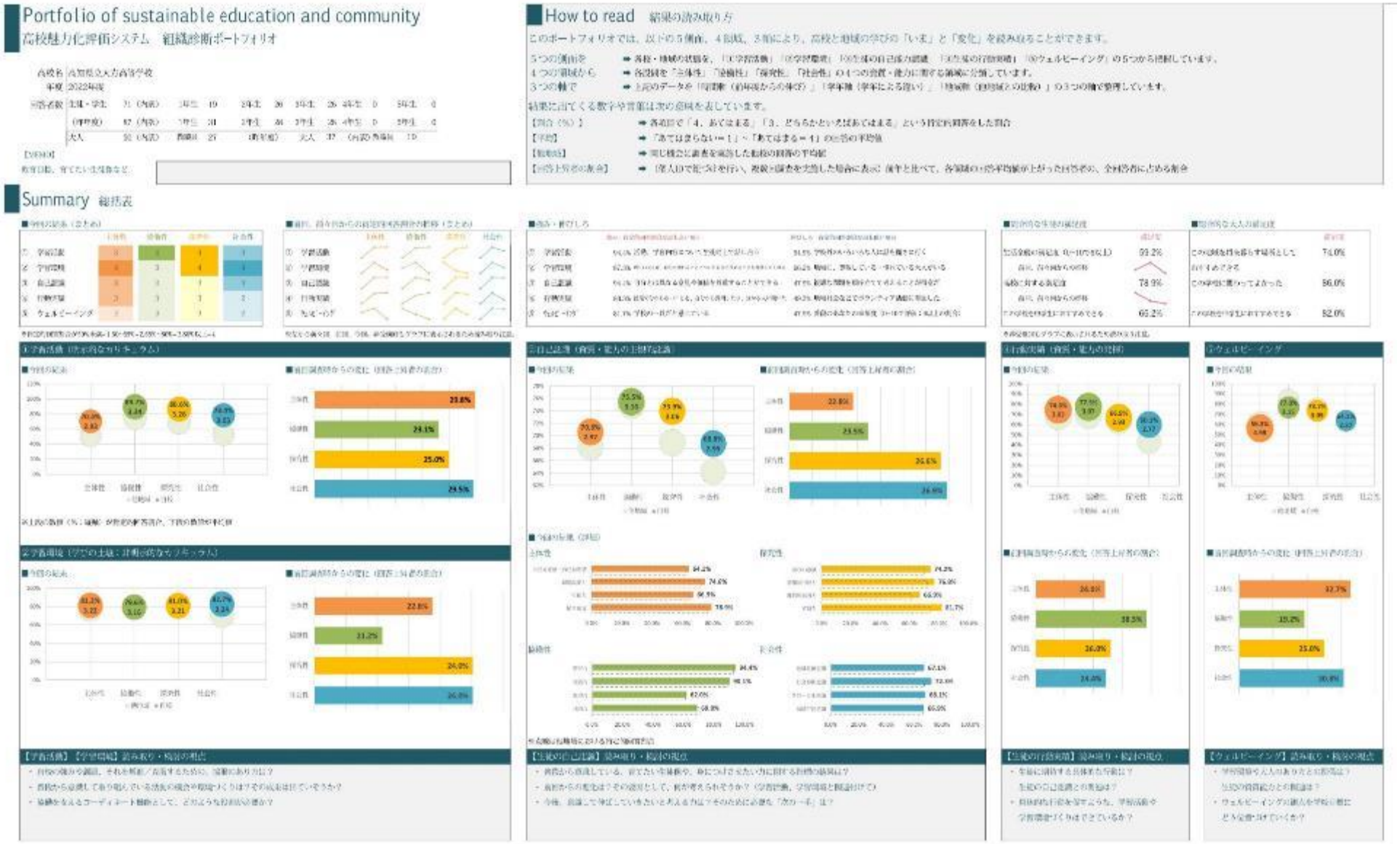
「総合的な探究の時間」をはじめとする探究的な学習、地域と連携した学習の推進を分掌業務以外で担ってきたが、一部の教員への負担が増大したため、次年度からは分掌業務として位置付ける予定である。また、「総合的な探究の時間」については学年団による授業実践の形態をとっていることから、学年団での情報共有や指導に対する協議を密に行う必要がある。現在のところ組織的な動きの弱さから、担当教員による指導の格差が生まれ、生徒の成長に影響を及ぼしている。対策として“新たな会”を創出するだけがすべてではなく、今あるものの活用や効率化による改善策を見出していく必要があると考えている。この課題の解決は教員の新しい学習指導要領の正しい理解と変革を受け入れる柔軟さ、しなやかさが基本にあればそう難しいものではないと考えている。

【担当者】

担当課	高等学校振興課	ＴＥＬ	088-821-4542
氏　名	仁木 大輔	ＦＡＸ	088-821-4547
職　名	指導主事	e-mail	daisuke_niki@ken3.pref.kochi.lg.jp

補　足　資　料

資料１　高校魅力化評価システム



Details 詳細結果

① 学習活動（明示的なカリキュラム）

● 10pt以上の増加 ● 0~10ptの増加 ● 減少

	全校			1年生（2022入学生）			2年生（2021入学生）			3年生（2020入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	割合(%)	割合（%）	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	割合(%)	割合(%)
主体性に関わる学習活動	70.4%	0.31	19.42	63.2%	-15.87	18.52	78.8%	-0.19	38.5%	67.3%	1.24	22.66	-	-	-	-
5 自主的に調べものや取材を行う	85.9%	13.50	19.07	89.5%	2.38	43.05	84.6%	-2.48	38.5%	84.6%	20.33	38.19	-	-	-	-
6 学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	54.9%	-12.89	19.77	36.8%	-34.13	-6.02	73.1%	2.11	38.5%	50.0%	-17.86	7.14	-	-	-	-
協働性に関わる学習活動	89.7%	0.78	14.49	93.0%	-0.57	17.98	87.2%	-6.37	25.6%	89.7%	8.79	14.74	-	-	-	-
7 グループで協力しながら学習や調べものを行う	90.1%	-2.96	5.95	94.7%	-2.04	5.45	88.5%	-8.31	19.2%	88.5%	2.75	-0.82	-	-	-	-
8 活動、学習内容について生徒同士で話し合う	94.4%	2.41	5.94	100.0%	3.23	21.43	88.5%	-8.31	23.1%	96.2%	6.87	17.58	-	-	-	-
9 活動、学習内容について大人（教員や地域の大人）と話し合う	84.5%	2.90	31.56	84.2%	-2.89	27.07	84.6%	-2.48	34.6%	84.6%	16.76	27.47	-	-	-	-
探究性に関わる学習活動	86.6%	2.14	17.96	93.4%	5.52	21.10	90.4%	2.48	33.7%	77.9%	-6.94	5.56	-	-	-	-
10 自分の考えを文章や図表にまとめる	83.1%	2.64	19.78	84.2%	-2.89	12.78	92.3%	5.21	30.8%	73.1%	-5.49	1.65	-	-	-	-
11 話し合った内容をまとめる	88.7%	0.23	11.11	100.0%	6.45	25.00	92.3%	-1.24	26.9%	76.9%	-12.36	1.92	-	-	-	-
12 活動、学習のまとめを発表する	87.3%	1.12	22.40	94.7%	10.87	26.88	88.5%	4.59	38.5%	80.8%	-4.95	12.91	-	-	-	-
13 生徒同士で活動、学習の振り返りを行う	87.3%	4.57	18.55	94.7%	7.64	19.74	88.5%	1.36	38.5%	80.8%	-4.95	5.77	-	-	-	-
社会性に関わる学習活動	78.4%	-6.65	25.54	66.7%	-13.98	4.76	87.2%	6.53	38.5%	78.2%	-6.32	16.30	-	-	-	-
14 地域の魅力や資源について考える	83.1%	-4.26	28.86	78.9%	1.53	11.09	92.3%	14.89	38.5%	76.9%	-15.93	9.07	-	-	-	-
15 地域の課題の解決方法について考える	85.9%	-4.89	29.91	73.7%	-16.64	-1.32	88.5%	-1.86	34.6%	92.3%	3.02	17.31	-	-	-	-
16 日本や世界の課題の解決方法について考える	66.2%	-10.81	17.84	47.4%	-26.83	4.51	80.8%	6.58	42.3%	65.4%	-6.04	22.53	-	-	-	-

※3年生、4年生の「回答上昇者率」は「上昇率」シートで確認いただけます

② 学習環境（学びの土壌：非明示的なカリキュラム）

● 10pt以上の増加 ● 0~10ptの増加 ● 減少

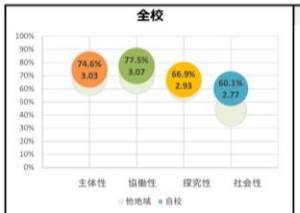
	生徒の認識（A）								大人の認識（大人全体の評価）（B）				生徒と大人の認識の差（A-B）		
	全体	昨年度との差	他地域との差	全体	学年別				全体	昨年度との差	うち教職員	昨年度との差	生徒と大人（全体）	生徒と教職員	
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	回答上昇者	1年生	2年生	3年生	4年生	割合(%)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	差(pt)	大人質問項目
主体性に関わる学習環境	81.3%	-3.05	3.67	22.8%	82.2%	86.1%	76.0%	-	80.3%	2.04	85.2%	5.19	1.0pt	-3.8pt	
20 失敗してもよいという安全・安心な雰囲気がある	83.1%	-1.96	3.97	13.5%	89.5%	92.3%	69.2%	-	76.0%	5.73	88.9%	15.20	7.1pt	-5.8pt	5 失敗を恐れずに挑戦することができている
21 挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある	85.9%	-6.04	-5.19	17.3%	94.7%	84.6%	80.8%	-	90.0%	-1.89	92.6%	-2.14	-4.1pt	-6.7pt	13 挑戦する人に対して、応援することができている
33 目標や当事者意識を持って挑戦している人がいる	85.9%	-3.74	4.57	21.2%	73.7%	88.5%	92.3%	-	86.0%	21.14	92.6%	29.43	-0.1pt	-6.7pt	6 目標や当事者意識を持って挑戦することができている
34 地域に、尊敬している・憧れている大人がいる	66.2%	0.68	9.15	36.5%	63.2%	73.1%	61.5%	-	-	-	-	-	-	-	
30 人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある	76.1%	-3.25	12.10	25.0%	68.4%	92.3%	65.4%	-	52.0%	-12.86	59.3%	-14.42	24.1pt	16.8pt	7 自身の挑戦に、周囲を巻き込もうとしている
26 自分が何かに挑戦しようと思ったとき、周りは手を差し伸べてくれる	84.5%	-4.00	-5.04	23.1%	84.2%	88.5%	80.8%	-	90.0%	-1.89	92.6%	-2.14	-5.5pt	-8.1pt	14 誰かが何かに挑戦しようと思ったとき、手を差し伸べている
35 周りの大人は、自分に関わることについて自分で決めることを尊重してくれる	87.3%	-	0.93	-	89.5%	84.6%	88.5%	-	88.0%	-	85.2%	-	-0.7pt	2.1pt	22 子どもの自己決定を尊重できている
36 生徒の意見が学校での意思決定に反映される雰囲気がある	81.7%	-	8.83	-	94.7%	84.6%	69.2%	-	-	-	-	-	-	-	
協働性に関わる学習環境	79.6%	-6.34	0.54	21.2%	88.2%	80.8%	72.1%	-	85.0%	4.59	85.2%	4.92	-5.4pt	-5.6pt	
22 人と違うことが尊重される雰囲気がある	71.8%	-16.67	-8.01	15.4%	84.2%	73.1%	61.5%	-	86.0%	-0.49	81.5%	-7.99	-14.2pt	-9.7pt	8 人と違うこと、異なった意見を尊重している
23 ありのままの自分が尊重される雰囲気がある	80.3%	-1.33	-1.72	19.2%	94.7%	76.9%	73.1%	-	90.0%	6.22	88.9%	15.20	-9.7pt	-8.6pt	9 ありのままの個人を尊重している
27 自分と異なる立場や役割を持つ人との関わりがある	84.5%	-1.70	1.85	26.9%	89.5%	88.5%	76.9%	-	80.0%	-3.78	85.2%	-4.29	4.5pt	-0.7pt	15 自分と異なる立場や役割を持つ人と交流している
28 立場や役割を超えて協働する機会がある	81.7%	-5.67	10.03	23.1%	84.2%	84.6%	76.9%	-	84.0%	16.43	85.2%	16.76	-2.3pt	-3.5pt	16 立場や役割を超えて協働している
探究性に関わる学習環境	81.0%	-1.77	0.46	24.0%	86.8%	78.8%	78.8%	-	71.0%	4.78	75.0%	7.89	10.0pt	6.0pt	
17 本音を気兼ねなく発言できる雰囲気がある	70.4%	-3.14	-11.64	21.2%	84.2%	69.2%	61.5%	-	64.0%	4.54	59.3%	-3.90	6.4pt	11.2pt	10 本音を気兼ねなく発言できる
18 将来のことや実現したいことを話し合える大人がいる	83.1%	-4.26	5.10	30.8%	84.2%	80.8%	84.6%	-	72.0%	-0.97	74.1%	5.65	11.1pt	9.0pt	11 地域に、将来のことや実現したいことを話し合える人がいる
24 周りの大人は、じっくりと話を聞き、考える手助けをしてくれる	87.3%	1.12	0.67	21.2%	100.0%	80.8%	84.6%	-	76.0%	8.43	85.2%	16.76	11.3pt	2.1pt	17 生徒に対してじっくりと話を聞き、考える手助けができている
31 お互いに問いかけあう機会がある	83.1%	-0.81	7.72	23.1%	78.9%	84.6%	84.6%	-	72.0%	7.14	81.5%	13.06	11.1pt	1.6pt	18 お互いに問いかけあう機会がある
社会性に関わる学習環境	82.7%	-0.30	12.14	24.0%	81.6%	86.5%	79.8%	-	75.5%	-1.53	88.0%	9.02	7.2pt	-5.2pt	
19 地域から大切にされている雰囲気を感じる	84.5%	2.90	1.86	23.1%	89.5%	84.6%	80.8%	-	88.0%	4.22	92.6%	8.38	-3.5pt	-8.1pt	21 地域で生徒を育てるという意識を持っている
25 興味を持ったことに対してすぐに橋渡しをしてくれる大人がいる	83.1%	-4.26	6.09	19.2%	78.9%	92.3%	76.9%	-	64.0%	-8.97	88.9%	9.94	19.1pt	-5.8pt	19 生徒の関心に合わせて、機会を提供できている
29 地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	81.7%	-5.67	17.08	21.2%	78.9%	88.5%	76.9%	-	74.0%	-7.08	85.2%	0.97	7.7pt	-3.5pt	20 地域の人や課題などにじかに触れる機会を持っている
32 自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある	81.7%	5.83	23.52	32.7%	78.9%	80.8%	84.6%	-	76.0%	5.73	85.2%	16.76	5.7pt	-3.5pt	12 自分の暮らす地域を外からの視点で考える機会を持っている

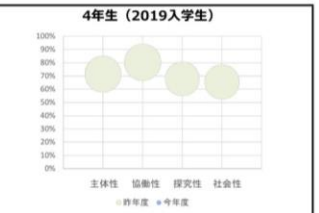
③ 生徒の自己認識（資質・能力の主観的認識）

● 10pt以上の増加 ● 0~10ptの増加 ● 減少

	全校			1年生（2022入学生）			2年生（2021入学生）			3年生（2020入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	差(pt)
主体性に関わる自己認識	70.6%	0.02	2.37	65.4%	-10.62	8.27	80.8%	4.73	26.4%	64.3%	1.02	7.14	-	-	-	-
【自己肯定感・自己有用感】	64.1%	3.74	1.89	52.6%	-13.50	-8.08	78.8%	12.72	36.5%	57.7%	9.48	-3.02	-	-	-	-
51 自分にはよいところがあると思う	70.4%	4.91	-2.37	63.2%	-4.58	-8.27	80.8%	13.03	34.6%	65.4%	11.81	-6.04	-	-	-	-
52 私は、自分自身に満足している	57.7%	2.57	6.15	42.1%	-22.41	-7.89	76.9%	12.41	38.5%	50.0%	7.14	0.00	-	-	-	-
【課題設定力】	74.6%	3.38	2.75	84.2%	3.57	23.50	80.8%	0.12	23.1%	61.5%	-6.32	0.82	-	-	-	-
39 現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	74.6%	3.38	2.75	84.2%	3.57	23.50	80.8%	0.12	23.1%	61.5%	-6.32	0.82	-	-	-	-
【行動力】	66.9%	-2.64	2.63	57.9%	-21.14	7.89	75.0%	-4.03	19.2%	65.4%	1.10	15.38	-	-	-	-
40 目標を設定し、確実に行動することができる	67.6%	-0.21	4.16	63.2%	-14.26	20.30	76.9%	-0.50	19.2%	61.5%	-2.75	18.68	-	-	-	-
53 自分で計画を立てて活動することができる	66.2%	-5.07	1.11	52.6%	-28.01	-4.51	73.1%	-7.57	19.2%	69.2%	4.95	12.09	-	-	-	-
【粘り強さ】	78.9%	-2.74	2.39	76.3%	-4.33	17.39	88.5%	7.82	25.0%	71.2%	-3.85	12.23	-	-	-	-
37 うまくいかない分からないことにも意欲的に取り組む	83.1%	-0.81	2.51	89.5%	5.60	25.19	88.5%	4.59	19.2%	73.1%	-5.49	8.79	-	-	-	-
47 忍耐強く物事に取り組むことができる	74.6%	-4.66	2.28	63.2%	-14.26	9.59	88.5%	11.04	30.8%	69.2%	-2.20	15.66	-	-	-	-
協働性に関わる自己認識	75.5%	-2.67	0.53	75.8%	-4.21	7.93	80.0%	0.00	23.8%	70.8%	-1.37	2.91	-	-	-	-
【受容力】	94.4%	-1.04	1.59	94.7%	-2.04	5.45	96.2%	-0.62	23.1%	92.3%	3.02	3.02	-	-	-	-
43 自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	94.4%	-1.04	1.59	94.7%	-2.04	5.45	96.2%	-0.62	23.1%	92.3%	3.02	3.02	-	-	-	-
【対話力】	90.1%	0.49	0.70	100.0%	16.13	3.57	84.6%	0.74	11.5%	88.5%	-0.82	-7.97	-	-	-	-
42 相手の意見を丁寧に聞くことができる	90.1%	0.49	0.70	100.0%	16.13	3.57	84.6%	0.74	11.5%	88.5%	-0.82	-7.97	-	-	-	-
【表現力】	62.0%	-2.97	0.92	55.3%	-17.32	1.69	75.0%	2.42	28.8%	53.8%	-1.51	0.27	-	-	-	-
49 自分の考えをはっきり相手に伝えることができる	67.6%	-7.11	0.58	63.2%	-20.71	6.02	76.9%	-6.95	23.1%	61.5%	-2.75	4.40	-	-	-	-
50 友達の前で自分の意見を発表することは得意だ	56.3%	1.17	1.25	47.4%	-13.92	-2.63	73.1%	11.79	34.6%	46.2%	-0.27	-3.85	-	-	-	-
【共創力】	69.0%	-6.85	-1.48	73.7%	-0.51	27.26	69.2%	-4.96	26.9%	65.4%	-6.04	18.96	-	-	-	-
44 共同作業だと、自分の力が発揮できる	69.0%	-6.85	-1.48	73.7%	-0.51	27.26	69.2%	-4.96	26.9%	65.4%	-6.04	18.96	-	-	-	-
探究性に関わる自己認識	73.9%	-1.66	5.05	76.3%	-3.61	14.47	76.9%	-3.53	25.3%	69.2%	2.24	6.32	-	-	-	-
【学びの意欲】	74.2%	0.23	3.94	84.2%	6.79	15.16	70.5%	-6.91	24.4%	70.5%	7.42	1.47	-	-	-	-
38 家や寮で、誰かに言われなくても自分から勉強する	77.5%	7.35	5.75	100.0%	22.58	32.14	73.1%	-4.34	23.1%	65.4%	1.10	-2.47	-	-	-	-
61 地域を対象とした課題探究学習に熱心に取り組んでいる	67.6%	-3.66	8.61	68.4%	-5.77	11.28	69.2%	-4.96	30.8%	65.4%	8.24	8.24	-	-	-	-
67 学習を通じて、自分がしたいことが増えている	77.5%	-2.99	-2.52	84.2%	3.57	2.07	69.2%	-11.41	19.2%	80.8%	12.91	-1.37	-	-	-	-
【情報活用能力】	76.8%	-1.98	4.81	76.3%	-4.33	12.03	84.6%	3.97	28.8%	69.2%	-3.98	4.95	-	-	-	-
45 情報を、勉強したことと関連づけて理解できる	80.3%	-2.48	1.99	78.9%	-4.92	14.66	88.5%	4.59	30.8%	73.1%	-1.92	8.79	-	-	-	-
46 勉強したものを実際に応用してみる	73.2%	-1.47	7.62	73.7%	-3.74	9.40	80.8%	3.35	26.9%	65.4%	-6.04	1.10	-	-	-	-
【批判的思考力】	66.9%	-9.58	5.46	65.8%	-26.83	22.37	73.1%	-16.50	26.9%	61.5%	-7.97	13.46	-	-	-	-
41 複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ	47.9%	-9.58	1.97	47.4%	-26.83	22.37	57.7%	-16.50	26.9%	38.5%	-7.97	13.46	-	-	-	-
54 一つ二つの立場だけでなく、できるだけ多くの立場から考えようとする	85.9%	-	8.95	84.2%	-	-	88.5%	-	-	84.6%	-	-	-	-	-	-
【省察力】	81.7%	1.23	8.07	73.7%	-10.19	9.40	88.5%	4.59	19.2%	80.8%	9.34	16.48	-	-	-	-
48 自分を客観的に理解することができる	81.7%	1.23	8.07	73.7%	-10.19	9.40	88.5%	4.59	19.2%	80.8%	9.34	16.48	-	-	-	-
社会性に関わる自己認識	68.8%	-0.42	4.44	75.1%	2.69	7.91	71.0%	-1.45	24.8%	61.9%	1.82	-5.32	-	-	-	-
【地域貢献意識】	67.1%	1.24	6.46	78.9%	7.98	11.09	69.2%	-1.74	23.1%	56.4%	-0.73	-11.45	-	-	-	-
65 将来の国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい	53.5%	-1.65	8.50	52.6%	-8.66	9.77	61.5%	0.25	23.1%	46.2%	-3.85	3.30	-	-	-	-
56 地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい	71.8%	-0.58	6.85	84.2%	6.79	5.64	69.2%	-8.19	23.1%	65.4%	8.24	-13.19	-	-	-	-
58 将来、自分の住んでいる地域に役に立ちたい	76.1%	5.94	4.04	100.0%	25.81	17.86	76.9%	2.73	23.1%	57.7%	-6.59	-24.45	-	-	-	-
【社会参画意識】	72.3%	-0.11	5.07	78.9%	5.83	8.71	71.8%	-1.32	26.9%	67.9%	2.47	-2.29	-	-	-	-
57 私が関わることで、社会状況が変えられるかもしれない	56.3%	0.02	7.50	63.2%	5.09	27.44	61.5%	3.47	34.6%	46.2%	-3.85	10.44	-	-	-	-
62 地域や社会での問題やできごとに関心がある	81.7%	5.83	10.02	89.5%	12.05	7.33	80.8%	3.35	26.9%	76.9%	5.49	-5.22	-	-	-	-
55 18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う	78.9%	-6.18	-2.30	84.2%	0.34	-8.65	73.1%	-10.79	19.2%	80.8%	5.77	-12.09	-	-	-	-
【グローカル意識】	68.1%	-2.04	4.23	68.4%	-3.62	6.52	73.1%	1.03	25.6%	62.8%	-0.27	0.92	-	-	-	-
59 地域の課題と世界での課題は関連していると思う	76.1%	-5.55	6.34	78.9%	-8.15	7.52	84.6%	-2.48	23.1%	65.4%	-6.04	-6.04	-	-	-	-
64 将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	74.6%	-0.06	4.55	68.4%	-5.77	-3.01	76.9%	2.73	23.1%	76.9%	1.92	5.49	-	-	-	-
63 将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う	53.5%	-0.50	1.80	57.9%	3.06	15.04	57.7%	2.85	30.8%	46.2%	3.30	3.30	-	-	-	-
【持続可能意識】	66.9%	-0.91	0.79	73.7%	-0.51	4.04	69.2%	-4.96	23.1%	59.6%	7.83	-10.03	-	-	-	-
60 地域文化や暮らしを、自らの手で未来に伝えたい	59.2%	0.53	0.50	68.4%	7.13	4.14	61.5%	0.25	26.9%	50.0%	0.00	-14.29	-	-	-	-
68 自分の将来について明るい希望を持っている	74.6%	-2.36	1.08	78.9%	-8.15	3.95	76.9%	-10.17	19.2%	69.2%	15.66	-5.77	-	-	-	-

④ 生徒の行動実績（資質・能力の発揮）





● 10pt以上の増加 ● 0～10ptの増加 ● 減少

	全校			1年生（2022入学生）			2年生（2021入学生）			3年生（2020入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	割合(%)	割合（%）	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	差(pt)	差(pt)
主体性に関わる行動	**74.6%**	1.08	6.39	**81.6%**	0.93	17.29	**71.2%**	-9.49	21.2%	**73.1%**	5.22	8.79	-	-	-	-
71 授業で分からないことを、自分から質問したり、分かる人に聞いた	80.3%	-2.48	1.91	84.2%	-2.89	-1.50	76.9%	-10.17	19.2%	80.8%	-1.37	-4.95	-	-	-	-
74 授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った	69.0%	4.65	10.88	78.9%	4.75	36.09	65.4%	-8.81	23.1%	65.4%	11.81	22.53	-	-	-	-
協働性に関わる行動	**77.5%**	3.33	7.86	**63.2%**	-17.49	-6.48	**82.7%**	2.05	28.8%	**82.7%**	21.98	13.05	-	-	-	-
72 自分の考えについて、様々な人に意見やアドバイスを求めた	78.9%	1.86	9.92	63.2%	-23.94	-4.70	84.6%	-2.48	26.9%	84.6%	23.90	16.76	-	-	-	-
73 友人などから、意見やアドバイスを求められた	76.1%	4.79	5.80	63.2%	-11.04	-8.27	80.8%	6.58	30.8%	80.8%	20.05	9.34	-	-	-	-
探究性に関わる行動	**66.9%**	-3.21	2.80	**60.5%**	-18.51	5.17	**75.0%**	-4.03	17.3%	**63.5%**	0.96	8.10	-	-	-	-
75 授業で「なぜそうなるのか」と疑問を持って、考えたり調べたりした	64.8%	-6.48	-0.95	68.4%	-12.22	7.71	76.9%	-3.72	19.2%	50.0%	-14.29	-10.71	-	-	-	-
76 公式やきまりを習う時、その根拠を自分で考えたり調べたりした	69.0%	0.05	6.55	52.6%	-24.79	2.63	73.1%	-4.34	15.4%	76.9%	16.21	26.92	-	-	-	-
社会性に関わる行動	**60.1%**	-5.81	16.71	**50.9%**	-22.24	-8.65	**67.9%**	-5.17	24.4%	**59.0%**	0.64	-0.55	-	-	-	-
69 いま住んでいる地域の行事に参加した	54.9%	-4.84	19.79	36.8%	-27.67	-13.16	69.2%	4.71	23.1%	53.8%	-3.30	3.85	-	-	-	-
70 地域社会などでボランティア活動に参加した	49.3%	-10.47	17.36	47.4%	-23.60	-2.63	53.8%	-17.12	19.2%	46.2%	-3.85	-3.85	-	-	-	-
77 先生、保護者以外の地域の大人と、なにげない会話を交わした	76.1%	-2.10	12.98	68.4%	-15.45	-10.15	80.8%	-3.10	30.8%	76.9%	9.07	-1.65	-	-	-	-

⑤ 学習・その他

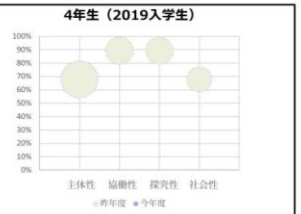
	全校			1年生（2022入学生）			2年生（2021入学生）			3年生（2020入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	時間(分)	差(分)	差(分)	時間(分)	差(分)	差(分)	時間(分)	差(分)	割合(%)	時間(分)	差(分)	差(分)	時間(分)	差(分)	差(分)	差(分)
91 平均的な学習時間【平日】	56.57	-	-27.78	76.32	-	-	57.20	-	-	41.54	-	-	-	-	-	-
92 平均的な学習時間【休日】	72.71	-	-71.49	103.16	-	-	73.60	-	-	49.62	-	-	-	-	-	-

	全校			1年生（2022入学生）			2年生（2021入学生）			3年生（2020入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	割合(%)	割合（%）	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	差(pt)	差(pt)
90 この学校を中学生におすすめできる	66.2%	-	-13.95	73.7%	-	-	61.5%	-	-	65.4%	-	-	-	-	-	-
78 国際社会の課題解決に貢献したい	53.5%	-2.80	-2.58	47.4%	-23.60	0.94	61.5%	-9.43	38.5%	50.0%	7.14	-	-	-	-	-
79 まだ世の中にない新しい技術やサービスを生み出してみたい	52.1%	-0.76	0.01	42.1%	-25.64	-0.75	61.5%	-6.20	34.6%	50.0%	10.71	-	-	-	-	-
80 客観的な証拠に基づき考え、判断する科学的視点から課題解決にあたることができる	50.7%	-4.47	5.64	36.8%	-30.90	1.13	61.5%	-6.20	30.8%	50.0%	3.57	-	-	-	-	-

⑥ 大人向け調査

	大人向け調査（全回答平均）			大人向け調査(教職員のみ)		
	全体	昨年度との差	他地域との差	全体	昨年度との差	他地域との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)
25 この学校を中学生におすすめできる	82.0%	-	-4.41	85.2%	-	0.47
26 この学校に関わってよかったと思う	86.0%	-	-4.45	88.9%	-	-0.42
27 この地域を、将来暮らす場所としておすすめできる	74.0%	-	-3.09	70.4%	-	-3.65
28 【教職員のみ】地域・社会との協働を通して、授業の質の向上につながっている	85.2%	-	21.85	85.2%	-	21.85
29 【教職員のみ】地域・社会との協働を通して、自身の資質・能力の向上につながっている	85.2%	-	13.93	85.2%	-	13.93
30 【教職員のみ】地域・社会との協働を通して、学習意欲が高まった生徒がいる	81.5%	-	12.24	81.5%	-	12.24
31 【教職員のみ】地域・社会との協働を通して、業務負担感の軽減につながっている	14.8%	-	-3.24	14.8%	-	-3.24

⑦ 生徒のウェルビーイング



● 10pt以上の増加 ● 0~10ptの増加 ● 減少

	全校				1年生（2021入学生）			2年生（2020入学生）			3年生（2019入学生）			4年生（2019入学生）			
	全体		昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年次との差	学年	3年次との差	2年次との差	1年次との差
	割合(%)		差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	差(pt)
主体性に関わるウェルビーイング	56.3%		-4.06	-2.64	52.6%	-16.30	-6.39	65.4%	-1.12	34.6%	50.0%	-0.27	-18.13	-	-	-	-
81 今の生活全般に対する満足度（0~10で評価：6以上の割合）	59.2%		-4.06	-2.36	57.9%	-16.30	-6.39	73.1%	-1.12	34.6%	46.2%	-0.27	-18.13	-	-	-	-
82 普段のあなたの幸福度（0~10で評価：6以上の割合）	47.9%		-	-14.42	47.4%	-	-	53.8%	-	-	42.3%	-	-	-	-	-	-
83 現在の日常生活に不安や心配事がない	62.0%		-	8.85	52.6%	-	-	69.2%	-	-	61.5%	-	-	-	-	-	-
協働性に関わるウェルビーイング	77.0%		-1.59	-6.93	89.5%	10.87	1.88	71.8%	-6.95	15.4%	73.1%	1.37	-23.63	-	-	-	-
66 この学校に入ってよかったと思う	78.9%		-1.59	-6.89	94.7%	10.87	1.88	76.9%	-6.95	15.4%	69.2%	1.37	-23.63	-	-	-	-
84 学校の一員だと感じている	81.7%		-	-4.85	100.0%	-	-	69.2%	-	-	80.8%	-	-	-	-	-	-
85 大切な人を幸せにしたり、楽しませたりしていると思う	70.4%		-	-9.04	73.7%	-	-	69.2%	-	-	69.2%	-	-	-	-	-	-
探究性に関わるウェルビーイング	73.7%		-2.36	-2.02	75.4%	-8.15	3.95	71.8%	-10.17	19.2%	74.4%	15.66	-5.77	-	-	-	-
68 【再掲】自分の将来について明るい希望を持っている	74.6%		-2.36	1.08	78.9%	-8.15	3.95	76.9%	-10.17	19.2%	69.2%	15.66	-5.77	-	-	-	-
86 自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたい）を持っている	71.8%		-	-6.13	73.7%	-	-	69.2%	-	-	73.1%	-	-	-	-	-	-
87 自分の将来に向けて大切だと思うことを実行している	74.6%		-	-1.00	73.7%	-	-	69.2%	-	-	80.8%	-	-	-	-	-	-
社会性に関わるウェルビーイング	64.1%		3.24	1.08	73.7%	16.47	11.00	66.3%	1.49	25.0%	54.8%	-3.30	-19.37	-	-	-	-
58 【再掲】将来、自分の住んでいる地域に役に立ちたい	76.1%		5.94	4.04	100.0%	25.81	17.86	76.9%	2.73	23.1%	57.7%	-6.59	-24.45	-	-	-	-
60 【再掲】地域文化や暮らしを、自らの手で未来に伝えたい	59.2%		0.53	0.50	68.4%	7.13	4.14	61.5%	0.25	26.9%	50.0%	0.00	-14.29	-	-	-	-
88 この地域を、将来暮らす場所としておすすめできる	63.4%		-	-5.61	73.7%	-	-	57.7%	-	-	61.5%	-	-	-	-	-	-
89 日本の将来は明るいと思う	57.7%		-	5.40	52.6%	-	-	69.2%	-	-	50.0%	-	-	-	-	-	-

資料２　防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート

このアンケートは、皆さんが防災や総合的な探究の時間などに取り組むことをとおして、自分の力がどれだけ身に付いたのかについて答えてもらうためのものです。問１から問 10 の各質問をよく読んで、当てはまるものを「４」～「１」の数字から選んで、数字に「○」を付けてください。

また、なぜその数字を選んだのかについて、その理由を「理由」の枠の中に書いてください。

なお、問 10 は、例を参考にして記入してください。

回答する数字の意味は、以下のようになっています。
〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

【質問項目】

１　あなたは、学習活動をとおして、計画を立てて取り組み、それを実践する力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

２　あなたは、学習活動をとおして、地域の魅力や良さを理解する力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

３　あなたは、学習活動をとおして、地域のために活動できる力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

４　あなたは、学習活動をとおして、地域の人々の思いや願いを理解する力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

次のページに進んでください。

5　あなたは、学習活動をとおして、地域の魅力や良さを、他の地域の人に自分の言葉で伝えることができる力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

6　あなたは、学習活動をとおした聞き取りや情報収集により、課題が存在する背景を考え、解決に向けた方法を考え出す力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

7　あなたは、学習活動をとおして、自分とは異なる立場の人（幼児や児童・高齢者・自分とは異なる性別・外国人など）のことを意識して、課題解決策を提案する力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

8　あなたは、学習活動をとおして地域の厳しい現実を把握し、それをよい方向に変えようと解決策の提案や実践を行う力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

9　あなたは、学習活動をとおして、高校卒業後も何らかの形で地域の課題解決に関わる力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

質問は以上です。ご協力ありがとうございました

資料３-1　防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート（９月実施分・１月実施分　数値のみ）

指定事業効果測定アンケート			（生徒対象　R4__9月）						（生徒対象　R5__1月）					
問	設問	学年	4	3	肯定計	2	1	否定計	4	3	肯定計	2	1	否定計
問1	あなたは、学習活動をとおして、計画を立てて取組み、それを実践する力が身に付いたと思いますか。	1年	30.0%	50.0%	80.0%	20.0%	0.0%	20.0%	9.5%	57.1%	66.7%	23.8%	9.5%	33.3%
		2年	16.7%	46.7%	63.3%	30.0%	6.7%	36.7%	3.6%	53.6%	57.1%	32.1%	10.7%	42.9%
		3年	18.5%	66.7%	85.2%	14.8%	0.0%	14.8%	23.1%	50.0%	73.1%	26.9%	0.0%	26.9%
問2	あなたは、学習活動をとおして、地域の魅力や良さを理解する力が身に付いたと思いますか。	1年	45.0%	30.0%	75.0%	25.0%	0.0%	25.0%	38.1%	52.4%	90.5%	9.5%	0.0%	9.5%
		2年	30.0%	46.7%	76.7%	16.7%	6.7%	23.3%	25.0%	46.4%	71.4%	25.0%	3.6%	28.6%
		3年	25.9%	51.9%	77.8%	22.2%	0.0%	22.2%	23.1%	65.4%	88.5%	11.5%	0.0%	11.5%
問3	あなたは、学習活動をとおして、地域のために活動できる力が身に付いたと思いますか。	1年	35.0%	35.0%	70.0%	30.0%	0.0%	30.0%	23.8%	52.4%	76.2%	19.0%	4.8%	23.8%
		2年	26.7%	43.3%	70.0%	26.7%	3.3%	30.0%	21.4%	28.6%	50.0%	39.3%	10.7%	50.0%
		3年	22.2%	51.9%	74.1%	25.9%	0.0%	25.9%	19.2%	53.8%	73.1%	26.9%	0.0%	26.9%
問4	あなたは、学習活動をとおして、地域の人々の思いや願いを理解する力が身に付いたと思いますか。	1年	30.0%	50.0%	80.0%	20.0%	0.0%	20.0%	23.8%	57.1%	81.0%	19.0%	0.0%	19.0%
		2年	24.1%	55.2%	79.3%	17.2%	3.4%	20.7%	21.4%	35.7%	57.1%	39.3%	3.6%	42.9%
		3年	14.8%	44.4%	59.3%	40.7%	0.0%	40.7%	19.2%	53.8%	73.1%	26.9%	0.0%	26.9%
問5	あなたは、学習活動をとおして、地域の魅力や良さを、他の地域の人に自分の言葉で伝えることができる力が身に付いたと思いますか。	1年	15.0%	30.0%	45.0%	50.0%	5.0%	55.0%	4.8%	57.1%	61.9%	23.8%	14.3%	38.1%
		2年	30.0%	30.0%	60.0%	30.0%	10.0%	40.0%	21.4%	39.3%	60.7%	32.1%	7.1%	39.3%
		3年	15.4%	50.0%	65.4%	30.8%	3.8%	34.6%	26.9%	53.8%	80.8%	19.2%	0.0%	19.2%
問6	あなたは、学習活動をとおした聞き取りや情報収集により、課題が存在する背景を考え、解決に向けた方法を考え出す力が身に付いたと思いますか。	1年	25.0%	55.0%	80.0%	20.0%	0.0%	20.0%	19.0%	42.9%	61.9%	33.3%	4.8%	38.1%
		2年	23.3%	50.0%	73.3%	26.7%	0.0%	26.7%	10.7%	53.6%	64.3%	32.1%	3.6%	35.7%
		3年	23.1%	53.8%	76.9%	23.1%	0.0%	23.1%	19.2%	57.7%	76.9%	23.1%	0.0%	23.1%
問7	あなたは、学習活動をとおして、自分とは異なる立場の人（幼児や児童・高齢者・自分とは異なる性別・外国人など）のことを意識して、課題解決策を提案する力が身に付いたと思いますか。	1年	20.0%	65.0%	85.0%	15.0%	0.0%	15.0%	19.0%	42.9%	61.9%	33.3%	4.8%	38.1%
		2年	34.5%	34.5%	69.0%	31.0%	0.0%	31.0%	21.4%	39.3%	60.7%	28.6%	10.7%	39.3%
		3年	30.8%	46.2%	76.9%	23.1%	0.0%	23.1%	26.9%	57.7%	84.6%	15.4%	0.0%	15.4%
問8	あなたは、学習活動をとおして地域の厳しい現実を把握し、それをよい方向に変えようと解決策の提案や実践を行う力が身に付いたと思いますか。	1年	15.8%	63.2%	78.9%	21.1%	0.0%	21.1%	9.5%	57.1%	66.7%	23.8%	9.5%	33.3%
		2年	17.9%	50.0%	67.9%	28.6%	3.6%	32.1%	25.0%	32.1%	57.1%	35.7%	7.1%	42.9%
		3年	26.9%	46.2%	73.1%	26.9%	0.0%	26.9%	19.2%	57.7%	76.9%	23.1%	0.0%	23.1%
問9	あなたは、学習活動をとおして、高校卒業後も何らかの形で地域の課題解決にかかわる力が身に付いたと思いますか。	1年	26.3%	31.6%	57.9%	42.1%	0.0%	42.1%	19.0%	52.4%	71.4%	23.8%	4.8%	28.6%
		2年	29.6%	48.1%	77.8%	14.8%	7.4%	22.2%	7.1%	53.6%	60.7%	28.6%	10.7%	39.3%
		3年	25.0%	29.2%	54.2%	41.7%	4.2%	45.8%	23.1%	53.8%	76.9%	19.2%	3.8%	23.1%

選択肢：4「強くそう思う」・3「ややそう思う」・2「あまりそう思わない」・1「まったくそう思わない」

資料３-2　防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート（令和２年度～令和４年度　各１月実施分　数値のみ）

指定事業効果測定アンケート			（生徒対象　R3__1月）						（生徒対象　R4__1月）						（生徒対象　R5__1月）					
問	設問	学年	4	3	肯定計	2	1	否定計	4	3	肯定計	2	1	否定計	4	3	肯定計	2	1	否定計
問1	あなたは、学習活動をとおして、計画を立てて取組み、それを実践する力が身に付いたと思いますか。	1年	25.0%	53.6%	78.6%	21.4%	0.0%	21.4%	16.6%	53.1%	71.9%	28.1%	0.0%	28.1%	9.5%	57.1%	66.7%	23.8%	9.5%	33.3%
		2年	12.9%	48.4%	61.3%	32.3%	6.5%	38.7%	17.9%	64.3%	82.1%	17.9%	0.0%	17.9%	3.6%	53.6%	57.1%	32.1%	10.7%	42.9%
		3年	20.0%	50.0%	70.0%	20.0%	10.0%	30.0%	35.7%	57.1%	92.9%	7.1%	0.0%	7.1%	23.1%	50.0%	73.1%	26.9%	0.0%	26.9%
問2	あなたは、学習活動をとおして、地域の魅力や良さを理解する力が身に付いたと思いますか。	1年	35.7%	53.6%	89.3%	10.7%	0.0%	10.7%	34.4%	28.1%	62.5%	34.4%	3.1%	37.5%	38.1%	52.4%	90.5%	9.5%	0.0%	9.5%
		2年	25.8%	54.8%	80.6%	19.4%	0.0%	19.4%	28.6%	57.1%	85.7%	14.3%	0.0%	14.3%	25.0%	46.4%	71.4%	25.0%	3.6%	28.6%
		3年	15.0%	60.0%	75.0%	15.0%	10.0%	25.0%	39.3%	53.6%	92.9%	7.1%	0.0%	7.1%	23.1%	65.4%	88.5%	11.5%	0.0%	11.5%
問3	あなたは、学習活動をとおして、地域のために活動できる力が身に付いたと思いますか。	1年	32.1%	39.3%	71.4%	28.6%	0.0%	28.6%	28.1%	37.5%	65.6%	28.1%	6.3%	34.4%	23.8%	52.4%	76.2%	19.0%	4.8%	23.8%
		2年	25.8%	54.8%	80.6%	19.4%	0.0%	19.4%	17.9%	50.0%	67.9%	28.6%	3.6%	32.1%	21.4%	28.6%	50.0%	39.3%	10.7%	50.0%
		3年	25.0%	45.0%	70.0%	25.0%	5.0%	30.0%	32.1%	53.6%	85.7%	14.3%	0.0%	14.3%	19.2%	53.8%	73.1%	26.9%	0.0%	26.9%
問4	あなたは、学習活動をとおして、地域の人々の思いや願いを理解する力が身に付いたと思いますか。	1年	28.6%	28.6%	57.1%	42.9%	0.0%	42.9%	16.1%	41.9%	58.1%	35.5%	6.5%	41.9%	23.8%	57.1%	81.0%	19.0%	0.0%	19.0%
		2年	19.4%	48.4%	67.7%	32.3%	0.0%	32.3%	21.4%	50.0%	71.4%	28.6%	0.0%	28.6%	21.4%	35.7%	57.1%	39.3%	3.6%	42.9%
		3年	10.0%	50.0%	60.0%	30.0%	10.0%	40.0%	28.6%	60.7%	89.3%	10.7%	0.0%	10.7%	19.2%	53.8%	73.1%	26.9%	0.0%	26.9%
問5	あなたは、学習活動をとおして、地域の魅力や良さを、他の地域の人に自分の言葉で伝えることができる力が身に付いたと思いますか。	1年	25.0%	32.1%	57.1%	35.7%	7.1%	42.9%	22.6%	32.3%	54.8%	35.5%	9.7%	45.2%	4.8%	57.1%	61.9%	23.8%	14.3%	38.1%
		2年	16.1%	29.0%	45.2%	51.6%	3.2%	54.8%	17.9%	39.3%	57.1%	39.3%	3.6%	42.9%	21.4%	39.3%	60.7%	32.1%	7.1%	39.3%
		3年	20.0%	35.0%	55.0%	40.0%	5.0%	45.0%	28.6%	50.0%	78.6%	21.4%	0.0%	21.4%	26.9%	53.8%	80.8%	19.2%	0.0%	19.2%
問6	あなたは、学習活動をとおした聞き取りや情報収集により、課題が存在する背景を考え、解決に向けた方法を考え出す力が身に付いたと思いますか。	1年	25.0%	57.1%	82.1%	17.9%	0.0%	17.9%	25.8%	38.7%	64.5%	32.3%	3.2%	35.5%	19.0%	42.9%	61.9%	33.3%	4.8%	38.1%
		2年	22.6%	54.8%	77.4%	22.6%	0.0%	22.6%	7.1%	64.3%	71.4%	28.6%	0.0%	28.6%	10.7%	53.6%	64.3%	32.1%	3.6%	35.7%
		3年	15.0%	35.0%	50.0%	40.0%	10.0%	50.0%	21.4%	71.4%	92.9%	7.1%	0.0%	7.1%	19.2%	57.7%	76.9%	23.1%	0.0%	23.1%
問7	あなたは、学習活動をとおして、自分とは異なる立場の人（幼児や児童・高齢者・自分とは異なる性別・外国人など）のことを意識して、課題解決策を提案する力が身に付いたと思いますか。	1年	25.0%	53.6%	78.6%	17.9%	3.6%	21.4%	25.8%	32.3%	58.1%	41.9%	0.0%	41.9%	19.0%	42.9%	61.9%	33.3%	4.8%	38.1%
		2年	25.8%	51.6%	77.4%	22.6%	0.0%	22.6%	25.0%	46.4%	71.4%	25.0%	3.6%	28.6%	21.4%	39.3%	60.7%	28.6%	10.7%	39.3%
		3年	15.0%	40.0%	55.0%	35.0%	10.0%	45.0%	25.0%	64.3%	89.3%	7.1%	3.6%	10.7%	26.9%	57.7%	84.6%	15.4%	0.0%	15.4%
問8	あなたは、学習活動をとおして地域の厳しい現実を把握し、それをよい方向に変えようと解決策の提案や実践を行う力が身に付いたと思いますか。	1年	14.3%	32.1%	46.4%	46.4%	7.1%	53.6%	21.9%	31.3%	53.1%	40.6%	6.3%	46.9%	9.5%	57.1%	66.7%	23.8%	9.5%	33.3%
		2年	16.1%	54.8%	71.0%	29.0%	0.0%	29.0%	17.9%	53.6%	71.4%	28.6%	0.0%	28.6%	25.0%	32.1%	57.1%	35.7%	7.1%	42.9%
		3年	10.0%	45.0%	55.0%	30.0%	15.0%	45.0%	32.1%	57.1%	89.3%	10.7%	0.0%	10.7%	19.2%	57.7%	76.9%	23.1%	0.0%	23.1%
問9	あなたは、学習活動をとおして、高校卒業後も何らかの形で地域の課題解決にかかわる力が身に付いたと思いますか。	1年	25.0%	39.3%	64.3%	32.1%	3.6%	35.7%	13.3%	46.7%	60.0%	30.0%	10.0%	40.0%	19.0%	52.4%	71.4%	23.8%	4.8%	28.6%
		2年	19.4%	51.6%	71.0%	22.6%	6.5%	29.0%	14.3%	39.3%	53.6%	46.4%	0.0%	46.4%	7.1%	53.6%	60.7%	28.6%	10.7%	39.3%
		3年	10.0%	45.0%	55.0%	30.0%	15.0%	45.0%	32.1%	60.7%	92.9%	7.1%	0.0%	7.1%	23.1%	53.8%	76.9%	19.2%	3.8%	23.1%

選択肢：4「強くそう思う」・3「ややそう思う」・2「あまりそう思わない」・1「まったくそう思わない」

資料４　肯定的評価における記述のカテゴリー別の分類（抜粋）

【1 年生】

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
経験・行動	テントを立てたりしたことで、より身近に災害が起こったときのことを考えられるようになった。 防災の学習をした後に、防災バックを用意した。 警察が避難訓練の協力をしたり、地域の方々が防災バックを預けたり地域との関わりを実感した。 計画は毎回上手く行かないが、前よりかは計画を立てて実行できた。 提出日までに仕上げるため、逆算しながら計画を立てて行動した。 テスト期間のときの予定表を作ったりして計画を立てることができた。 地域学でこんな情報があったら地域の人が逃げ切れるなと思う情報を、自分たちが伝える活動ができた。 実際に地域の方に話を聞くなど、地域の方の願いや思いを直接聞くことができた。 地域学で、高齢者のスピードで避難すると間に合うのかという活動をした。 外国人と防災のことを知る機会があり、様々な面で教えあったりできた。 海に近い町というか、海と共に過ごすこの町の自然豊かさや自然と向き合う思いがより実感できた。 地域の特徴を理解することができた。 実際、講師にインタビューをしてみて”高知県の魚への思い”が凄く伝わってきた。砂浜美術館ができるまでの経緯などを実際に知ることができた。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
成長実感	地域学でどうすれば高齢者も津波から逃げることができるかなどを考えられるようになった。 人前で喋れるようになった。声が落ち着いたと思う。相手を見て相手のことを考えることができるようになった。 視野がとても広がった。今まで自分とその周りぐらいだったが、今は地域、日本、世界の大きさで考えることがどんどん増えていったと思う。このことから、自分はすごく成長したと思う。 前までは本当に計画を立てて取り組むことはできていなかったけど、計画を立てて、そして実践するということができるようになっているのではないかと感じる。 もしものときを日頃から考え行動するという実践力が身に付いたと思う。 僕は人との関わりは嫌いだったけど、この学校に入ってからはどんどん好きになった。 一人一人の課題と向き合う姿勢が大切だと知ることができた。 総合的な探究の時間、みんなの前でプレゼンをしたりして人前で話すのはまだ得意とまではいかないけど、自分の言葉で伝えることができる力は前よりは少し身に付いたと思う。 良い方向だけではなく悪い方向の原因も考えることができた。 この地域にはあまり資源はなかったと思っていたが、講師さんの話などを聞いて、何に価値を生み出すかで０から１００にでも１０００にでもできると分かった。だから、そんな話を自分に吸収して提案、実践できる力が少し付いたと思う。 卒業後、地域で関わりがあるか分からないけど、少しは身に付いたと思う。 以前は防災について基本的なことは習ったりしていたけど、現在は地域学を学び専門家の人から深いことを学べるので防災に対する知識が深まった。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
成長実感	物事の良い点に目を向けられるようになった。 言語化する機会が増えたことで表現の幅が広がった。 考えるということが昔に比べ、できるようになったと思う。 以前は初対面の大人とか外国人と会話をするとき消極的になっていたけど、現在は地域学で、大人や他校の高校生、高齢者や外国人と関わる機会が増え、自分から話をすることができるようになり、コミュニケーション力が高くなった。 前までは、人前で話すことに凄く抵抗があったけど、少しなくなった気がする。 インタビューをしたりしたことから話を聴く力がアップしたと思う。 防災の知識をある程度知ることができた。 自分の考えを話すことに抵抗がなくなった。 地域の方々のたくさんお話を聞いて、地域のことや地域のためになることについて考えることが増えた。 兵庫の大学の人との防災の話し合いを通して考えられた。 黒潮町の課題を考えたとき、町民には高齢者が多く、必然的に色々な立場の方を考えることが定着した。 高齢者の気持ちになったときに高齢者には難しいことを見つけて、提案できた。 今までは、読むだけだったが更に自分で考えて興味をもち、深く知ろうとすることができるようになった。この地域には何があって何がないのかという地域にプラスなことを考えることができるようになった。 授業内では肯定的な意見を交換する場が多く、地域の魅力や良さなど、良い点を見つけて言語化することができた。 ケースのことを読み、構造化をして自分なりの考え方や解釈を見つけることができた。 自分の考えだけでなく、他の人の目線でも考えて多角的にみることが少しできるようになった。 自分のことだけ考えていたら失敗ばかりするが他の人のことを考えながら進めるとどんな課題があるのかなどが見えてくるようになった。 これから地域をどう盛り上げていくかを考え実践する力が身に付いた。 自分の考えを発表や文字にするなどの活動も多く、それらを通して自分の考えを主張することが少しだができるようになった。また、プレゼンテーションを通して人前で話すということに対する抵抗もかなり減ったと思う。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
思考活動	作文などを書いたことで、どうやって地域の貢献していくのかを言葉、または文章にして考えることができた。 アイデアソンなどで色々な人と関わりながら地域の課題解決に向けて考えることができた。また、地域の良さを広げる方法も考えることができた。 総合的な探究の時間や防災 day など、地域と深く関わる学習が多く、地域の知らなかった面や良さを知り、それについて考えた。 地域の人のニーズや地域の課題を考えたりすることができた。 自分たちではなく、地域の人はどうなのか、様々な立場で考えた。 地域の問題点を洗い出し、それを解決するために自分たちができることを考えた。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
気づき・理解	まだまだ地元の良さを言葉で伝わりやすく表現するには難しいところもあるなと思った。 少子高齢化を背景に考えたとき、自分たちの世代のあらゆる視点からの考えがこれからの社会を大きく変えていく重要なことだと学んだ。 特にコミュニケーションの力が地域の課題解決に役立つと思った。 自然が綺麗（海が綺麗）なところなど地域の魅力はたくさんあると思うので、頑張れば伝えることができるのではないかと思った。 地域学に入っていると、今、高知県、黒潮町がどれほど危険なのかが分かり、僕はこの町を、人を守りたいと思うようになった。 地域のよさや魅力を知れた。 アプリを使っての避難路検証など、地域の人たちと取り組む町全体の協力と一体感を知ることができた。 課題は一言で言うのはすごく簡単だが、これを可能にするのは地域の人の協力、行政の協力などが必要と分かった。 活動していくなかで、黒潮町は地域の人が住みやすい環境になるように頑張っていると理解できた。 地域活性化のために何したら良いのは分かった。 多くの人の話を聞いたりケースを読んだりすることで地域に対する思いが大きくなった。 思っていた以上にみんなの思うことは一致していることが多数あり、その解決策はすぐ足元にあることも多いと思った。まずは相手に寄り添い一緒に考えることが解決の第一歩だと分かった。 海外の人と交流し、言語が伝わらなくてもジェスチャー等を用いて課題に対して提案し、ともに解決していくことができた。 自分と同じように、海やこの地域の景色に憧れている人がいると分かった。そんな人の意見や、この地域を愛している人の意見を聞き、自分の思うことを更に深めている人がいたり、逆に違った目線で見ている人がいたりすると分かった。それを聞いて自分の自信につながり、自分の思うことをもっと視野を広げて言葉で表現できるようになったと思う。 黒潮町は海が近いので地震が起きて津波が来たときに高齢者は速く走れないので、困っていることが分かった。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
意欲向上	自分だけでなく不安な人が沢山いると思うので、知識をもって冷静に向き合いたい。 地域がもっと良くなるようにしたいと思うようになった。 ボランティアなどに積極的に、参加しようという試みが出てきた。 高校生ができることはやりたい。 厳しいことでも解決していくために提案をどんどんしていきたい。 社会に出て場所が変わっても、違った課題に直面すると思うが、解決していきたい。 自分の地元で働くことは考えてないけど、いつまでも地元を誇りに思っていきたいと強く思った。 地域は人が集まり助け合うところだから、そこに参加して生きていきたい。輪に入って生きて生きたい。

【２年生】

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
経験・行動	期限があるものに対しては、やらないといけないものを、うまくコントロールし、期限に間に合わすことができた。 総合的な探究の時間ではとても計画的、段階的に学習できた。 防災などいろんなボランティアに参加できた。 地域学や防災で交流を多くしてきた。 総合的な探究の時間で地域に関することをしている。 学習するときにいろんな人が講師として来てくれた。 地域学で要配慮者や人権について調べた。 多くの人と関わり、多様な考え方や価値観を学ぶことができた。 周りの大人（先生やその他の人）が協力してくれている。 自分たちでアンケートなどやることを考えて実行できた。 なぜその課題が生まれたかという根っこを突き詰めることができた。 学習の中で、インタビュー等を行うなどしてきたことで、地域の方のリアルな思いに触れる機会が多く、共感できる瞬間を何度も経験した。 地域のことについて調べて友だちと話すことができた 自分が住んでいる黒潮町の魅力をよく理解した。 自分と異なる立場の人のことを意識して調べ学習できた。 色々な立場の人の視点から考えることができた。 地域学等で要配慮者についてたくさん学べた。 県外での活動や、リモートで黒潮町の魅力＋防災活動などを伝える機会がたくさんあった。 困っていたら助けるを大切にしている。 根拠や意味をもって、情報収集を行うことができた。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
成長実感	人前で発表することが苦手だったけど、県外に行ったり、色んな人とリモートでつながったりするなどの交流を行って、人前で発表することが少しだけ楽になった。 思いや願いを理解する力が身に付き、先生等からの直しや、分からないと迷うシーンが減った。 地域のことについて今まで以上に深く考えることができるようになった。 自分の気持ちなどをより分かりやすく伝えられるようになった。 小規模サミットなど、外の活動を通じて力を身に付いていると思う。 プレゼン資料をまとめたり、校外での発表をしたりする活動を通して、自分が一番伝えたいことは何かをまとめられるようになった。 学習していくなかで、見つけた良いところを少しずつだけど、しっかりアウトプットできるようになった。 今までは、探究学習ってどう取り組めばいいのか、どうやって構成すればいいのか分からなかったけど、今では少しできるようになった。 様々な視点から情報収集を行い、現状分析をすることで、課題が存在する背景を考えるようになった。 自分の考えを言語化し、相手に伝えるために様々なアプローチを考えられるようになったと思う。 根拠がちょっと強くなった。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
成長実感	発表する度に改善点を見つけ出し、最後は納得がいくような資料にその場で変更することができるようになった。 今までは適当に聞き流していたけど、一つ一つ理解しながら頭に入れることができるようになった。 以前は自分の考えを積極的に主張することがあまりできずにいたけど、学習を繰り返す中で、的確な言葉を使い、自分の考えを整理しながら、相手に分かりやすく伝えられるようになったと思う。 情報収集ができるようになった。以前は自分や周りの意見だけで情報を集めていた。 一人で考えるではなく少しは人の手を借りるということを教わった。そして課題に対して考えすぎることがあったので冷静に考えることが少しだけできるようになった。 粘り強く策を考えたりすることができるようになった。 多角的な視点をもって考えることができるようになってきた。 地域のことをよく知り、さらに課題解決をする知識が身に付いてきた。 自分の見つけ出した課題を他の人に伝わりやすいようにプレゼンする力が身についた。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
思考活動	地域の人達から話を聞き、黒潮町の未来のことについて考えた。 アンケートをしてみて地域の人が何を思っているのかを知り、解決方法を考えた。 様々な立場の特徴を理解し、ターゲットを考えることができた。 立場が違う相手には、その人の暮らす環境に合わせて、しっかり違いを理解したいうえで、手法等を考えることができた。 いろんな人に提案をするなどたくさん解決策を考えてきた。 地域のために何が必要なのかを思考しながら、課題解決等の活動に取り組めたと思う。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
気づき・理解	砂浜美術館などの魅力を知ることができた。 「魅力を伝える」にもたくさんのアプローチがあることを学べた。 異性婚や LGBTQ＋について理解することができた。 自分が住んでいる黒潮町の魅力（砂浜美術館、T-shirt アート展）を理解して、親しむ事ができた。 いろんな立場にいる人の視点から考えることができたと思う。 地域の人へのインタビューをとおして生の声を聞き、理解することにつながった。 実際に聞いてみないと分からないことが思っていたよりたくさんあることが分かった。 解決策が偏ってはいけないことを知った。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
意欲向上	地域を良くしていきたいと思うようになった。 情報収集力が足らないのでもっと効率的に情報を収集する方法を勉強したいと思うようになった。 以前よりは積極的に地域の力になろうという気持ちになれた。

【３年生】

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
経験・行動	今までできなかったことができるようになった。 総合のディベートで、情報を集め順序良く立論をすることができた。 ディベートで情報を集めるときに、メリット、デメリットの理由にある背景を探すことができた。 計画を立てて取組実践できた。 地域の人たちと協力して様々なことができた。 ボランティアに何度か参加して、地域の役に立てた。 新しい避難場所を整備した。 地域の人の考えや意見を聞き、解決方法を探した。 自分がプレゼンをしたことで、魅力を伝えることができた。 外部の人に発表について意見をもらえた。 総合的な探究の時間の時間にアンケートをとったりした。 オリジナル HUG 等を外国の方と行ったときにどうすれば伝わるのかを考え自分なりに努力した。 自分とは異なる立場の人の思いを間接的に理解し、どうすれば解決できそうなのかを想像することができた。 一人一人のかかえる問題が違うから立場を考えて解決策を出すようにした。 コミュニケーション力など、いろいろな力が身に付いたので、それを卒業後も生かしていきたい。 十分な知識を得て実際の行動に移すことができた。 地域学や総合的な探究の時間の中で課題を解決するために計画を立てることができた。 課題を見つけたり、情報収集をして取り組んだ。 地域の人と話し、魅力や良さについて話す機会が何度もあった。 アイデアスケッチで実際に地域の人と交流できた。 地域学で役場からの依頼などを受けた。 メモワールで自分が思う気持ちが伝えられた。 プレゼン発表などによって、どう言葉で表せばよいのかという表現力が身に付いた。 課題を見つけるときに異なる立場の人のことを考えて課題を設定した。 JICA の活動の中で外国人との交流をした。 防災士等の試験にチャレンジした。 黒潮町にはたくさんの魅力があり、それを地域の人たちと学び、他の国の人にも伝えられた。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
成長実感	外部の方への発表をするときに、以前は伝えたい部分まで省いてしまっていたけど、今は伝えたい部分を残したうえで発表できるようになった。 地域学や総合的な探究の時間を通して、課題解決力が身に付いた。 計画を立てるのが苦手でやってなかったけど、できるようになった。 今までに習った情報のまとめ方を理解して用いることができ、良いところをまとめることができた。 一方向から１つのメリットのみあげて、行動はせず、できるだけ多くの方向から物事を見て判断ができるようになってきた。 先を見て日数を考慮してスケジュールを立てて、勉強に取り組めるようになった。 地域の良さを自分の体験や周りの環境からまとめ上げることができ、それを言語化して伝えることができた。 情報をまとめたり発表したりする力が付いた。 地域の魅力や良さを伝えるということをやっていないが、自分の言葉で生徒や先生に自分の思いをしっかり伝えられるようになった。 解決策を考えることに苦戦したが、先生にアドバイスをもらい創造力を身に付けられた。 黒潮町の目標、犠牲者０に向けて、課題解決策を考え、取り組むことができた。 地域の人達と合同で避難訓練をして危険なところを探すことができた。 地域の人の話を聞いてそこからアイデアを膨らますことができた。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
成長実感	少なくとも、こういう場面でどうすれば良いかという思考力が身に付いたため。 学習を通して、インタビューなどすることによって地域の人の目線から見られるようになった。 地域の課題解決を考える力が身に付いたと思う。 課題について一つの目線からではなく客観的な目線から考えられるようになった。 自分視点だけでなく他の視点からも情報収集できるようになった。 年代にそった話し方や教え方ができた。 人前で話すことが前よりできるようになったり、みんなとの共同作業が早くなったりしたと思う。 周りを見て先のことを考え、相手の気持ちになって行動することができるようになった。 相手の立場にたって考えることができるようになった。 自分の視点と他者の視点を混ぜながら考えられるようになった。 大人の人など関わりが薄い人の前に出て話すことの抵抗が減った。 前はまとめたり課題自体を見つけるのが苦手だったけど今はできるようになった。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
思考活動	地域学、総合的な探究の時間を通して地域のことを調べ知ることができた。そして、地域の課題をしっかり考えた。 地域の人々はこう思うだろうなということをしっかり考えることができた。 高齢者のことを考えた。 色々な人の立場になって考えた。 黒潮町の人口が減ってきているから、それを改善していくために考えた。 異なる人と関わることでどんなことが困るかを考えた。 地域学で課題を解決する際に地域の問題を考えることができた。 高齢者の方がより暮らしやすくする町等を考えることができた。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
気づき・理解	地域の方と交流したりして地域の良さなどが知れた。 メモワールを書く中で自分が知らない地域の魅力を知ることができた。 メモワールで自分が守りたいものについて調べてみると実は古くからあることが分かり、そのことを他の人に伝えたいと思った。 計画を立てて取り組んだことでうまくいった。 地域学を通して地域に貢献した。 黒潮町の魅力について話せるようになった。 地域の課題を考え、地域の魅力についても知り、理解できた。 オリジナル HUG などで、地域の人達と関わり、思いや願いを考え理解することができた。 ほぼ知らない地域の魅力を地域学で知ることができた。 実際に住んでいる人の意見を聞くことができた。 案外自分がこうなると嬉しいと思っていたことは、周りの人も思っていたりすることに気づけた。 地域の方の願いを理解できた。 地域学の授業とかで地域の人たちの心情が分かりだした。 総合的な探究の時間でアイデアを考える中で課題の背景や現状を沢山調べる知ることができた。 授業で自分と異なる立場の人の話を聞くことが多く、認識の違いについて理解できた。

カテゴリー	主　な　記　述　内　容
意欲向上	高校で課題解決は一方向からでは解決できないことを身をもって知り、その経験を生かそうと思えた。 地域学、総合的な探究の時間でやったことを仕事で生かせると思った。 まだできていないけど就職先が地域だから役には立ちたい。 職場が職場なので高校卒業しても地域のためにするのでもっと身に付くと思う。

資料５　大方高校の地域貢献活動に関する地域住民アンケート

　このアンケートは、以下の目的に基づき地域の皆様のご協力をお願いするものです。ご面倒をおかけしますが、生徒の成長や取組の充実に向けて、皆様のご協力をお願いいたします。

目的：１　大方高校の生徒による地域防災の取組や地域課題解決活動、地域行事への参加などの学習活動やボランティア活動について、地域の皆さんからの評価をいただき取組評価を確認する。
２　生徒の取組をより充実させるために、学校の取組を確認したり改善したりするための資料とする。

【注意事項】
◎回答方法：質問は、以下の（　）問です。各問について当てはまると思う答えを、「４」～「１」のから選び、選んだ数字を［別紙の回答用紙］にご記入ください。
〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない
◎返信方法：同封の封筒（大方高校の住所・学校名を記載している封筒）に回答用紙を入れ、郵送してください。直接学校に届けていただいてもかまいません。

【質問項目】
１　生徒たちが、防災や地域課題解決のための取組を行っていることを知っている。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

２　生徒たちが行う防災の取組は、黒潮町が掲げる「犠牲者０」を目指す思想の実現につながるものでると思う。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

３　生徒たちが防災の取組を行うことで、自分も命を守るために避難しなければならないと意識するようになった。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

４　生徒たちの取組は、地域の防災意識の向上や課題解決に役立っていると思う。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

５　生徒たちの取組は、小学生や中学生の取組に刺激を与えたり、参考になるものであると思う。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

６　生徒たちが取り組む活動は、地域住民が高校の存在を意識するものになっている。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

７　生徒たちの取組は、今後も継続させてほしいと思う。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

８　生徒たちが行った取組を発表する際は、子どもや孫と一緒に発表を聞きに行きたいと思う。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

９　生徒たちが行う取組に対して、地域住民は積極的に協力していると思う。

〔4〕：強くそう思う　〔3〕：ややそう思う　〔2〕：あまりそう思わない　〔1〕：まったくそう思わない

10　大方高校の取組について、提案や意見、感想などがあれば自由にお書きください。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

大方高校は、地域防災や地域課題解決の取組をさらに充実させるとともに、活動をとおして生徒の意欲を引き出し、力を引き出すことをとおして未来の「地域の創り手」人材の育成※（下記を参照ください。）を目指します。

今後とも皆さんのご協力とご理解をよろしくお願いいたします。

※ 未来の「地域の創り手」人材とは、高校や大学等を卒業して地元に住み、地元の活性化に貢献する者・一度は別の地域で生活するがＵターンして地元の活性化に貢献する者・地元には戻ってこないが居住地で地元への支援（ふるさと納税・帰省時のイベント等への参加や協力など）をしたり思いをもって生活（地元のニュースへの反応・住んでいる地域での地元の良さの宣伝等）する者を意味しています。

資料６　大方高校の地域貢献活動に関する地域住民アンケート

指定事業効果測定アンケート		（地域住民対象　R3＿１月）						（地域住民対象　R4＿１月）						（地域住民対象　R5＿１月）					
問	設問	4	3	肯定計	2	1	否定計	4	3	肯定計	2	1	否定計	4	3	肯定計	2	1	否定計
問1	生徒たちが、防災や地域課題解決のための取組を行っていることを知っている。	43.8%	47.2%	91.0%	6.7%	2.2%	9.0%	43.5%	47.5%	91.0%	7.3%	1.7%	9.0%	48.0%	45.7%	93.7%	5.1%	1.1%	6.3%
問2	生徒たちが行う防災の取組は、黒潮町が掲げる「犠牲者０」を目指す思想の実現につながるものでると思う。	52.8%	43.2%	96.0%	4.0%	0.0%	4.0%	52.0%	42.4%	94.4%	5.6%	0.0%	5.6%	44.3%	50.6%	94.8%	5.2%	0.0%	5.2%
問3	生徒たちが防災の取組を行うことで、自分も命を守るために避難しなければならないと意識するようになった。	46.6%	47.7%	94.3%	5.7%	0.0%	5.7%	44.6%	46.9%	91.5%	7.9%	0.6%	8.5%	47.1%	46.6%	93.7%	5.7%	0.6%	6.3%
問4	生徒たちの取組は、地域の防災意識の向上や課題解決に役立っていると思う。	54.6%	43.1%	97.7%	2.3%	0.0%	2.3%	47.5%	45.2%	92.7%	6.2%	1.1%	7.3%	46.3%	50.3%	96.6%	3.4%	0.0%	3.4%
問5	生徒たちの取組は、小学生や中学生の取組に刺激を与えたり、参考になるものであると思う。	50.0%	45.4%	95.4%	4.6%	0.0%	4.6%	51.4%	42.9%	94.4%	5.1%	0.6%	5.6%	40.0%	57.7%	97.7%	2.3%	0.0%	2.3%
問6	生徒たちが取り組む活動は、地域住民が高校の存在を意識するものになっている。	37.9%	50.6%	88.5%	11.5%	0.0%	11.5%	41.8%	44.6%	86.4%	12.4%	1.1%	13.6%	34.3%	60.6%	94.9%	5.1%	0.0%	5.1%
問7	生徒たちの取組は、今後も継続させてほしいと思う。	79.0%	19.3%	98.3%	1.7%	0.0%	1.7%	70.1%	28.2%	98.3%	1.7%	0.0%	1.7%	66.3%	33.1%	99.4%	0.6%	0.0%	0.6%
問8	生徒たちが行った取組を発表する際は、子どもや孫と一緒に発表を聞きに行きたいと思う。	23.6%	64.4%	87.9%	10.9%	1.1%	12.1%	31.6%	56.5%	88.1%	11.9%	0.0%	11.9%	24.6%	61.7%	86.3%	12.6%	1.1%	13.7%
問9	生徒たちが行う取組に対して、地域住民は積極的に協力していると思う。	12.6%	62.3%	74.9%	25.1%	0.0%	25.1%	16.4%	59.3%	75.7%	23.7%	0.6%	24.3%	11.6%	63.0%	74.6%	24.9%	0.6%	25.4%

選択肢：4「強くそう思う」・3「ややそう思う」・2「あまりそう思わない」・1「まったくそう思わない」

資料７　地域住民の方からのコメント

○　県外学習に行ったりしているので、行った人だけでなく小中学生や地域の人へ報告する場があればよりいいと思います。IWK 等。

○　学業に部活動、そして地域貢献を行っている大方高校の生徒さんが黒潮住民としてとても誇らしいです。地域でも協力できることがあればもっと発信して欲しいです。

○　元々避難することへの意識は強くあったので、生徒さんの取組で強く感じることはないように思います。

○　小学生とも共同で防災活動をしてほしいです。ご苦労様です。

○　どのようなことを言ってどのような結果につながったか。具体的に知りたいと思う。

○　大方高校の生徒さんが、地域活動へ積極的に取り組まれており、大変素晴らしいと感じております。ぜひ、これからも様々な活動に挑戦していってもらえたらと思います。

○　高校生がこのような取り組みをすることで、下（小・中学生）からも上からも注目されると思うので継続して欲しいです。

○　継続することが大切と思いますので、これからも防災への取組を頑張ってください。

○　生徒たちは頑張っているのに、それが地域にあまり伝わっていないと思う。

○　大方高校の取組を地域だけでなく県外へどんどんアピールしていってほしいです。

○　防災や地域活性化など、幅広い分野で新しい自由な発想や意見を今後も出してほしい。

○　行政側の課題でもありますが、地域と「つなぐ」部分でまだまだ行政としてできる部分は多いと思いますので…引き続き連携した取組ができるよう努めます。

○　地域に密着した取組は今後も今以上に続ければいいと思う。ほかの高校に比べて”強み”になると思う。

○　高校生でありながら、地元の人と深く関わることで、よいこともたくさんあると思う。
（例）人と話すのに慣れる（しゃべりのスキルアップ）、地元に興味をもつ（好きになる）など

○　各地域の避難訓練などで学生が考える共助の取組を実際に入って提案し、地域での実践を重ねていけば、動く人も増加すると思う。

○　これからも地域とと共に色々な事に取り組んでいただきたいです。
○　生徒のみなさんが地域に入ってくれることは、地域にとってもうれしいことと思います。
○　大方高校の取組は、特に入野地区に熱が伝わっていると思う。ただ、佐賀地域などにどう伝わっているか分からない。黒潮町全体…となっているのか気になる。
○　ボランティア活動も含め、生徒たちの行動力は素晴らしいと思います。

文部科学省指定事業
令和４年度　地域との協働による高等学校教育改革推進事業　地域魅力化型
研究開発報告書　第３年次

令和５年３月発行
発行者：高知県立大方高等学校
〒７８９－１９３１　高知県幡多郡黒潮町入野５５０７
TEL：０８８０－４３－１０７９　　FAX：０８８０－４３－１３７９
E-mail：ogata-h@kochinet.ed.jp

夢見るちからある限り

たゆまぬ努力ある限り